

新年の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1	明治27年	新年の部	東三省王の元日晴れたりな	元日	時候
2	明治27年	新年の部	元日の月代青き捕虜かな	元日	時候
3	明治27年	新年の部	赫奕と画棟の初日龍動く	初日	天文
4	明治27年	新年の部	初日出や清涼殿の御屏風	初日	天文
5	明治27年	新年の部	金鞍の登城まばゆき初日かな	初日	天文
6	明治27年	新年の部	猿引の猿と寝てゐる木賃かな	猿廻し	人事
7	明治27年	新年の部	やり羽子や妻戸あけたる京女	羽子板	人事
8	明治27年	新年の部	藪入のかゝれとてしも念佛かな	藪入	人事
9	明治27年	新年の部	のりものゝ簾かゝげて若菜かな	若菜	植物
1011	明治30年	新年の部	屠蘇と云ふなるは草根木皮かな	屠蘇	人事
1815	明治31年	新年の部	塀側の手毬つくべく乾きたる	手毬	人事
1816	明治31年	新年の部	学校に手毬赤きが多きかな	手毬	人事
1817	明治31年	新年の部	妹の姉は縫ひ居る手毬哉	手毬	人事
1818	明治31年	新年の部	境内や日當る方に手毬賣	手毬	人事
1819	明治31年	新年の部	窓の日や手毬の唄の夢心	手毬	人事
1820	明治31年	新年の部	凡そ元旦ばかり嬉しきはなし	元旦	時候
1821	明治31年	新年の部	元日の納言参議年わかき	元日	時候
1822	明治31年	新年の部	元日の一門悉く列太夫	元日	時候
1823	明治31年	新年の部	犬の子の三ツ生れたり今朝の春	初春	時候
1824	明治31年	新年の部	元日を一子の愚かなるがあり	元日	時候
1825	明治31年	新年の部	暮れんとす雪ともならで二日空	二日	時候
1826	明治31年	新年の部	海山の二日は風となりはげし	二日	時候
1827	明治31年	新年の部	寝さめして正月二日心かな	二日	時候
1828	明治31年	新年の部	里に住で正月二日家に在り	二日	時候
1829	明治31年	新年の部	詩に周南小松引くべく二人かな	小松引	人事
1830	明治31年	新年の部	之子こゝに嫁ぎて摘める若菜かな	若菜摘み	人事
1831	明治31年	新年の部	松の内雪ふりつゞく何の兆	松の内	時候
1832	明治31年	新年の部	家二三松の内とも見えぬかな	松の内	時候
1833	明治31年	新年の部	豊葦原瑞穂の国の雑煮哉	雑煮	人事
1834	明治31年	新年の部	朱の椀や雑煮の一家二十餘口	雑煮	人事
1835	明治31年	新年の部	帰化人の蓬萊かさる今年より	蓬萊	人事
1836	明治31年	新年の部	蓬萊や障子あくれば安房上総	蓬萊	人事
1837	明治31年	新年の部	君が代や刑措いて用ゐず嫁が君	嫁が君	動物
1838	明治31年	新年の部	異名嫁が君と申すはしたなき	嫁が君	動物
1839	明治31年	新年の部	萬歳を犬の見てゐる戸口かな	萬歳	人事
1840	明治31年	新年の部	雲少し薄く初日を拜み得つ	初日	天文
1841	明治31年	新年の部	初日出に雲かゝるべきを拜み得つ	初日	天文
1842	明治31年	新年の部	元日を一天くもり渡りけり	元日	時候
1844	明治31年	新年の部	年男の事未だ學ばざるなり	年男	人事
2680	明治32年	新年の部	蓬萊にちご這ひ出でし蜜柑か那	蓬萊	人事
2681	明治32年	新年の部	桃咲くや女の子の多き妾腹	桃	植物
2682	明治32年	新年の部	花の如きめの子生れし祝ひか那	花	植物
2683	明治32年	新年の部	葦蒲公英子をいつくしむめをと哉	雑	雑
2684	明治32年	新年の部	子はなくて雛も飾らず暮れにけり	雛	人事
2685	明治32年	新年の部	元日に子供の多き夫婦か那	元日	時候
2686	明治32年	新年の部	塗盆や林檎捧ぐる女の童	林檎	植物
2687	明治32年	新年の部	紫蘇摘むで笊紫や女の子	紫蘇	植物
2688	明治32年	新年の部	人の子は幟立てたることしか那	幟	人事

新年の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2689	明治32年	新年の部	子を抱いて女拝むやお月様	月	天文
2690	明治32年	新年の部	輪飾に暁の風吹く戸口か那	注連飾	人事
2691	明治32年	新年の部	わかさりのさゝやかなるを飾りけり	注連飾	人事
2692	明治32年	新年の部	初鳥水汲にゆく神の井戸	初鳥	動物
2693	明治32年	新年の部	初鳥飛んで行きけり江の東	初鳥	動物
2694	明治32年	新年の部	二階かりて羽子板の画などかいてゐる	羽子板	人事
2695	明治32年	新年の部	羽子板の江戸はちりめん細工かな	羽子板	人事
2696	明治32年	新年の部	福引に一夜さゞめく屋形かな	福引	人事
2697	明治32年	新年の部	福引に芽出たきものを引きあてし	福引	人事
2698	明治32年	新年の部	歯朶青く福藁五尺あまりか那	雑	雑
2699	明治32年	新年の部	山草のさやかに青し神の棚	雑	雑
2700	明治32年	新年の部	大雪の峠越えたる物語り	雪	天文
2701	明治32年	新年の部	大雪の城下夜明けし烟か那	雪	天文
2702	明治32年	新年の部	濱風や小石にまじる蛎の殻	蛎	動物
2703	明治32年	新年の部	磯村やかきから光る夜半の月	蛎	動物
2704	明治32年	新年の部	袴はいて宮の煤掃く男か那	煤拂	人事
2705	明治32年	新年の部	煤掃の日暮れて帰る主人か那	煤拂	人事
2706	明治32年	新年の部	いさゝかの蕪も引いてしまひけり	蕪引	人事
2707	明治32年	新年の部	蕪引大根引に異ならず	蕪引	人事
2709	明治32年	新年の部	既にして天の岩戸を明の春	初春	時候
2710	明治32年	新年の部	交りは古き頭巾を笑ひけり	頭巾	人事
2711	明治32年	新年の部	元日や取散らしたる古色紙	元日	時候
3785	明治33年	新年の部	此村の子供多さよ松の内	松の内	時候
3786	明治33年	新年の部	年玉を貰ひてやがて寐入りけり	年玉	人事
3787	明治33年	新年の部	羞かしき手毬の唄や物心	手毬	人事
3788	明治33年	新年の部	綱引の跡に落ちたり赤き紐	綱引	人事
3789	明治33年	新年の部	思はずの手を握りけり歌かるた	歌留多	人事
3790	明治33年	新年の部	鮮かにぬひものしたる手毬哉	手毬	人事
3791	明治33年	新年の部	姉妹の蜂に驚く手毬哉	手毬	人事
3933	明治34年	新年の部	若水や名のある井戸の白幣	若水	人事
3934	明治34年	新年の部	親猿は猿曳よりも老いにけり	猿廻し	人事
3935	明治34年	新年の部	鏝鏝としておはしけり謠そめ	謠初	人事
3936	明治34年	新年の部	ころげ行く手毬とまりし芝生哉	手毬	人事
3937	明治34年	新年の部	綱引のみかん撒いたるきそひ哉	綱引	人事
3938	明治34年	新年の部	居籠の人皆いねて水の音	居籠	人事
3939	明治34年	新年の部	抽斗や宝舟買ふ錢五文	寶舟	人事
3940	明治34年	新年の部	うりそめの景物貰ふ子供哉	初売	人事
3941	明治34年	新年の部	初曆小判は黄なる絵紙哉	初曆	人事
3942	明治34年	新年の部	蓬萊のかたへや屠蘇の小杯	雑	雑
3943	明治34年	新年の部	舞そめのトさしまうて疲れけり	舞初	人事
3944	明治34年	新年の部	乗そめの松原出でし一騎哉	乗初	人事
4233	明治35年	新年の部	嫁が君女三の宮を覗きけり	嫁が君	動物
4234	明治35年	新年の部	舞そめや人妬しきかづけもの	舞初	人事
4235	明治35年	新年の部	獨居て謠そめとてうたひけり	謠初	人事
4236	明治35年	新年の部	初鳥雀連歌の姿かな	初鳥	動物
4237	明治35年	新年の部	弾初をすべきわが子の忌日哉	弾初	人事
4238	明治35年	新年の部	女王祿や十三にして歌合	女王祿	人事
4239	明治35年	新年の部	ゆづり葉は神世ながらの緑哉	楪	植物

新年の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4240	明治35年	新年の部	初夢のうそついて人を喜ばす	初夢	人事
4241	明治35年	新年の部	若水の如くさやけき心かな	若水	人事
4242	明治35年	新年の部	二三輪梅も小庭の恵方哉	恵方	人事
4243	明治35年	新年の部	門松や館をまかる白柏子	門松	人事
4244	明治35年	新年の部	喰積も獨すまひのさびしくて	喰積	人事
4245	明治35年	新年の部	太箸の太しく成ぬ雑煮腹	太箸	人事
4246	明治35年	新年の部	文臺に倚り試みつ福寿草	福寿草	植物
4247	明治35年	新年の部	もろ／＼の神も遊ばん松の内	松の内	時候
4248	明治35年	新年の部	傀儡師人相わるき思かな	傀儡師	人事

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
11	明治27年	春の部	江の村や東風吹きそめし軒の簑	東風	天文
12	明治27年	春の部	鳩啼くや若草むしる女の子	若草	植物
13	明治27年	春の部	露の臺花となりけり小藪道	露の臺	植物
14	明治27年	春の部	梅が香や机の上の萬葉集	梅	植物
15	明治27年	春の部	梅咲いて琴の音すなり西の對	梅	植物
16	明治27年	春の部	やり梅の湯殿に赤き袂かな	梅	植物
17	明治27年	春の部	紅梅や隣りの娘としいくつ	梅	植物
18	明治27年	春の部	梅咲いて狩野の一軸古びたり	梅	植物
19	明治27年	春の部	鶯の畑に晝餉の夫婦かな	鶯	動物
20	明治27年	春の部	春風の屋根に烏賊干す入江かな	春風	天文
21	明治27年	春の部	朝市の跡すれて居る餘寒かな	餘寒	時候
22	明治27年	春の部	渦まくや朧月夜の龍飛崎	朧月	天文
23	明治27年	春の部	傾城の衣くれなゐに春の月	春の月	天文
24	明治27年	春の部	陽炎の畑打男すね黒し	陽炎	天文
25	明治27年	春の部	三助の月代青し花の山	花	植物
26	明治27年	春の部	その昔熊谷次郎花の山	花	植物
27	明治27年	春の部	白馬繫く傾城町の柳かな	柳	植物
28	明治27年	春の部	起きよ / \ 春ゆかんとすぬる胡蝶	行春	時候
29	明治27年	春の部	行春や我故郷へ三百里	行春	時候
30	明治27年	春の部	行春を凌雲閣に眺めけり	行春	時候
31	明治27年	春の部	去程に春も暮れけり鐘の声	暮春	時候
273	明治28年	春の部	陽炎に鋏振上ぐる男かな	陽炎	天文
275	明治28年	春の部	陽炎のそこらに行けど君見えず	陽炎	天文
276	明治28年	春の部	紅梅や几帳ほのかに衣の色	梅	植物
277	明治28年	春の部	淀みけり渦まかれけり春の水	春の水	地理
278	明治28年	春の部	大奥の衣のけはひや朧月	朧月	天文
279	明治28年	春の部	浪もなし朧月夜の外が濱	朧月	天文
280	明治28年	春の部	舟のたり / \ 兩岸の桃花燃えんとす	桃	植物
281	明治28年	春の部	春風や電線吼ゆる東海道	春風	天文
282	明治28年	春の部	菜の花や笠背負ひたる伊勢詣	菜の花	植物
283	明治28年	春の部	馬士唄ふ五十三亭日は長し	日永	時候
284	明治28年	春の部	行春をこちらも向かぬ男かな	行春	時候
285	明治28年	春の部	行春を出羽とあるなり笠の文字	行春	時候
287	明治28年	春の部	薄月の菜の花畑牛帰る	菜の花	植物
288	明治28年	春の部	朧夜のほの白き花や何の花	朧	天文
289	明治28年	春の部	月朧只むさし野の果もなし	朧月	天文
290	明治28年	春の部	朧夜のそれかとばかり水車	朧	天文
291	明治28年	春の部	潺湲と朧をくゞる野川かな	朧	天文
292	明治28年	春の部	花や / \ 恁麼の時これいかむ	花	植物
293	明治28年	春の部	里人よ我もこそ来れ花見んと	花見	人事
294	明治28年	春の部	こと問はむ汝か里の櫻いかにぞや	櫻	植物
295	明治28年	春の部	むさし野の麦二三寸小雨ふる	麦青む	植物
296	明治28年	春の部	すさましや桃花の村を鉄車ゆく	桃	植物
297	明治28年	春の部	菜の花や女首出す汽車の窓	菜の花	植物
298	明治28年	春の部	春雨の畑に何する男ども	春雨	天文
299	明治28年	春の部	一村の屋根の低さよ桃さくら	雑	雑
300	明治28年	春の部	石地蔵それよりつゞく花菜かな	菜の花	植物
301	明治28年	春の部	春風の乞食つゞきぬ江戸の町	春風	天文

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
302	明治28年	春の部	花の山かばんさげたる男かな	花	植物
303	明治28年	春の部	蝶々よ旅の記あらば見まくほし	蝶	動物
304	明治28年	春の部	或人の吃り / \ つ春暮れぬ	暮春	時候
305	明治28年	春の部	塔高しそれより高き雲雀かな	雲雀	動物
306	明治28年	春の部	澁瀬と餘寒の蝦のはねたりな	餘寒	時候
307	明治28年	春の部	からまりつ / \ 大藤の花咲きぬ	藤の花	植物
458	明治29年	春の部	石上に椿散りけり僧拾へり	椿	植物
459	明治29年	春の部	女五六酒賣る家の桃の花	桃	植物
460	明治29年	春の部	去程に李月夜の面白や	李の花	植物
461	明治29年	春の部	山かげの一本櫻咲きにけり	櫻	植物
462	明治29年	春の部	千本のさくら一度に咲きにけり	櫻	植物
463	明治29年	春の部	梅が香や月淡くして水細く	梅	植物
464	明治29年	春の部	村又村霞の中の午の鐘	霞	天文
465	明治29年	春の部	日は西へ雲雀も啼かず山畑	雲雀	動物
466	明治29年	春の部	朧夜の女物云ふ屋形船	朧	天文
467	明治29年	春の部	寺しんかん夜ほの / \ と鶯や	鶯	動物
468	明治29年	春の部	水ちよろ / \ 笥に流す椿かな	椿	植物
469	明治29年	春の部	桃咲いて馬引出す小家かな	桃	植物
470	明治29年	春の部	春三月桃紅李白酒十斗	春	時候
471	明治29年	春の部	雪隠の屋根煤びたり桃の花	桃	植物
473	明治29年	春の部	登らんせ春は楊州第一楼	春	時候
474	明治29年	春の部	舞姫の樓に上りつ梨花の月	梨の花	植物
475	明治29年	春の部	春やこよひ飽まで酒を召上れ	春	時候
476	明治29年	春の部	夕風の墓門の櫻花もなし	櫻	植物
477	明治29年	春の部	續たり紛たり土饅頭を吹く落花	落花	植物
478	明治29年	春の部	春の夜の紅樓女あり名は阿嬌	春夜	時候
479	明治29年	春の部	春の夜や繡したる閨の幕	春夜	時候
480	明治29年	春の部	炉塞いで壁の一軸哀れなる	爐塞	人事
481	明治29年	春の部	杉十丈段々に藤の花咲きぬ	藤の花	植物
482	明治29年	春の部	一面に紅白のつゝじ咲きにけり	躑躅	植物
483	明治29年	春の部	禿山やつゝじの赤きところ / \	躑躅	植物
484	明治29年	春の部	谷間の藤棧花咲きぬ	藤の花	植物
485	明治29年	春の部	藤の花淵に臨めること三尺	藤の花	植物
486	明治29年	春の部	水浅く岩白うして藤の花	藤の花	植物
10611	明治29年	春の部	松青く藤紫に水白し	藤	植物
1013	明治30年	春の部	根芹にして根の短きが口惜しく	芹	植物
1014	明治30年	春の部	梅咲いて米の飯喰ふ山家かな	梅	植物
1015	明治30年	春の部	夢みらく君が行く野の若艸を	若草	植物
1016	明治30年	春の部	白魚を紫の上にまゐらせよ	白魚	動物
1017	明治30年	春の部	箱根路をわが越えくれば春の風	春風	天文
1018	明治30年	春の部	霞淡く蝦夷が小島の見ゆるかな	霞	天文
1019	明治30年	春の部	よもすがら我戀すべく春さむし	春寒	時候
1020	明治30年	春の部	春の雪山鳥の尾のさら / \ と	春雪	天文
1022	明治30年	春の部	草木春にして胡女が唄ふ恨かな	春	時候
1024	明治30年	春の部	團子喰へば犬吠ゆるなり花の山	花	植物
1026	明治30年	春の部	この別れ春帆遅き恨かな	春	時候
1027	明治30年	春の部	二三人離宴に春の月を見る	春の月	天文
1028	明治30年	春の部	馬で行け萬里の春を横ぎって	春	時候

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1029	明治30年	春の部	君が船明日桃花灘上を	桃	植物
1030	明治30年	春の部	踏破らむ落花の五十有三亭	落花	植物
1031	明治30年	春の部	炉ふさいで此曉をいざ罷らむ	爐塞	人事
1032	明治30年	春の部	恐る暮に落花の里に入らむことを	落花	植物
1033	明治30年	春の部	酒許せ奥州の春猶さむし	春	時候
1034	明治30年	春の部	堇拵りつ紫さめつ此の別れ	堇	植物
1035	明治30年	春の部	離愁とはつくしの如きものなるか	土筆	植物
1036	明治30年	春の部	春の日の落馬なんども我俳諧	春日	時候
1037	明治30年	春の部	この別已にして月朧ろなり	朧月	天文
1038	明治30年	春の部	わが旅や蒲公英三ツ四ツあれば足る	蒲公英	植物
1040	明治30年	春の部	春の夜をみめよき女二人行く	春夜	時候
1041	明治30年	春の部	花はさくら妻を娶らば陰麗花	櫻	植物
1042	明治30年	春の部	中婦弾じ少婦歌へり花の宴	花	植物
1043	明治30年	春の部	柳十里隋家の宮女恨あり	柳	植物
1044	明治30年	春の部	永き日を貧なる女物思ふ	日永	時候
1045	明治30年	春の部	春殿の蠟燭あかし楊氏の女	春	時候
1046	明治30年	春の部	美なる女木蘭の船春の水	雑	雑
1047	明治30年	春の部	朧夜の女歌へり後庭花	朧	天文
1048	明治30年	春の部	楼に上る邯鄲の女春多恨	春	時候
1049	明治30年	春の部	春酒緑り越女の金釵斜なる	春	時候
1050	明治30年	春の部	曙の御講のかすみ虎夫人	霞	天文
1051	明治30年	春の部	賤の女が春の野に出で戀すなり	春の野	地理
1052	明治30年	春の部	春の夜の神前に巫女居並べる	春夜	時候
1053	明治30年	春の部	長き日を全張る男眠りける	日永	時候
1054	明治30年	春の部	薄月の絹雪洞や春の戀	春	時候
1055	明治30年	春の部	丸太積みあげて陽炎の立つを見る	陽炎	天文
1056	明治30年	春の部	永き日やとところ／＼の土方節	日永	時候
1057	明治30年	春の部	金殿や春の夜毎を鼓うつ	春夜	時候
1058	明治30年	春の部	よもすがら笛の音すなり春の城	春	時候
1059	明治30年	春の部	櫻散る此夕暮の静かさは	落花	植物
1060	明治30年	春の部	大木の櫻散ること徐ろに	落花	植物
1061	明治30年	春の部	車去て都のはづれ暮遅し	遅日	時候
1062	明治30年	春の部	長き日の東海道を二人づれ	日永	時候
1063	明治30年	春の部	大歡樂大千世界櫻かな	櫻	植物
1064	明治30年	春の部	酒足らず櫻に冠をかけて去る	櫻	植物
1065	明治30年	春の部	落椿鉄灯籠に積であり	椿	植物
1066	明治30年	春の部	杯盤や酒醒くさくら散る	落花	植物
1067	明治30年	春の部	菜の花の傍へに清き流かな	菜の花	植物
1068	明治30年	春の部	藥賣る家の椿の赤きかな	椿	植物
1069	明治30年	春の部	日當りやたんぼゝ咲ける二ツ三ツ	蒲公英	植物
1070	明治30年	春の部	切支丹の庭に真紅の花咲きぬ	花	植物
1071	明治30年	春の部	寺の池に年ふる蛙住めりとか	蛙	動物
1072	明治30年	春の部	洛陽の春に居眠る男あり	春	時候
1073	明治30年	春の部	菜の花に小さき橋を二つほど	菜の花	植物
1074	明治30年	春の部	聞説野に三千のつく／＼し	土筆	植物
1075	明治30年	春の部	春の人身細き太刀を佩いてゆく	春	時候
1076	明治30年	春の部	春遠近壁に題す一層の楼	春	時候
1077	明治30年	春の部	幕打たせ花の彼方の謠かな	花	植物

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1079	明治30年	春の部	春の月二人并むで眺めつらむ	春の月	天文
1080	明治30年	春の部	菜の花のてふ / \ 猫の子眠て知らず	菜の花	植物
1081	明治30年	春の部	水桶にさしたる藤の花咲きぬ	藤の花	植物
1082	明治30年	春の部	里の子の鞭にするなる藤の花	藤の花	植物
1083	明治30年	春の部	道を失す大澤の藤の花を見る	藤の花	植物
1084	明治30年	春の部	わたかまる藤の花房短くて	藤の花	植物
1085	明治30年	春の部	つゝじ赤く藤紫の陳腐なる	躑躅	植物
1086	明治30年	春の部	雑木原に偶々つゝじあるがよし	躑躅	植物
1087	明治30年	春の部	蒲公英の莖の長さがほうけたり	蒲公英	植物
1088	明治30年	春の部	矮なるは最も赤きつゝじかな	躑躅	植物
1089	明治30年	春の部	水涸れ水車猶存す藤の花	藤の花	植物
1925	明治31年	春の部	東門を犬と連立つ日暖か	暖	時候
1926	明治31年	春の部	犬追へば鶏飛上る桃の枝	桃	植物
1927	明治31年	春の部	二三人梅花書屋に会したる	梅	植物
1928	明治31年	春の部	卓上や主客坐につく梅の花	梅	植物
1929	明治31年	春の部	主と客と漢魏六朝梅の花	梅	植物
1930	明治31年	春の部	家疎らにして梅やうやく多し	梅	植物
1931	明治31年	春の部	獨り樓に上る梅の花月夜	梅	植物
1932	明治31年	春の部	白梅や雲烟龍蛇墨一斗	梅	植物
1933	明治31年	春の部	市に入れば梅の木小さし塀の内	梅	植物
1934	明治31年	春の部	梅の村に仕へずして老いし住む	梅	植物
1935	明治31年	春の部	梅林に物の音をきく社かな	梅	植物
1936	明治31年	春の部	白梅の白きを愛すかほりかな	梅	植物
1937	明治31年	春の部	郡太守賢にして士を愛す梅の花	梅	植物
1938	明治31年	春の部	晴天に昼の月傾きぬいかのぼり	凧	人事
1939	明治31年	春の部	壁に飛ばす一斗の墨や梅の花	梅	植物
1940	明治31年	春の部	姉妹や堇咲く野に睦しき	堇	植物
1941	明治31年	春の部	山陰に日暮るゝ遅し春の駒	春の駒	動物
1942	明治31年	春の部	日の暮るゝ遅き牧場や春の駒	春の駒	動物
1943	明治31年	春の部	誤て古道行けば雉子鳴きぬ	雉子	動物
1944	明治31年	春の部	野路山路鶯とところト\かな	鶯	動物
1945	明治31年	春の部	戀すべく里に出でたり寺の猫	猫の戀	動物
1946	明治31年	春の部	淺ましく猫の恋する声高し	猫の戀	動物
1947	明治31年	春の部	戀合ふやいよゝ近づくと猫の聲	猫の戀	動物
1948	明治31年	春の部	戀中の何れも黒き猫なりし	猫の戀	動物
1949	明治31年	春の部	故里や猫恋すべく長じたり	猫の戀	動物
1950	明治31年	春の部	飯だこの果敢なかりける最期かな	飯だこ	動物
1951	明治31年	春の部	飯だこのこれより大なるはなし	飯だこ	動物
1952	明治31年	春の部	二三間雉子鳴き飛で草に入る	雉子	動物
1953	明治31年	春の部	野は焼けてきぎす鳴くなり雨の中	雉子	動物
1954	明治31年	春の部	前山にきぎす鳴くなり渡し舟	雉子	動物
1955	明治31年	春の部	岡の家畑もありて雲雀なく	雲雀	動物
1956	明治31年	春の部	川沿や青麦畑を春の風	春風	天文
1957	明治31年	春の部	回文の錦織出す春の風	春風	天文
1958	明治31年	春の部	雁帰る昼とぞしたる小村かな	帰る雁	動物
1959	明治31年	春の部	宿とりて二階に居れば雁の行く	帰る雁	動物
1960	明治31年	春の部	驛尽きて吾は南し雁北す	帰る雁	動物
1961	明治31年	春の部	別荘の月に梅見る主客かな	梅見	人事

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1962	明治31年	春の部	春雨や夜密かに泣く娼家の子	春雨	天文
1963	明治31年	春の部	杼を停め帰雁の雲に看入る哉	帰る雁	動物
1964	明治31年	春の部	驛せはし帰る雁がね來るつばめ	雑	雑
1965	明治31年	春の部	花菜すこしてふ / \ 契浅からず	蝶	動物
1966	明治31年	春の部	蛇穴を出づ半して眠りある	蛇穴を出る	動物
1967	明治31年	春の部	石暖かに蛇の出でたる氣はひあり	蛇穴を出る	動物
1968	明治31年	春の部	大きうて歌も得よまぬ蛙かな	蛙	動物
1969	明治31年	春の部	河上や吹き来る風に梅が香す	梅	植物
1970	明治31年	春の部	梅が香の水を吹き来る夜船かな	梅	植物
1971	明治31年	春の部	客を得つ茗荷たけを探る裏の畑	茗荷竹	植物
1972	明治31年	春の部	茗荷たけを得べくと妻は裏にいづ	茗荷竹	植物
1973	明治31年	春の部	若艸を茵となしつ物語	若草	植物
1974	明治31年	春の部	露の臺の苦きを愛す朝の膳	露の臺	植物
1975	明治31年	春の部	白うして長き根芹の雫かな	芹	植物
1976	明治31年	春の部	人稀に梅猶早き山路かな	梅	植物
1977	明治31年	春の部	山路来て野を暖かに鞍の上	暖	時候
1978	明治31年	春の部	村店に野路の花見の人数かな	花見	人事
1979	明治31年	春の部	依々として柳の枝を放たざる	柳	植物
1980	明治31年	春の部	庭先に陽炎立つや雨あがり	陽炎	天文
1981	明治31年	春の部	膳出でぬ芽独活白魚若夫婦	雑	雑
1982	明治31年	春の部	口を閉ぢ田螺は遂に物いはず	田螺	動物
1983	明治31年	春の部	白魚に箸は春慶臭きかな	白魚	動物
1984	明治31年	春の部	狼烟あぐれば褒姒が笑ふ春の風	春風	天文
1985	明治31年	春の部	古臼の水温むべく日南す	水温む	地理
1986	明治31年	春の部	朧夜を李獅々が家に行幸哉	朧	天文
1987	明治31年	春の部	出代に居残りし女主ぶり	出代	人事
1988	明治31年	春の部	出代や夜更けて語る台所	出代	人事
1989	明治31年	春の部	隣国の使者の一行かすみけり	霞	天文
1990	明治31年	春の部	梅林を出て、北斗を拜すかな	梅	植物
1991	明治31年	春の部	嶺北に村あり雨に寒食す	寒食	人事
1992	明治31年	春の部	江北の梅の木古くして疎なり	梅	植物
1993	明治31年	春の部	浦東風や船に残んの灯が見ゆる	東風	天文
1994	明治31年	春の部	江南や梅花淡月簫の音	梅	植物
1995	明治31年	春の部	琴に挑む女かほよし桃の花	桃	植物
1996	明治31年	春の部	長き日の和船繕ふ濱辺かな	日永	時候
1997	明治31年	春の部	根岸菴に春夜の鐘や東叡山	春夜	時候
1998	明治31年	春の部	姫君の東下りや春の風	春風	天文
1999	明治31年	春の部	白き馬の東に飛びぬ梅月夜	梅	植物
2000	明治31年	春の部	春の水滾々として東流す	春の水	地理
2001	明治31年	春の部	人中に南無佛と申す櫻哉	櫻	植物
2002	明治31年	春の部	南海に眞珠採るべく日暖か	暖	時候
2003	明治31年	春の部	春さむし北方には、き星を見る	春寒	時候
2004	明治31年	春の部	昭君の北に行く日をつばめ来る	燕	動物
2005	明治31年	春の部	桃咲いて美なる浣紗の女かな	桃	植物
2006	明治31年	春の部	三月三日妓を宰相の家に観る	上巳	人事
2007	明治31年	春の部	青柳の欄を拂て雫せり	柳	植物
2008	明治31年	春の部	畑中の一本柳暮れにけり	柳	植物
2009	明治31年	春の部	雨暖かに柳烟るや長き土手	柳	植物

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2010	明治31年	春の部	高張や旅館の柳しだれつゝ	柳	植物
2011	明治31年	春の部	退朝や御講の柳静かにて	柳	植物
2012	明治31年	春の部	雨一ト日柳に暗き小窓かな	柳	植物
2013	明治31年	春の部	鞍壺や柳かぶさる門せまみ	柳	植物
2014	明治31年	春の部	御手洗の水にしだるゝ柳か那	柳	植物
2015	明治31年	春の部	瘤高く幹くねりたる柳か那	柳	植物
2016	明治31年	春の部	僧房に碁客相對す日の永き	日永	時候
2017	明治31年	春の部	商人と連れて鄙路の日は長し	日永	時候
2019	明治31年	春の部	病みやせて出代の日の部屋を出る	出代	人事
2020	明治31年	春の部	日麗か眼病院の色がらす	麗	時候
2021	明治31年	春の部	薬にせまく田螺殻焼く裏の畑	田螺	動物
2022	明治31年	春の部	痘除けの赤き幣吹く春の風	春風	天文
2023	明治31年	春の部	くすし申さく白魚の如きを少し召せ	白魚	動物
2024	明治31年	春の部	菴主病むで菊の根分くる人もなし	菊根分	人事
2025	明治31年	春の部	木瓜咲くや日たゞ聞なる村の醫者	木瓜	植物
2026	明治31年	春の部	風引いて月に簾下ろす梨の花	梨の花	植物
2027	明治31年	春の部	薬賣刀を舞はず日永か那	日永	時候
2028	明治31年	春の部	ちご病みて雛に親しむ飽き易き	雛祭	人事
2029	明治31年	春の部	里見えて春の社日の太鼓かな	社日	時候
2030	明治31年	春の部	菜の花や門鎖したる避病院	菜の花	植物
2031	明治31年	春の部	買て放つ亀の子活きぬ春の川	春の川	地理
2032	明治31年	春の部	淡雪の消えも入りたき病める戀	淡雪	天文
2033	明治31年	春の部	出代を孕める人の母訪ひぬ	出代	人事
2034	明治31年	春の部	ひとり病むで灯ともす春の夕寒し	春宵	時候
2035	明治31年	春の部	山吹や水に映りし病める顔	山吹	植物
2036	明治31年	春の部	薬賣る店にさし込む春日かな	春の日	天文
2037	明治31年	春の部	腫物の薄痒くなりぬ春の風	春風	天文
2038	明治31年	春の部	はては乱舞酒腥き落花哉	落花	植物
2039	明治31年	春の部	病む人の粥少し残り春さむし	春寒	時候
2040	明治31年	春の部	陽炎や漢薬植ゑし医者之庭	陽炎	天文
2041	明治31年	春の部	春の夜の産声聞ゆ隣かな	春夜	時候
2042	明治31年	春の部	麗かや人参つむで高麗船が	麗	時候
2043	明治31年	春の部	薬臭き人に逢ひけり春の宵	春宵	時候
2044	明治31年	春の部	師の坊の塞がざる爐に病みわびぬ	爐塞	人事
2046	明治31年	春の部	百艸を嘗め試みつ春の風	春風	天文
2047	明治31年	春の部	永き日の碁石を下すこと遅し	日永	時候
2048	明治31年	春の部	山寺の木魚も絶えて日の永き	日永	時候
2049	明治31年	春の部	永き日の沖に魚つる獨か那	日永	時候
2050	明治31年	春の部	野に出でゝ讚美歌唄ふ日永哉	日永	時候
2052	明治31年	春の部	凧の糸柱に繋ぐ響かな	凧	人事
2053	明治31年	春の部	賣れ残る武者繪の凧の物憂かり	凧	人事
2054	明治31年	春の部	ありたけの糸伸ばしたり凧	凧	人事
2055	明治31年	春の部	大凧の川を越え来しうなり哉	凧	人事
2056	明治31年	春の部	風ゆるくせんすべもなし凧	凧	人事
2057	明治31年	春の部	とかくして大凧打あげぬ	凧	人事
2058	明治31年	春の部	宿とりて二階に居れば凧	凧	人事
2059	明治31年	春の部	鄙に入て日は猶高し凧	凧	人事
2060	明治31年	春の部	切凧の骨徒らに太かりし	凧	人事

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2061	明治31年	春の部	凧の音の聞えずなりて日は暮れぬ	凧	人事
2062	明治31年	春の部	縁日に求めし梅のはや散りぬ	梅	植物
2063	明治31年	春の部	雪解に不動明王突立ちぬ	雪解	地理
2064	明治31年	春の部	一門をあつめて瀬のまつりか那	瀬の祭	時候
2065	明治31年	春の部	涅槃会のすむで涅槃像さびし	涅槃會	人事
2066	明治31年	春の部	馬市のまくさ飛散る春の風	春風	天文
2067	明治31年	春の部	門前に來鳴く鶯来ずなりぬ	鶯	動物
2069	明治31年	春の部	朧夜を茸毛の駒の魁けぬ	朧	天文
2070	明治31年	春の部	心せよ餘寒に風を引きやすし	餘寒	時候
2071	明治31年	春の部	盆梅のこぼれて歌書の葉か那	盆梅	植物
2073	明治31年	春の部	かりすまひして古雛かざりける	雛祭	人事
2074	明治31年	春の部	乙女子の雛に團居す物語	雛祭	人事
2075	明治31年	春の部	本箱や物憂かるべく雛古りし	雛祭	人事
2076	明治31年	春の部	雛の間に蠟燭ともす禿か那	雛祭	人事
2077	明治31年	春の部	雛市の灯ともす頃を雨がふる	雛市	人事
2078	明治31年	春の部	人戀し雛包みたる古錦	雛祭	人事
2079	明治31年	春の部	雛の間に伯母と寐し子や絹行灯	雛祭	人事
2080	明治31年	春の部	今更に雛に戀する身となりぬ	雛祭	人事
2081	明治31年	春の部	雛市には雛買はまく思ふか那	雛市	人事
2082	明治31年	春の部	雛棚に巣さびしき住居か那	雛祭	人事
2084	明治31年	春の部	闇の夜や沼に映りし野火の影	野山焼	人事
2085	明治31年	春の部	物の香や焼けし野を吹く弱き風	野山焼	人事
2086	明治31年	春の部	野を焼いて山焼けかゝる風強し	野山焼	人事
2087	明治31年	春の部	湖の上を焼野の烟這ひかゝる	野山焼	人事
2088	明治31年	春の部	二階から夜の野を焼く火が見えし	野山焼	人事
2089	明治31年	春の部	藪陰に野火のくすぶる小雨の日	野山焼	人事
2090	明治31年	春の部	野も山も焼けて夕を雨となる	野山焼	人事
2091	明治31年	春の部	一ト処野焼の烟立ちのぼる	野山焼	人事
2092	明治31年	春の部	夜に入りてはげしうなりし野火の風	野山焼	人事
2093	明治31年	春の部	人さはぐ野火官山に移るべう	野山焼	人事
2095	明治31年	春の部	穴を出るや蛇忽ちに見えずなり	蛇穴を出る	動物
2096	明治31年	春の部	試に穴を出でたる蛇ならし	蛇穴を出る	動物
2097	明治31年	春の部	穴に憂く出つべくと蛇のうき心	蛇穴を出る	動物
2098	明治31年	春の部	蛇穴を出づべく少し早かりし	蛇穴を出る	動物
2099	明治31年	春の部	風腥くうはばみ穴を出でけらし	蛇穴を出る	動物
2100	明治31年	春の部	出でし穴を去るべく蛇の愁あり	蛇穴を出る	動物
2101	明治31年	春の部	穴を出でゝ蛇眠るべく草若し	蛇穴を出る	動物
2102	明治31年	春の部	穴を出でゝ蛇人を見る餘所心	蛇穴を出る	動物
2103	明治31年	春の部	蛇出づべく穴にさし込む朝日哉	蛇穴を出る	動物
2104	明治31年	春の部	穴を出でし蛇に悔あり寒き雨	蛇穴を出る	動物
2105	明治31年	春の部	親蛇が穴を出でたり子泣くらむ	蛇穴を出る	動物
2106	明治31年	春の部	穴を出づる咫尺にして眠る蛇	蛇穴を出る	動物
2107	明治31年	春の部	蛇穴を出で孔子容れられず	蛇穴を出る	動物
2108	明治31年	春の部	蛇穴を出づ重耳主従行く	蛇穴を出る	動物
2109	明治31年	春の部	楚に囚はれ穴を出でたる蛇を見る	蛇穴を出る	動物
2110	明治31年	春の部	蛇穴を出づるや梁甫吟起る	蛇穴を出る	動物
2111	明治31年	春の部	蛇穴を出づる時遠人家を懐ふ	蛇穴を出る	動物
2112	明治31年	春の部	国破れ蛇穴を出づ城春なり	蛇穴を出る	動物

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2113	明治31年	春の部	雛店の前に花賣る翁か那	雛市	人事
2114	明治31年	春の部	古雛の吾宿わびし人も來ず	雛祭	人事
2115	明治31年	春の部	雛市にとあるを買はまほしかりし	雛市	人事
2116	明治31年	春の部	昨日焼きし野を土臭き風が吹く	野山焼	人事
2118	明治31年	春の部	花に酔ふて乞食女に戯るゝ	花	植物
2119	明治31年	春の部	紫の霞棚引く宮の森	霞	天文
2120	明治31年	春の部	簾捲いて琴に對へば春の月	春の月	天文
2121	明治31年	春の部	田螺なく背戸に落ちたり三日の月	田螺	動物
2123	明治31年	春の部	見送るがふりすてがたき柳か那	柳	植物
2125	明治31年	春の部	賀びや雛まゐらす桃の宿	桃	植物
2126	明治31年	春の部	夫婦して今日も打つなり寺の畑	畑打ち	人事
2127	明治31年	春の部	藏普請濟むで辛夷の花咲きぬ	辛夷	植物
2128	明治31年	春の部	連翹を啄みこぼし鳥飛びぬ	連翹	植物
2129	明治31年	春の部	なかなか長閑けき日なり山の寺	長閑	時候
2131	明治31年	春の部	異國船に鳴の子走る春の風	春風	天文
2132	明治31年	春の部	島守が館の旗や春の風	春風	天文
2133	明治31年	春の部	立てかけし琴の響や春の風	春風	天文
2134	明治31年	春の部	淺草や喇叭筆築春の風	春風	天文
2135	明治31年	春の部	春風の野に小便す二人づれ	春風	天文
2136	明治31年	春の部	造船の匏屑ちる春の風	春風	天文
2137	明治31年	春の部	東郊の春風二十四番か那	春風	天文
2138	明治31年	春の部	春風の沖の方より白帆か那	春風	天文
2139	明治31年	春の部	春風や妹がひれふる松浦潟	春風	天文
2140	明治31年	春の部	春風の道尽て寺の門に入る	春風	天文
2142	明治31年	春の部	管絃や春風吹満つ十二樓	春風	天文
2143	明治31年	春の部	造作の檜匂ふや春の風	春風	天文
2144	明治31年	春の部	縁に出でゝ障子張り居るや春の風	春風	天文
2145	明治31年	春の部	漣や春風渡る昆明池	春風	天文
2146	明治31年	春の部	春風や笹舟放つ池の面	春風	天文
2147	明治31年	春の部	梅遅く春風寒き伽藍か那	春風	天文
2148	明治31年	春の部	春風の吹やむ夕や花くもり	春風	天文
2149	明治31年	春の部	少しくもり春風寒し梅の道	春風	天文
2150	明治31年	春の部	馬に乗る追分村や春の風	春風	天文
2151	明治31年	春の部	春風や片側町の紺暖簾	春風	天文
2152	明治31年	春の部	洞穴に浪出つ入りつ日の永き	日永	時候
2153	明治31年	春の部	春の宵あけの玉垣灯のもるゝ	春宵	時候
2155	明治31年	春の部	永き日の馬まばらなる牧場か那	日永	時候
2156	明治31年	春の部	拜領の馬繋ぐ庭のさくらか那	櫻	植物
2157	明治31年	春の部	馬蹄軽く江南を春の風吹くよ	春風	天文
2158	明治31年	春の部	日は永く邯鄲の少年馬を馳す	日永	時候
2159	明治31年	春の部	厩から馬首出す花菜か那	菜の花	植物
2160	明治31年	春の部	春の夜の陣に琵琶さく馬上か那	春夜	時候
2161	明治31年	春の部	馬に乗て温泉の村に入るや春の雨	春雨	天文
2162	明治31年	春の部	春風や伶人馬に乗て行く	春風	天文
2163	明治31年	春の部	瘦馬に母乗せてゆく涅槃か那	涅槃會	人事
2164	明治31年	春の部	馬上にして槍の穂洗ふ柳か那	柳	植物
2165	明治31年	春の部	馬を下りて刃を洗ふ柳か那	柳	植物
2166	明治31年	春の部	春月や画ける欄間彫れる棟	春の月	天文

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2167	明治31年	春の部	柳折り柳折り春風路傍の情	春風	天文
2168	明治31年	春の部	坐につけば紅白のさくら餅が出る	桜餅	人事
2169	明治31年	春の部	柳ありて揚弓店と灯をともす	柳	植物
2170	明治31年	春の部	王城の北や上野の森おぼろ	朧	天文
2171	明治31年	春の部	肉くれなゐ點心みとり春の宵	春宵	時候
2172	明治31年	春の部	春閨の蝶や白馬の人遠く	蝶	動物
2173	明治31年	春の部	六法やくるわのさくら男伊達	櫻	植物
2174	明治31年	春の部	遊廓に異人乗込む春の月	春の月	天文
2175	明治31年	春の部	朧夜の廓逃げ来し二人か那	朧	天文
2176	明治31年	春の部	二三人廓出てゆく春の雨	春雨	天文
2177	明治31年	春の部	春さめや傾城部の小酒もり	春雨	天文
2178	明治31年	春の部	吉原の夜さくらを見るや田舎人	櫻	植物
2179	明治31年	春の部	花の廓若き男のなぶられし	花	植物
2180	明治31年	春の部	雨の廓春夢正にこまやかなり	春の夢	人事
2181	明治31年	春の部	客を送る柳のかけや京言葉	柳	植物
2182	明治31年	春の部	花に酔ふて遊女見に行く人数か那	花	植物
2183	明治31年	春の部	廓見ゆ菜の花街道横に折れ	菜の花	植物
2184	明治31年	春の部	三階や川に沿へる廓の春風樓	春風	天文
2185	明治31年	春の部	川千鳥若き遊女の京言葉	千鳥	動物
2186	明治31年	春の部	女連れて廓のさくら見に出でし	櫻	植物
2187	明治31年	春の部	入口の青柳見ゆる廓かな	柳	植物
2188	明治31年	春の部	心中のさはぎに廓あけやすき	短夜	時候
2190	明治31年	春の部	靨黴や玉種うる山の春の雲	春の雲	天文
2191	明治31年	春の部	春の夜の汐みち来るや磯くもり	春夜	時候
2192	明治31年	春の部	巢にこもる孕雀のなやみか那	孕雀	動物
2193	明治31年	春の部	うらゝかや寝殿の上を舞へる鶯	麗	時候
2194	明治31年	春の部	東京のまつりを語り畑打つ	畑打ち	人事
2195	明治31年	春の部	菜の花に大根の花のひよろ長き	雑	雑
2196	明治31年	春の部	萩垣の萩の芽もえつ茶のけふり	萩若葉	植物
2197	明治31年	春の部	蛤の籠に蓋すや磯のくさ	蛤	動物
2198	明治31年	春の部	垂跡や花の菩薩の人ばかり	花祭	人事
2199	明治31年	春の部	故郷にある日炬燵を塞きけり	炬燵塞ぐ	人事
2201	明治31年	春の部	家に帰れば早巢立ちけり燕の子	燕の子	動物
2202	明治31年	春の部	頷赤くはしき燕の夫婦か那	燕	動物
2203	明治31年	春の部	堂上に巢くふべく乙鳥飛入りぬ	燕	動物
2204	明治31年	春の部	焼跡や乙鳥飛びかふ日もすがら	燕	動物
2205	明治31年	春の部	棟の上に雨の乙鳥のならびか那	燕	動物
2206	明治31年	春の部	入舩やつばくらめ飛ぶ港町	燕	動物
2207	明治31年	春の部	乙鳥や江戸参勤の諸大名	燕	動物
2208	明治31年	春の部	此頃や洛陽に入るつばくらめ	燕	動物
2209	明治31年	春の部	三階や昼の廓のつばくらめ	燕	動物
2210	明治31年	春の部	謫せられて鳴に燕をなつかしむ	燕	動物
2212	明治31年	春の部	五六人歌題えらびつ春の雨	春雨	天文
2214	明治31年	春の部	女坂を上れば天神の春の月	春の月	天文
2216	明治31年	春の部	椿落つ地水火風空椿落つ	椿	植物
2217	明治31年	春の部	もろく落ちし大輪の赤椿か那	椿	植物
2218	明治31年	春の部	物かいて居れば小庭に蝶が来る	蝶	動物
2219	明治31年	春の部	山吹にぬれて出でたり寺のちご	山吹	植物

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2220	明治31年	春の部	山吹の歌知る茶屋の女か那	山吹	植物
2222	明治31年	春の部	村熟を晝鎖しあり鳴蛙	蛙	動物
2223	明治31年	春の部	蛙鳴く吉原田圃小提灯	蛙	動物
2224	明治31年	春の部	其中に声高き蛙遠き哉	蛙	動物
2225	明治31年	春の部	聴蛙亭の石灯籠に灯をともす	蛙	動物
2226	明治31年	春の部	野の店や昼の蛙の鳴きやまず	蛙	動物
2227	明治31年	春の部	小蛙の昼さはがしき宿場か那	蛙	動物
2228	明治31年	春の部	蛙祭る祠のうしろ蛙鳴	蛙	動物
2229	明治31年	春の部	小蛙や稍々ありて鳴く大蛙	蛙	動物
2230	明治31年	春の部	雲低れて遠方に鳴く蛙哉	蛙	動物
2231	明治31年	春の部	閑々と怒れる蛙雲を吐く	蛙	動物
2232	明治31年	春の部	ひとゝころ蛙鳴きやまず虹出でぬ	蛙	動物
2234	明治31年	春の部	女生徒の蚕飼ふたる一室か那	蚕	動物
2235	明治31年	春の部	蚕飼ふ此頃夫婦家にあり	蚕	動物
2236	明治31年	春の部	起きて見れば蚕の村に灯がともる	蚕	動物
2237	明治31年	春の部	大勢や庄屋に蚕飼ふ女	蚕	動物
2238	明治31年	春の部	桑の香や蚕の部屋のうす暗き	蚕	動物
2239	明治31年	春の部	妻となり夫となりぬ蚕飼ふ	蚕	動物
2240	明治31年	春の部	蚕かふ背戸を出てゆく小唄哉	蚕	動物
2241	明治31年	春の部	故郷に帰れば妻は蚕かひか那	蚕	動物
2242	明治31年	春の部	しんかんと蚕眠れる昼間か那	蚕	動物
2243	明治31年	春の部	養蚕所の二階に見えし女ども	蚕	動物
2244	明治31年	春の部	養蚕に雇はれて居るいとこづれ	蚕	動物
2245	明治31年	春の部	勝手より蚕見に来し隠居か那	蚕	動物
2246	明治31年	春の部	養蚕がすむで祭ある小村か那	蚕	動物
2247	明治31年	春の部	原中に塀めぐらせり養蚕所	蚕	動物
2248	明治31年	春の部	試に蚕かひたる世帯か那	蚕	動物
2249	明治31年	春の部	行く程に都のはづれ蚕時	蚕	動物
2251	明治31年	春の部	兄弟が訟の庭や棟棠華	棟	植物
2252	明治31年	春の部	行春を流罪と決す便か那	行春	時候
2253	明治31年	春の部	耕して甘棠を謳ふ野人か那	耕	人事
2254	明治31年	春の部	百姓の家に公事さく辛夷か那	辛夷	植物
2255	明治31年	春の部	石だゝみ状師が家の柳か那	柳	植物
2256	明治31年	春の部	役人の衣更へたり決断所	更衣	人事
2257	明治31年	春の部	大庭に水打つ天下の決断所	打水	人事
2258	明治31年	春の部	訟を断ず秋霜の如きか那	秋の霜	天文
2259	明治31年	春の部	名奉行のしのびありきす村の秋	秋	時候
2260	明治31年	春の部	竹にはさむ直訴の状や獵の道	狩	人事
10656	明治31年	春の部	梅が香やお京は六角御幸町	梅	植物
10585	明治31年	春の部	踏迷古道行くや百千鳥	百千鳥	動物
2713	明治32年	春の部	青空や松の梢のいかのぼり	凧	人事
2715	明治32年	春の部	むかしぶりや子の日の御幸絵巻物	子の日の遊び	人事
2716	明治32年	春の部	夕立に飛龍を描く墨はねし	夕立	天文
2717	明治32年	春の部	眉を描く京の女や秋海棠	秋海棠	植物
2718	明治32年	春の部	棧や画けるが如き蜀の秋	秋	時候
2719	明治32年	春の部	大なる武者繪の凧のうなり哉	凧	人事
2720	明治32年	春の部	菊咲くや古き繪を見る奈良の寺	菊	植物
2721	明治32年	春の部	絵具皿に陽炎の立つ写生哉	陽炎	天文

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2722	明治32年	春の部	奉納の繪馬かつぎ行く春の風	春風	天文
2723	明治32年	春の部	満開の牡丹画きし絹地か那	牡丹	植物
2724	明治32年	春の部	墨の香や素縑に画く梅の花	梅	植物
2726	明治32年	春の部	お小姓の戀せられたる櫻か那	櫻	植物
2727	明治32年	春の部	女唄ふ蝦夷が小島や草薺ゆる	草薺	植物
2728	明治32年	春の部	牛曳いて出るや小村の桃日和	桃	植物
2729	明治32年	春の部	よき幟ほしがる小供心か那	幟	人事
2730	明治32年	春の部	小意気なる藝者通りぬ門涼み	納涼	人事
2731	明治32年	春の部	小流や野菜花さく風呂の月	雑	雑
2732	明治32年	春の部	等閑や小草花咲く裏の道	草花	植物
2733	明治32年	春の部	寒潭に小さき月を印したる	寒	時候
2734	明治32年	春の部	寒垢離を行ず小兵の男哉	寒垢離	人事
2735	明治32年	春の部	小波や寒日うすき山の池	寒	時候
2737	明治32年	春の部	海苔粗朶に足引搔かん女の子	海苔	植物
2738	明治32年	春の部	冴返る塗縁をふむ跣足かな	冴返	時候
2739	明治32年	春の部	踏青の足もよごれぬ日和かな	踏青	人事
2740	明治32年	春の部	春の宵足に温泉をそゝぎけり	春宵	時候
2741	明治32年	春の部	若草に鶏の子の足かくれけり	若草	植物
2742	明治32年	春の部	散る花や毛だらけの足踏ばす	落花	植物
2743	明治32年	春の部	陽炎や岩が根ぬらす足の跡	陽炎	天文
2744	明治32年	春の部	ぬるむ水足の甲越すかち渉り	水温む	地理
2746	明治32年	春の部	沐浴して鏡に向ふ桃の花	桃	植物
2747	明治32年	春の部	芽をふきし傾城部屋の柳か那	柳	植物
2748	明治32年	春の部	小屏風に春の灯のほのあかき	春燈	人事
2749	明治32年	春の部	春雨や傾城部屋の小行灯	春雨	天文
2750	明治32年	春の部	送り出て柳に袖をかくしけり	柳	植物
2751	明治32年	春の部	傾城の梅の紅きをめづるかな	梅	植物
2752	明治32年	春の部	傾城の柳をくゞるともし哉	柳	植物
2753	明治32年	春の部	蠟燭や金釵斜に春の宴	春	時候
2754	明治32年	春の部	かんばしき酒に酔ひたり春の宴	春	時候
2755	明治32年	春の部	小屏風や念佛幽かに春の雨	春雨	天文
2757	明治32年	春の部	神立たす天浮橋うらゝかに	麗	時候
2758	明治32年	春の部	月の梅橋に人語の響かな	梅	植物
2759	明治32年	春の部	人去て橋は柳に暮れんとす	柳	植物
2760	明治32年	春の部	鄙路行くや土橋にもゆる草日和	草薺	植物
2761	明治32年	春の部	藪入や橋の袂の乳母が店	藪入	人事
2762	明治32年	春の部	行過ぎし衣の匂や橋おぼろ	朧	天文
2763	明治32年	春の部	満汐に橋洗はれし涼しさよ	涼し	時候
2764	明治32年	春の部	唐様や白蓮房に架けし橋	蓮	植物
2765	明治32年	春の部	錫杖の石橋渡る雲の峯	雲の峰	天文
2766	明治32年	春の部	谷川や秋の雲見る丸木橋	秋の雲	天文
2768	明治32年	春の部	かしこまる烏帽子尊し梅の花	梅	植物
2769	明治32年	春の部	神の井に烏帽子を拂ふ柳かな	柳	植物
2770	明治32年	春の部	樹の下の草緑りなり春の雪	春雪	天文
2771	明治32年	春の部	青草にはぢかれにけり春の雪	春雪	天文
2772	明治32年	春の部	出て行くや沈丁臭き寺のちご	沈丁花	植物
2773	明治32年	春の部	紅梅の紅きを愛づる人もあり	梅	植物
2774	明治32年	春の部	泥を出て田螺見てゐる山の雲	田螺	動物

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2775	明治32年	春の部	門川に田螺鳴くべき曇りかな	田螺	動物
2776	明治32年	春の部	大方の雛飾りし二日哉	雛祭	人事
2777	明治32年	春の部	雛買ひに連立出でしめをと哉	雛市	人事
2779	明治32年	春の部	滝の音に春日間なる對坐哉	春日	時候
2780	明治32年	春の部	畑中や十二社詣春の風	春風	天文
2781	明治32年	春の部	湛えては松が根ひたす春の水	春の水	地理
2782	明治32年	春の部	土手の日や古葉を搔けば草萌えし	草萌	植物
2783	明治32年	春の部	畑打の人を喚ぶなり暮の道	畑打ち	人事
2784	明治32年	春の部	麗かの水を渡りぬ美なる哉	麗	時候
2785	明治32年	春の部	清人のよき衣着たる柳か那	柳	植物
2786	明治32年	春の部	灯を持って女見えたり春の宿	春	時候
2787	明治32年	春の部	春の日の虹あらはれぬ滝しぶき	春の日	天文
2788	明治32年	春の部	此頃の日和頼もし萌ゆる草	草萌	植物
2790	明治32年	春の部	畑打やものなつかしき話振	畑打ち	人事
2791	明治32年	春の部	逢着し得たり彼岸の焼豆腐	彼岸	人事
2792	明治32年	春の部	物詣彼岸の雲の尊とかり	彼岸	人事
2793	明治32年	春の部	春の水十二叢祠を繞りけり	春の水	地理
2794	明治32年	春の部	碁客相逢ふて十二社の暮遅き	遅日	時候
2795	明治32年	春の部	雉打て邯鄲の市に帰る哉	雉子	動物
2796	明治32年	春の部	氷解けて淵となりたる巖かな	氷解	地理
2797	明治32年	春の部	いさゝかの花菜見出でし山路哉	菜の花	植物
2798	明治32年	春の部	畑打や去年の債を語合ふ	畑打ち	人事
2799	明治32年	春の部	白魚や水打そゝぐ籃の草	白魚	動物
2801	明治32年	春の部	鞦韆に鶏鳴いてゐる田舎哉	鞦韆	人事
2802	明治32年	春の部	岩鼻に蕨も取らぬひとりかな	蕨	植物
2803	明治32年	春の部	竹に近く家を移しぬ竹の秋	竹の秋	植物
2804	明治32年	春の部	はらからの列見を競ふかざし哉	櫻	植物
2805	明治32年	春の部	摘草の茅花もまじりこぼれけり	摘草	人事
2806	明治32年	春の部	妻機を下らず燕堂に巣くふ	燕	動物
2807	明治32年	春の部	賜や錦させゆく鶏合	鶏合	人事
2808	明治32年	春の部	てふ / \ の物思ふらん小さき胸	蝶	動物
2809	明治32年	春の部	門川に鍋炭流る温みかな	暖	時候
2810	明治32年	春の部	やゝ遅き末黒芒の芽ばへかな	末黒の芒	植物
2811	明治32年	春の部	佛菩薩大千世界花盛り	花	植物
2813	明治32年	春の部	玉碗や美酒を盛り来る桃の花	桃	植物
2814	明治32年	春の部	桃の村を出づれば漢の代となりぬ	桃	植物
2815	明治32年	春の部	曲水や桃盛りなる酔心地	桃	植物
2816	明治32年	春の部	桃の岸に流れ寄りけり古き椀	桃	植物
2817	明治32年	春の部	白桃の蒼勝なり寒食す	寒食	人事
2818	明治32年	春の部	満朝の小人原や桃李	雑	雑
2819	明治32年	春の部	桃の枝を賜つて朝を罷るかな	桃	植物
2820	明治32年	春の部	位低く児孫に富めり桃の花	桃	植物
2821	明治32年	春の部	谷深く平家の末や桃の村	桃	植物
2822	明治32年	春の部	桃咲いて帝夜毎の微行かな	桃	植物
2824	明治32年	春の部	根を分けて菊に黄金を給はりし	菊根分	人事
2825	明治32年	春の部	人泊めて菊の根分くる旦か那	菊根分	人事
2826	明治32年	春の部	小童の菊の根分に侍りし	菊根分	人事
2827	明治32年	春の部	暮の雨菊の白根のこぼれかな	菊根分	人事

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2828	明治32年	春の部	根分すと菊園に出づ荒れしかな	菊根分	人事
2829	明治32年	春の部	帰省して一ト日は菊の根を分けし	菊根分	人事
2830	明治32年	春の部	市人の菊の根分や銭ほしき	菊根分	人事
2831	明治32年	春の部	白髪 <small>の</small> 菊の根分に召されけり	菊根分	人事
2832	明治32年	春の部	根も分けず菊に荒れたり古き庭	菊根分	人事
2833	明治32年	春の部	根分して菊に故事など文を見る	菊根分	人事
2835	明治32年	春の部	使しててふ / \ 神と語るかな	蝶	動物
2837	明治32年	春の部	麗かの繡したり美なる雲	麗	時候
2839	明治32年	春の部	町中に春の埃りや女連れ	春塵	天文
2841	明治32年	春の部	日に疎き梨の苔や茶のけふり	梨の花	植物
2843	明治32年	春の部	菜の花に鍛冶が家見る眞昼哉	菜の花	植物
2845	明治32年	春の部	鶏の子やぬるむ水のむ器	水温む	地理
2847	明治32年	春の部	陽炎の草を離れてもゆる哉	陽炎	天文
2849	明治32年	春の部	唐人の春の冠うるはしき	春	時候
2851	明治32年	春の部	江の島の神の細工や春の貝	春	時候
2852	明治32年	春の部	鍋小さく長閑に物の煮ゆる哉	長閑	時候
2853	明治32年	春の部	永き日の物の種まくひとり哉	日永	時候
2855	明治32年	春の部	函根の山煙揚るところ / \	雑	雑
2857	明治32年	春の部	砂利舟の砂利こぼれけり春の風	春風	天文
2859	明治32年	春の部	山中は椿に物の静かなり	椿	植物
2861	明治32年	春の部	わざおぎや菜種の中の戻り路	菜の花	植物
2863	明治32年	春の部	菜の花や鐘もつかざる山の寺	菜の花	植物
2865	明治32年	春の部	雲ゆくや山冷かに蔭の臺	蔭の臺	植物
2867	明治32年	春の部	一村や晴れて富士見る柿若葉	柿若葉	植物
2869	明治32年	春の部	菜の花の美なる山河を夢むらん	菜の花	植物
2871	明治32年	春の部	春の夜の洗足ぬるき旅籠かな	春夜	時候
2873	明治32年	春の部	旭のさすや羽衣乾く草の蝶	蝶	動物
2875	明治32年	春の部	てふの眉誰が家の子の描きけん	蝶	動物
2877	明治32年	春の部	葉櫻にあしたの風や白き幣	葉櫻	植物
2879	明治32年	春の部	てふ / \ の麦の中から生れけり	蝶	動物
2881	明治32年	春の部	材木の菜種日和に乾くかな	菜の花	植物
2883	明治32年	春の部	搖曳の舟に見おろす海雲哉	雑	雑
2885	明治32年	春の部	思はずの小松が原や菜種さく	菜の花	植物
2887	明治32年	春の部	菜の花に染物干すや町はづれ	菜の花	植物
2889	明治32年	春の部	野社の菜の花くもり太鼓打つ	菜の花	植物
2890	明治32年	春の部	囚人の物もいはざる日永かな	日永	時候
2891	明治32年	春の部	絹張の蝙蝠今や菜種咲く	菜の花	植物
2892	明治32年	春の部	野火消えて伊吹おろしの淋しかり	野山焼	人事
2893	明治32年	春の部	菜種咲く近江の空の低き哉	菜の花	植物
2894	明治32年	春の部	近江路や菜の花車人みちて	菜の花	植物
2895	明治32年	春の部	菜の花に小さき佛の眠る哉	菜の花	植物
2896	明治32年	春の部	名物の餅に日永の埃り哉	日永	時候
2897	明治32年	春の部	花ちるや鱸にすべき籠の鮎	鮎膾	人事
2898	明治32年	春の部	降らざりし菜の花ぐもり京に入る	菜の花	植物
2899	明治32年	春の部	春の人に吾もまじりて京に入る	春	時候
2900	明治32年	春の部	雀子の一ト日は水に遊びけり	雀の子	動物
2902	明治32年	春の部	佛具屋に日當る春や奈良の町	春	時候
2903	明治32年	春の部	永き日の珠数賣る店や人もなし	日永	時候

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2904	明治32年	春の部	袈裟衣緋や紫や京の春	春	時候
2905	明治32年	春の部	木魚さらす古道具の店長閑なる	長閑	時候
2906	明治32年	春の部	連翹や古き経賣る店の先	連翹	植物
2907	明治32年	春の部	幢幔や寺寂として春の雨	春雨	天文
2908	明治32年	春の部	金色の佛黒みし櫻か那	櫻	植物
2909	明治32年	春の部	行春の小坊主鐘を撞いて出る	行春	時候
2910	明治32年	春の部	春雨や寺かりてゐる夫婦もの	春雨	天文
2911	明治32年	春の部	禅を問へば桃花に牛の乳白し	桃	植物
2913	明治32年	春の部	剛の坐の黒皮緘し梅の花	梅	植物
2914	明治32年	春の部	漂着の黒奴に春の人ばかり	春	時候
2915	明治32年	春の部	黒奴の罵合ふや花の茶屋	花	植物
2916	明治32年	春の部	路傍や花菜に人の飯黒き	菜の花	植物
2917	明治32年	春の部	注連張りし黒き巖や海朧	朧	天文
2918	明治32年	春の部	山吹や鉄漿黒々の茶屋女	山吹	植物
2919	明治32年	春の部	引越しのかまどは黒し桃の花	桃	植物
2920	明治32年	春の部	黒々と木佛並び春の月	春の月	天文
2921	明治32年	春の部	花かざし顔の黒子やよき女	花	植物
2922	明治32年	春の部	酒苦がく櫻は黒き男かな	櫻	植物
2924	明治32年	春の部	てふ／＼の止まらんとする微風かな	蝶	動物
2925	明治32年	春の部	てふ／＼の物も思はず飛んでゐる	蝶	動物
2926	明治32年	春の部	てふ／＼や舟から上り岐れ道	蝶	動物
2927	明治32年	春の部	てふ／＼や何に集る庭の昼	蝶	動物
2928	明治32年	春の部	てふ／＼の吹かれては又逢はまくす	蝶	動物
2929	明治32年	春の部	間庭や蝶も出でざる昼下り	蝶	動物
2930	明治32年	春の部	てふ／＼の顔よきが恋せられなん	蝶	動物
2932	明治32年	春の部	釣鐘や落花つめたき雨のもり	落花	植物
2933	明治32年	春の部	商人の釣鐘覗く日永哉	日永	時候
2934	明治32年	春の部	鐘つけば殷々となる朧かな	朧	天文
2935	明治32年	春の部	行春の鐘撞き出す下山かな	行春	時候
2936	明治32年	春の部	春の日の鐘釣り上ぐる群衆哉	春日	時候
2937	明治32年	春の部	鐘釣て山吹散りぬ地のゆるぎ	山吹	植物
2938	明治32年	春の部	菜の花や村に鐘鑄る人どほり	菜の花	植物
2939	明治32年	春の部	試みに鐘など撞くや春の寺	春	時候
2940	明治32年	春の部	洪鐘や寂莫として落椿	椿	植物
2941	明治32年	春の部	陽炎の大地に据ゑし鐘黒き	陽炎	天文
2942	明治32年	春の部	島原や菜種の花に振返り	菜の花	植物
2943	明治32年	春の部	菜の花に揚屋の窓や小さかり	菜の花	植物
2944	明治32年	春の部	菜の花や人を手招ぐ小傾城	菜の花	植物
2945	明治32年	春の部	島原に異人も見えて柳かな	柳	植物
2946	明治32年	春の部	傾城の八文字ふむ柳かな	柳	植物
2947	明治32年	春の部	傾城の日傘は赤き柳かな	柳	植物
2948	明治32年	春の部	洋人や菜種の花に廓出る	菜の花	植物
2949	明治32年	春の部	日は遅き壬生狂言の舞台かな	遅日	時候
2950	明治32年	春の部	菜の花に物賣る店や壬生念佛	菜の花	植物
2951	明治32年	春の部	島原は菜の花ぐもり壬生念佛	菜の花	植物
2952	明治32年	春の部	壬生寺に狂言はてし雲雀かな	雲雀	動物
2953	明治32年	春の部	飴賣も見てゐる壬生の踊かな	壬生念佛	人事
2955	明治32年	春の部	鶯や松の梢を雲帰る	鶯	動物

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2957	明治32年	春の部	飛込んで浮きし蛙の頓悟哉	蛙	動物
2959	明治32年	春の部	遥拝の大極殿や雲雀鳴く	雲雀	動物
3793	明治33年	春の部	清泉に梅花を點ず梅の花	梅	植物
3794	明治33年	春の部	水に落つ鶴の涙や梅の花	梅	植物
3795	明治33年	春の部	徒らに焼かれし猫の戀衣	猫の戀	動物
3796	明治33年	春の部	春の夜や廊の裏の小提灯	春夜	時候
3797	明治33年	春の部	潔き白魚の目や水の中	白魚	動物
3798	明治33年	春の部	白魚をえりわけにけり海の草	白魚	動物
3799	明治33年	春の部	老猫の寝顔に戀もなかりけり	猫の戀	動物
3800	明治33年	春の部	東風吹くや松原出でし蜚少女	東風	天文
3801	明治33年	春の部	羽衣の東風に吹かれて松朝日	東風	天文
3802	明治33年	春の部	雪に落つ花釵や雪すべり	花簪	植物
3803	明治33年	春の部	人形や錦屑散る春の風	春風	天文
3804	明治33年	春の部	藻の花に手の届かざる沔哉	藻の花	植物
3805	明治33年	春の部	這ふちごのくうすべ知らで苺哉	苺	植物
3806	明治33年	春の部	諸共に泣き出す子供角力哉	角力	人事
3807	明治33年	春の部	雛抱いて唄ひ戻りぬ隣の子	雛	人事
3808	明治33年	春の部	ふらこゝの影の長さよ水の上	鞦韆	人事
3809	明治33年	春の部	提灯や路にかぶさる夜の花	花	植物
3811	明治33年	春の部	鎮守府の將軍星や王二月	二月	時候
3812	明治33年	春の部	藤茶屋の軒も柱も藤の花	藤の花	植物
3813	明治33年	春の部	出代の小錢ためたる財布かな	出代	人事
3814	明治33年	春の部	出代の人となりたる男ぶり	出代	人事
3815	明治33年	春の部	出代の主の妾を憎む哉	出代	人事
3816	明治33年	春の部	藪入の流行目にさす薬かな	藪入	人事
3817	明治33年	春の部	宮城野は畑となりし花菜哉	菜の花	植物
3818	明治33年	春の部	傾城の白石嘶春の雨	春雨	天文
3819	明治33年	春の部	遠雷に耳驚かす汐干かな	潮干	地理
3820	明治33年	春の部	よき人の足をかゆがる汐干かな	潮干	地理
3821	明治33年	春の部	踏青の終に汐干に遊びけり	潮干	地理
3822	明治33年	春の部	灯火に汐干のつとをひらきけり	潮干	地理
3823	明治33年	春の部	遠く遊ぶ汐干の人や暮遅き	潮干	地理
3824	明治33年	春の部	海苔籠朶や雨ふりやまぬ汐干瀉	潮干	地理
3825	明治33年	春の部	東の海のしほひや春の雲	潮干	地理
3826	明治33年	春の部	門前の汐干に遊ぶ日もすがら	潮干	地理
3827	明治33年	春の部	男達船に物煮る汐干かな	潮干	地理
3946	明治34年	春の部	谷底の残の雪や山おろし	残雪	地理
3947	明治34年	春の部	小額による年波や猫の妻	猫の戀	動物
3948	明治34年	春の部	春の雪朧の月を見る兒に	春雪	天文
3949	明治34年	春の部	雪解の日毎 / \ や山の色	雪解	地理
3950	明治34年	春の部	初雷やさる上臈の宮ごもり	初雷	天文
3951	明治34年	春の部	轉って / \ いつこ飛去りぬ	轉	動物
3952	明治34年	春の部	語らひや身こもる田螺物うげに	田螺	動物
3953	明治34年	春の部	いもとねて神鳴をきく春の宵	春宵	時候
3954	明治34年	春の部	花にぬる鎧や春の宵しめり	春宵	時候
3955	明治34年	春の部	いつはりの皮衣やく春の宵	春宵	時候
3956	明治34年	春の部	名玉を砕いて春の夜の愁	春夜	時候
3957	明治34年	春の部	住吉の松めでたしや春の宵	春宵	時候

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3958	明治34年	春の部	山吹の庄や山吹姫を見る	山吹	植物
3959	明治34年	春の部	角落ちし氣の衰や鹿の兒	鹿の角落つ	動物
3960	明治34年	春の部	飯蛸のうかれ心や月の汐	飯だこ	動物
3961	明治34年	春の部	よき衣のけはひも春の夢心	春の夢	人事
3962	明治34年	春の部	呼びかはす雀の親子悲くも	雀の子	動物
3963	明治34年	春の部	夕かすみ絹を曳いたる如き哉	霞	天文
3964	明治34年	春の部	初午の市に上りし鯁かな	鯁	動物
3965	明治34年	春の部	春の水風にふかるゝ水の皺	春の水	地理
3966	明治34年	春の部	あらがねに陽炎もゆる車上かな	陽炎	天文
3967	明治34年	春の部	紅の帳も見えず夕吹雪	吹雪	天文
3968	明治34年	春の部	塞上の胡笳塞下の吹雪哉	吹雪	天文
3969	明治34年	春の部	むせぶらん千鳥悲しや小夜吹雪	吹雪	天文
3970	明治34年	春の部	送出て吹雪の人を望みけり	吹雪	天文
3971	明治34年	春の部	日當や背戸の種井の水浅み	種井	人事
3972	明治34年	春の部	種物の器の水やくつがへり	種物	人事
3973	明治34年	春の部	紫に光りてあやし物の種	種物	人事
3974	明治34年	春の部	水につく藁の青みや種俵	種俵	人事
3975	明治34年	春の部	春寒したねをつくべき水溜	春寒	時候
3976	明治34年	春の部	星おちて紫烟騰りぬ胡射の春	春	時候
3977	明治34年	春の部	暁の星の柳に消えて昆明池	柳	植物
3978	明治34年	春の部	門に見る柳に絶えぬ愁かな	柳	植物
3979	明治34年	春の部	糞し去る玳瑁の梁や燕	燕	動物
3980	明治34年	春の部	芽を吹いて諸木の競心かな	芽吹く	植物
3981	明治34年	春の部	瓔珞の光や春の殿づくり	春	時候
3982	明治34年	春の部	買得たる桃の安さよ乱咲き	桃	植物
3983	明治34年	春の部	鶯のころも輕げに見ゆるかな	鶯	動物
3984	明治34年	春の部	鳥の巢や既に故郷の路にあり	鳥の巢	動物
3985	明治34年	春の部	干鱈さいて冷たく覚ゆ宵の春	春宵	時候
3986	明治34年	春の部	裏山の雑木の春や禽の声	春	時候
3987	明治34年	春の部	如月の節物遅し廿日過	如月	時候
3988	明治34年	春の部	暖や日向に据ゑし薬風呂	暖	時候
3989	明治34年	春の部	永き日の寿型をこねる一人かな	日永	時候
3990	明治34年	春の部	吊したるきゞすに遅き日脚哉	遅日	時候
3991	明治34年	春の部	山吹を括りて石を露はしぬ	山吹	植物
3992	明治34年	春の部	雛の間は寂しく思ふ四日哉	雛	人事
3993	明治34年	春の部	何草の芽ともわかざる花壇哉	草の芽	植物
3994	明治34年	春の部	黄鳥のやゝ近づいて来鳴く哉	鶯	動物
3995	明治34年	春の部	一丈もしだれて柳水を拂ふ	柳	植物
3996	明治34年	春の部	春の日の木魚を市にさらしけり	春日	時候
3997	明治34年	春の部	魏か晋か枯木か梅か古法帖	雑	雑
3998	明治34年	春の部	花束を抛ち去りぬ蜂の穴	蜂	動物
3999	明治34年	春の部	耕の人の家路や夕ぬくき	耕	人事
4000	明治34年	春の部	満面の酔や櫻に酒を吹く	櫻	植物
4001	明治34年	春の部	散りかゝる彼岸櫻や西行忌	西行忌	人事
4002	明治34年	春の部	釈典の人少ナなる香火かな	釋奠	人事
4003	明治34年	春の部	初花に心も留めず朧が妻	花	植物
4004	明治34年	春の部	種芋を盗まれにけり宵の中	種芋	植物
4005	明治34年	春の部	鳥雲に入て佛に見ゆらむ	鳥入雲	動物

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4006	明治34年	春の部	偶々に麦ふむ足やこそかゆき	麥踏	人事
4007	明治34年	春の部	草餅を三ツ重ねたり小さき盆	草餅	人事
4008	明治34年	春の部	峯入の咒を讀上ぐる風雨かな	峰入	人事
4009	明治34年	春の部	只一ツ芽吹く接穂や忘霜	別れ霜	天文
4010	明治34年	春の部	花まさに開かん象行く吉なり	花	植物
4011	明治34年	春の部	野遊の女に歌をおくりけり	野遊	人事
4012	明治34年	春の部	花の露に濕ふ如し御身拭	御身拭	人事
4013	明治34年	春の部	耳をぬく雉子の悲鳴や泊狩	雉子	動物
4014	明治34年	春の部	ひたのぼる魚のきほひや上りやな	上り築	人事
4015	明治34年	春の部	物は夕鳥の別も憂かりけり	鳥帰る	動物
4016	明治34年	春の部	寒食や廂の前の白き花	寒食	人事
4017	明治34年	春の部	三里來て大津の鐘や鮒膾	鮒膾	人事
4018	明治34年	春の部	薪能奈良は静かに明けにけり	薪能	人事
4019	明治34年	春の部	豆の花摘まんと蜂にさゝれけり	雑	雑
4250	明治35年	春の部	鶯や人熱鉄を湯に投ず	鶯	動物
4251	明治35年	春の部	朧夜のたま / \ 鶴の鳴き去りぬ	朧	天文
4252	明治35年	春の部	雪洞の絹の光りや冴返り	冴返	時候
4253	明治35年	春の部	世の中の柳を見ても涙かな	柳	植物
4254	明治35年	春の部	鐘撞て京の日永し智恩院	日永	時候
4255	明治35年	春の部	佛閣の彼方にさびし薪能	薪能	人事
4256	明治35年	春の部	下萌の草に愁もなかりけり	草萌	植物
4257	明治35年	春の部	春の水柳洗はんばかりかな	春の水	地理
4258	明治35年	春の部	白魚の子をや生むらん宵の月	白魚	動物
4259	明治35年	春の部	炉塞や佛の飯のさびしくも	爐塞	人事
4260	明治35年	春の部	炉塞ば炉なし柳は緑にて	爐塞	人事
4261	明治35年	春の部	煩惱の炉は塞がてと悲めり	爐塞	人事
4262	明治35年	春の部	乾海苔の小家や春の雲の影	春の雲	天文
4264	明治35年	春の部	かゝる世に賢を招かば梅の花	梅	植物
4266	明治35年	春の部	桃散て神のお水もぬるみけり	桃	植物
4268	明治35年	春の部	初雷や人を惑はす張天師	初雷	天文
4269	明治35年	春の部	陽炎や大津の路の絵紙賣	陽炎	天文
4270	明治35年	春の部	温む川脛赤き鳥都鳥	水温む	地理
4272	明治35年	春の部	古の櫻もさかで哀なり	櫻	植物
4274	明治35年	春の部	畑打到鳥なく頃や歌枕	畑打ち	人事
4275	明治35年	春の部	初雷や屏風の鴛鴦の驚かず	初雷	天文
4276	明治35年	春の部	日當や競ひ出でたる蒨の臺	蒨の臺	植物
4278	明治35年	春の部	だまっては居れぬしびれもねはん像	涅槃會	人事
4280	明治35年	春の部	糊臭き雀の嘴やねはん像	涅槃會	人事
4282	明治35年	春の部	ねはん會や各が腹のへり加減	涅槃會	人事
4284	明治35年	春の部	一時佛右に寐返る別れかな	涅槃會	人事
4285	明治35年	春の部	引鶴の黄金の札も霞かな	引鶴	動物
4286	明治35年	春の部	耕して居れば咎もなかりけり	耕	人事
4287	明治35年	春の部	花くもり花なき里もなかりけり	花	植物
4288	明治35年	春の部	海棠に珊瑚の鞭をふるひけり	海棠	植物
4289	明治35年	春の部	大名の驕の沙汰や汐干狩	潮干狩	人事
4291	明治35年	春の部	綿つみの玉の臺や春寒し	春寒	時候
4292	明治35年	春の部	龍天に黄帝の御衣ひるかへる	龍登天	動物
4293	明治35年	春の部	踏青の皆珠をふむ美少年	踏青	人事

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4294	明治35年	春の部	猫の子の父も知らざる哀かな	猫の子	動物
4295	明治35年	春の部	釈奠や上にまれます聖天子	釋奠	人事
4296	明治35年	春の部	凍とけてその若緑常盤なり	凍解	地理
4297	明治35年	春の部	淡雪の淡き契りや夢ばかり	淡雪	天文
4298	明治35年	春の部	つばくらに昼鳴る鐘や知恩院	燕	動物
4299	明治35年	春の部	面を吹く風軟かや小弓引	春風	天文
4300	明治35年	春の部	冷めしの宿はものうし朧月	朧月	天文
4301	明治35年	春の部	天さかる鄙路の春や歌枕	春	時候
4302	明治35年	春の部	趣や芥もくたに温む水	水温む	地理
4303	明治35年	春の部	悉く揚がる大凧小凧かな	凧	人事
4304	明治35年	春の部	梅咲いて賢を招かん國の守	梅	植物
4305	明治35年	春の部	獺の妻病で祭か延びにけり	獺の祭	時候
4306	明治35年	春の部	獺魚をまつるも宵の春なれや	獺の祭	時候
4307	明治35年	春の部	寒食の小皿に紅き芽うど哉	寒食	人事
4308	明治35年	春の部	うどの芽の潔うして春寒し	春寒	時候
4309	明治35年	春の部	涅槃会や鳥啼いてゐる沙羅双樹	涅槃會	人事
4310	明治35年	春の部	ねはん會の済んで鳴出す猫の妻	涅槃會	人事
4311	明治35年	春の部	二日灸麦の畑を眺めやり	二日灸	人事
4312	明治35年	春の部	二日灸肌ぬく事を羞らへり	二日灸	人事
4313	明治35年	春の部	初雷やよき人の夢を驚かす	初雷	天文
4314	明治35年	春の部	畑打や知事が来たとも知らぬげな	畑打ち	人事
4315	明治35年	春の部	水ぬるみ流るゝさまや椿落つ	水温む	地理
4316	明治35年	春の部	陽炎や庭に干したる鬼の面	陽炎	天文
4317	明治35年	春の部	雛の間の桃の屑はく四日哉	雛祭	人事
4318	明治35年	春の部	雛棚の飾も終へてうれしけれ	雛祭	人事
4319	明治35年	春の部	別荘の春まだ浅き便り哉	春淺し	時候
4320	明治35年	春の部	田螺臭き料理なりけり草の宿	田螺	動物
4321	明治35年	春の部	初午や狐のぬすむ小豆めし	初午	人事
4322	明治35年	春の部	手のひらの子雀飛ばす春の風	春風	天文
4323	明治35年	春の部	高砂や此浦舟も春けしき	春	時候
4324	明治35年	春の部	庭前の雪も残らずなりにけり	残雪	地理
4325	明治35年	春の部	子がやせた母もやせたと鳴蛙	蛙	動物
4326	明治35年	春の部	山吹や白木作りの行在所	山吹	植物
4327	明治35年	春の部	出代や叶はぬ戀の三年越	出代	人事
4328	明治35年	春の部	つみ草や羽衣見ゆるあたりまで	摘草	人事
4329	明治35年	春の部	出代の騮られ兒や桃の花	雑	雑
4330	明治35年	春の部	雁風呂のぬるきもうたゝ哀也	雁風呂	人事
4331	明治35年	春の部	白魚の身は潔し葦なます	雑	雑
4332	明治35年	春の部	小坊主の彼岸顔なり山嵐	彼岸	人事
4333	明治35年	春の部	悉く蛙となりぬ蛙の子	蛙	動物
4334	明治35年	春の部	古つかをさくり出して日は永し	日永	時候
4335	明治35年	春の部	昭君の馬や楊の花ふゝき	柳	植物
4336	明治35年	春の部	階前の花飛ぶ急に秦舞陽	花	植物
4337	明治35年	春の部	年々の桃の流や西施石	桃	植物
4338	明治35年	春の部	春風や徐福が舩の童男女	春風	天文
4339	明治35年	春の部	家に居る東方朔や田螺あへ	田螺和	人事
4340	明治35年	春の部	田螺賣る小鍋に春の日ざし哉	田螺	動物
4341	明治35年	春の部	陽炎や田螺の鍋の煮こぼるゝ	田螺	動物

春の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4342	明治35年	春の部	田螺賣だまされてゐる都かな	田螺	動物
4343	明治35年	春の部	牡丹切て客驚かす春申君	牡丹	植物
4344	明治35年	春の部	燕青が雁を見上ぐる眼かな	雁	動物
4345	明治35年	春の部	古道を箕子泣き去りぬつく／＼し	つくつく法師	動物
4346	明治35年	春の部	大將は霍嫫姚ぞ霜の声	霜	天文
4347	明治35年	春の部	草餅に張儀が舌の長い事	草餅	人事
4348	明治35年	春の部	春雨や縁に湯氣立つ薬鍋	春雨	天文
4349	明治35年	春の部	虎杖も蘇ものびて暮おそし	雑	雑
4350	明治35年	春の部	春の水あさみに及ぶ溢かな	春の水	地理
4351	明治35年	春の部	田兎鶉となりしや否吾不知焉	田兎化して鶉となる	時候
4352	明治35年	春の部	立札に人たかりけり花吹雪	花	植物
4353	明治35年	春の部	世の中の俳人どもやつく／＼し	土筆	植物
4354	明治35年	春の部	猫の戀去年の恨もありぬべし	猫の戀	動物
4355	明治35年	春の部	遅き日や壬生の舞台の片明り	遅日	時候
4356	明治35年	春の部	踊見て壬生から戻る日永哉	日永	時候
4357	明治35年	春の部	先生がつくしの歌をよまれけり	土筆	植物
4358	明治35年	春の部	木蓮や庭にほしたる種俵	木蓮	植物
4359	明治35年	春の部	木蓮の画室に散りぬ二三片	木蓮	植物
4360	明治35年	春の部	春雨や狐落ちたる女泣く	春雨	天文
4361	明治35年	春の部	歌塚や柿の木の芽も春にして	春	時候
4362	明治35年	春の部	ほの／＼とあけの蛙も鳴きにけり	蛙	動物
4363	明治35年	春の部	石楠花金剛山の知らぬ鳥	石楠花	植物
4364	明治35年	春の部	鳴神の石にひゝきや石楠花	石楠花	植物
4365	明治35年	春の部	麦鶉田兎の妻の知らず顔	麦鶉	動物
4366	明治35年	春の部	到る処菜種の中の麦青し	麦青む	植物
4367	明治35年	春の部	竹の秋嵯峨の名所は荒れにけり	竹の秋	植物
4368	明治35年	春の部	蛇も穴を出つる日和や老の杖	蛇穴を出る	動物
4369	明治35年	春の部	春もうし薬を煮る火消えがちに	春	時候
4370	明治35年	春の部	山霊の不可思議もあり泊狩	泊狩	人事
4371	明治35年	春の部	蜃氣楼いかなる神のこもるらん	蜃氣楼	天文
4372	明治35年	春の部	玉殿に春の御悩や反魂香	春	時候
4373	明治35年	春の部	桃の酒さめて桃ちる日暮哉	桃の酒	人事

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
10510	明治26年	夏の部	夕立のわするものらし松の月	夕立	天文
33	明治27年	夏の部	宿とりて衣更へたる夕かな	更衣	人事
34	明治27年	夏の部	職人の衣更へたる一坐かな	更衣	人事
35	明治27年	夏の部	菩提寺の僧と語るや衣更	更衣	人事
36	明治27年	夏の部	ほろ / \ と雉啼く野辺の麦熟せり	麥	植物
37	明治27年	夏の部	日入らんとして麦刈る野辺に人むれたり	麦刈	人事
38	明治27年	夏の部	刈麦の庄屋が軒の匂ひかな	麦刈	人事
39	明治27年	夏の部	卯の花の鎧の袖にこぼれける	卯の花	植物
40	明治27年	夏の部	卯の花の爰は都のはづれなり	卯の花	植物
41	明治27年	夏の部	夕月の卯の花垣根馬士帰る	卯の花	植物
42	明治27年	夏の部	一輪で咲く大寺の牡丹かな	牡丹	植物
43	明治27年	夏の部	杜若咲くや汀の石黒し	杜若	植物
44	明治27年	夏の部	廣縁に姫居並べり杜若	杜若	植物
45	明治27年	夏の部	杜若池一面に咲きにけり	杜若	植物
46	明治27年	夏の部	杜若誰殿の住みあらしけむ	杜若	植物
47	明治27年	夏の部	杜若庄屋が池の夜明かな	杜若	植物
48	明治27年	夏の部	夕月の白芥子の花ほろ / \ と	罌粟の花	植物
49	明治27年	夏の部	面白や芥子散る里の夕月夜	罌粟の花	植物
50	明治27年	夏の部	白芥子に赤前垂の女かな	罌粟の花	植物
51	明治27年	夏の部	わが宿の白芥子の花咲きにけり	罌粟の花	植物
52	明治27年	夏の部	名も知らぬ鳥の啼きけり夏木立	夏木立	植物
53	明治27年	夏の部	風をり / \ 灯火青き若葉かな	若葉	植物
54	明治27年	夏の部	夕雨の夏山の裾牛帰る	夏山	地理
55	明治27年	夏の部	ものゝふの歌よまんとす子規	時鳥	動物
56	明治27年	夏の部	大佛の肩のあたりを子規	時鳥	動物
57	明治27年	夏の部	子規石の華表に苔むしぬ	時鳥	動物
58	明治27年	夏の部	子規つら / \ 高き梢かな	時鳥	動物
59	明治27年	夏の部	神体の何とも知れず子規	時鳥	動物
60	明治27年	夏の部	宮柱太しき立てほとゝきす	時鳥	動物
61	明治27年	夏の部	大川の舟箭の如し子規	時鳥	動物
62	明治27年	夏の部	子規某侯の登城かな	時鳥	動物
63	明治27年	夏の部	行列の跡や先なり子規	時鳥	動物
64	明治27年	夏の部	子規御意むづかしの大名や	時鳥	動物
65	明治27年	夏の部	子規名古曾は古き関所なり	時鳥	動物
66	明治27年	夏の部	子規箱根峠の夜明かな	時鳥	動物
67	明治27年	夏の部	あけぼのゝ船頭ひとり子規	時鳥	動物
68	明治27年	夏の部	直垂の人立ちにけり子規	時鳥	動物
69	明治27年	夏の部	子規五條の橋の夜明かな	時鳥	動物
70	明治27年	夏の部	子規啼くや古墳月黒し	時鳥	動物
71	明治27年	夏の部	一峯江に落ちて青し子規	時鳥	動物
72	明治27年	夏の部	子規なくや断岸三千丈	時鳥	動物
73	明治27年	夏の部	大木の道に仆れつひきかへる	墓	動物
74	明治27年	夏の部	草屋二軒中より出る墓	墓	動物
75	明治27年	夏の部	蚊遣火や親老いて子は幼し	蚊遣	人事
76	明治27年	夏の部	旅僧の軒にゑむかやりかな	蚊遣	人事
77	明治27年	夏の部	一峯高し蚊遣の里の家五六	蚊遣	人事
78	明治27年	夏の部	山々の裾はかやりの烟かな	蚊遣	人事
79	明治27年	夏の部	つくゞと富士見る人や五月晴	五月晴	天文

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
80	明治27年	夏の部	五月雨や濁浪一瀉三千里	五月雨	天文
81	明治27年	夏の部	五月雨の函根を越えて宿りけり	五月雨	天文
82	明治27年	夏の部	五月雨の店頭の小稚眠りける	五月雨	天文
83	明治27年	夏の部	五月雨や翁端然として大閤記	五月雨	天文
84	明治27年	夏の部	五月雨の江戸は八百八町なり	五月雨	天文
85	明治27年	夏の部	五月雨の馬ほく / \ と東海道	五月雨	天文
86	明治27年	夏の部	葉がくれのいちご見えたる夕日かな	苺	植物
87	明治27年	夏の部	寺子らが机の上のいちごかな	苺	植物
88	明治27年	夏の部	女の子雛人形のいちごかな	苺	植物
89	明治27年	夏の部	里の子のいちごわけり小藪道	苺	植物
90	明治27年	夏の部	乳母が手の無下に卑きいちごかな	苺	植物
91	明治27年	夏の部	蝸牛や竹縁三尺経机	蝸牛	動物
92	明治27年	夏の部	かたつむり公達のむつからせ給ふ	蝸牛	動物
93	明治27年	夏の部	蝸牛林中に入て雨晴れぬ	蝸牛	動物
94	明治27年	夏の部	蝸牛行脚の僧未だ帰らず	蝸牛	動物
95	明治27年	夏の部	翡翠の一ツ止まって小雨ふる	翡翠	動物
96	明治27年	夏の部	かはせみの飛去て池暮れんとす	翡翠	動物
97	明治27年	夏の部	百合咲くや旅僧ひとり地藏堂	百合	植物
98	明治27年	夏の部	古塚の白百合の花咲きにけり	百合	植物
99	明治27年	夏の部	百合の花山門をくぐる女かな	百合	植物
100	明治27年	夏の部	里の子の百合の花さす地藏かな	百合	植物
101	明治27年	夏の部	禿山を見上ぐる牛の暑さかな	暑さ	時候
102	明治27年	夏の部	炎天の村は鎮守の祭かな	炎天	天文
103	明治27年	夏の部	炎天の川原に人の声すなり	炎天	天文
104	明治27年	夏の部	炎天や十里の沙路人見えず	炎天	天文
105	明治27年	夏の部	炎天の漁人群がる川瀬かな	炎天	天文
106	明治27年	夏の部	炎天を只銅像の高きかな	炎天	天文
107	明治27年	夏の部	炎天の大杉ところ / \ かな	炎天	天文
108	明治27年	夏の部	炎天や廣野の中の石地藏	炎天	天文
109	明治27年	夏の部	炎天の牛引出すや村外れ	炎天	天文
110	明治27年	夏の部	炎天の大路直なる都かな	炎天	天文
111	明治27年	夏の部	炎天に立並びけり大佛	炎天	天文
112	明治27年	夏の部	炎天の川原に眠る舟子かな	炎天	天文
113	明治27年	夏の部	炎天の峠越えたるひとりかな	炎天	天文
114	明治27年	夏の部	炎天の峠を上る驛馬かな	炎天	天文
115	明治27年	夏の部	炎天を船千艘の港かな	炎天	天文
116	明治27年	夏の部	炎天を長屋 / \ の軒かな	炎天	天文
117	明治27年	夏の部	炎天の乞食ひとり眠りけり	炎天	天文
118	明治27年	夏の部	炎天の瘦牛ところ / \ かな	炎天	天文
119	明治27年	夏の部	炎天の畑中を通る男かな	炎天	天文
120	明治27年	夏の部	炎天を順礼越ゆる峠かな	炎天	天文
121	明治27年	夏の部	涼しさや竹揺れて海見えにけり	涼し	時候
122	明治27年	夏の部	百萬の灯火涼し江戸の町	涼し	時候
123	明治27年	夏の部	涼しさや磯馴松かげところ / \	涼し	時候
124	明治27年	夏の部	涼しさや大海原を月一輪	涼し	時候
125	明治27年	夏の部	涼しさや東は海波三萬里	涼し	時候
126	明治27年	夏の部	涼しさや水橋上を越えんとす	涼し	時候
127	明治27年	夏の部	涼しさや浪とう / \ と海士が軒	涼し	時候

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
128	明治27年	夏の部	涼しさや燈火見ゆる向川岸	涼し	時候
129	明治27年	夏の部	涼しさや夕立ながら松の月	涼し	時候
130	明治27年	夏の部	清水とく / \ 晝とぞしたる小村かな	清水	地理
131	明治27年	夏の部	武者一騎岩踏みならず清水かな	清水	地理
132	明治27年	夏の部	清水湧く小村の軒の草長し	清水	地理
133	明治27年	夏の部	夕顔や職人かへる薄月夜	夕顔	植物
134	明治27年	夏の部	撫子や晝静かにして鶏うたふ	撫子	植物
135	明治27年	夏の部	岨道の撫子やせて覚束な	撫子	植物
309	明治28年	夏の部	丹壘白壘若葉の中の五層樓	若葉	植物
310	明治28年	夏の部	打開く大手の門の青あらし	青嵐	天文
311	明治28年	夏の部	玉欄干釵光扇影青あらし	青嵐	天文
312	明治28年	夏の部	青嵐吹き入る海の朝日かな	青嵐	天文
313	明治28年	夏の部	大川の渦き青く螢とぶ	螢	動物
314	明治28年	夏の部	僧入定ほたる三ツ四ツ低くとぶ	螢	動物
315	明治28年	夏の部	前栽のほたる三ツ四ツ小雨ふる	螢	動物
317	明治28年	夏の部	時鳥況んや我は夢みらく	時鳥	動物
318	明治28年	夏の部	人見えず只海山のさみだるゝ	五月雨	天文
320	明治28年	夏の部	梅雨晴のそこと定めよ須磨明石	梅雨晴	天文
321	明治28年	夏の部	柳暗く水白く水鶏なく夜かな	水鶏	動物
322	明治28年	夏の部	灯幽かに鶉飼が妻のひとり居る	鶉飼	人事
323	明治28年	夏の部	岨道や丈三尺の蛇の衣	蛇衣を脱ぐ	動物
324	明治28年	夏の部	五月雨の大佛仰ぐひとりかな	五月雨	天文
325	明治28年	夏の部	無二無三に角振立てよ蝸牛	蝸牛	動物
326	明治28年	夏の部	夕立の跡に連る白帆かな	夕立	天文
327	明治28年	夏の部	夕立の雲吹きつけぬ天主閣	夕立	天文
329	明治28年	夏の部	夕立の板東太郎六十里	夕立	天文
330	明治28年	夏の部	姫百合の覚束なげや草の中	百合	植物
331	明治28年	夏の部	今年竹瀝車の烟のすさまじや	若竹	植物
332	明治28年	夏の部	雲の峯満洲の野に崩れんとす	雲の峰	天文
333	明治28年	夏の部	雲の峯奥州五十四郡なり	雲の峰	天文
334	明治28年	夏の部	夏ころも奥の山越え出羽の海	夏衣	人事
335	明治28年	夏の部	某も貴殿も今日の暑さ哉	暑さ	時候
336	明治28年	夏の部	ゆき / \ て五十四郡の清水のまん	清水	地理
337	明治28年	夏の部	蟬なくや右は奥州左出羽	蟬	動物
338	明治28年	夏の部	野も畑もさみだれにけり牛の声	五月雨	天文
339	明治28年	夏の部	夕立やすむむら / \ と比叡の雲	夕立	天文
340	明治28年	夏の部	英雄孺子さても其後あつさかな	暑さ	時候
488	明治29年	夏の部	一山の堂塔古き若葉かな	若葉	植物
489	明治29年	夏の部	夜ほの / \ 湖の上の若葉かな	若葉	植物
490	明治29年	夏の部	さん候あれこそ田植唄にて候え	田植	人事
491	明治29年	夏の部	もの申す聞召したか子規	時鳥	動物
492	明治29年	夏の部	あな笑止山僧未だ衣を更へず	更衣	人事
493	明治29年	夏の部	衣更へて和尚来ませり此夕	更衣	人事
494	明治29年	夏の部	吾妹子が衣更へたるはづかしさ	更衣	人事
495	明治29年	夏の部	子規太郎冠者居るかやい	時鳥	動物
496	明治29年	夏の部	居は膝を容るゝに足れば青嵐	青嵐	天文
497	明治29年	夏の部	里見えて時に閑古鳥がなく	閑古鳥	動物
498	明治29年	夏の部	暁や湖上をはしる青嵐	青嵐	天文

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
499	明治29年	夏の部	一ツ / \ いちご取出す袂かな	苺	植物
500	明治29年	夏の部	口紅の痕すさまじき暑かな	暑さ	時候
502	明治29年	夏の部	そもさんと骸骨抱く涼しさよ	涼し	時候
503	明治29年	夏の部	灯ともすは妹があたりか五月闇	五月闇	天文
505	明治29年	夏の部	五月雨の合羽傘籠わらじ	五月雨	天文
506	明治29年	夏の部	城上の雲突抜かんず大幟	幟	人事
507	明治29年	夏の部	姫百合鬼百合姫百合を取る	百合	植物
508	明治29年	夏の部	引く弓の満月の如しほとゝぎす	時鳥	動物
510	明治29年	夏の部	子は瘦せぬ其子の母は此夏を	夏	時候
511	明治29年	夏の部	灯涼しや白装束の巫女ひとり	涼し	時候
512	明治29年	夏の部	涼しさや水樓下る白柏子	涼し	時候
10613	明治29年	夏の部	何とせん只天地のさみだるゝ	五月雨	天文
1091	明治30年	夏の部	更へもあへず衣典するいさゝか惜し	更衣	人事
1092	明治30年	夏の部	綿ぬいで袷と申す送られつ	袷	人事
1093	明治30年	夏の部	師翁より袷と申越されける	袷	人事
1095	明治30年	夏の部	衣更へてかたみに笑めるめをとかな	更衣	人事
1097	明治30年	夏の部	急がずば松魚に後れ申すべく	鯉	動物
1099	明治30年	夏の部	心せよ毛虫の多きところあり	毛蟲	動物
1100	明治30年	夏の部	首盗むべく獄門に忍びつ子規	時鳥	動物
1101	明治30年	夏の部	頭つけば毛虫忽ちわたかまる	毛蟲	動物
1102	明治30年	夏の部	焼跡や幟もなく日暮るゝ	幟	人事
1103	明治30年	夏の部	廬を出でず三句にして梅黄ばむ	梅の實	植物
1104	明治30年	夏の部	式部の君祭に見えず恨めしき	祭	人事
1105	明治30年	夏の部	一輪の牡丹切つたる月夜かな	牡丹	植物
1106	明治30年	夏の部	小さき家に白き牡丹ばかりなる	牡丹	植物
1107	明治30年	夏の部	唐代の衣冠正しき牡丹かな	牡丹	植物
1108	明治30年	夏の部	暁に主人牡丹を切りに出づ	牡丹	植物
1109	明治30年	夏の部	悉く牡丹を切て日暮れたり	牡丹	植物
1110	明治30年	夏の部	庵に臥して実となりし櫻眺め得つ	櫻の實	植物
1111	明治30年	夏の部	短夜の戀てふ歌をよみ侍る	短夜	時候
1112	明治30年	夏の部	短夜を傾城町のさわがしき	短夜	時候
1113	明治30年	夏の部	短夜を主上還御とひしめきぬ	短夜	時候
1114	明治30年	夏の部	短夜のともしつらなる港町	短夜	時候
1115	明治30年	夏の部	明易き沖の小嶋のかゝり舟	短夜	時候
1116	明治30年	夏の部	東向の磯家のともし明易き	短夜	時候
1117	明治30年	夏の部	隠者を訪へど逢はずして閑古鳥	閑古鳥	動物
1118	明治30年	夏の部	あはれ六朝の文物閑古鳥	閑古鳥	動物
1119	明治30年	夏の部	池潤れて杜若咲く埒もなし	杜若	植物
1120	明治30年	夏の部	鞭打つや卯の花こぼす執金吾	卯の花	植物
1121	明治30年	夏の部	船に寐て千里江陵青あらし	青嵐	天文
1122	明治30年	夏の部	二三本若楓あらぬ寺もなし	若楓	植物
1123	明治30年	夏の部	古道を枝さしかはす若葉かな	若葉	植物
1124	明治30年	夏の部	大澤の坡に仰ぐ青葉哉	青葉	植物
1125	明治30年	夏の部	遮るを臍でわけゆく若葉かな	若葉	植物
1126	明治30年	夏の部	はらり / \ 若葉の露に首をちぢめつ	若葉	植物
1127	明治30年	夏の部	枝垂れて若葉したるを踏みつ / \	若葉	植物
1128	明治30年	夏の部	千葉か三浦か若葉の中の旗印	若葉	植物
1129	明治30年	夏の部	若葉午にして敵営烟起るを見る	若葉	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1130	明治30年	夏の部	大砲の烟罩めつくす若葉かな	若葉	植物
1131	明治30年	夏の部	烟すこし若葉の中の砲の音	若葉	植物
1132	明治30年	夏の部	一彪の軍馬出でたり夏木立	夏木立	植物
1133	明治30年	夏の部	夜大雨す筍地を抜くこと三寸	筍	植物
1134	明治30年	夏の部	筍の最も大なるをほる	筍	植物
1135	明治30年	夏の部	筍の分野に魏あり呉蜀あり	筍	植物
1136	明治30年	夏の部	筍の斜につちくれをさくもあり	筍	植物
1137	明治30年	夏の部	夏の月を泳いで前岸に達しける	夏の月	天文
1138	明治30年	夏の部	二三十紅灯吊す納涼かな	納涼	人事
1140	明治30年	夏の部	清水あり馬をはせたる六十里	清水	地理
1141	明治30年	夏の部	昨日見してゝむしの行方を知らず	蝸牛	動物
1142	明治30年	夏の部	此日巳の刻てゝむし出づと記されし	蝸牛	動物
1143	明治30年	夏の部	てゝむしを秦王に献じ説きけらく	蝸牛	動物
1144	明治30年	夏の部	客と莊子とてゝむしを見てみたりける	蝸牛	動物
1145	明治30年	夏の部	てゝむしや蘇秦六国の相となる	蝸牛	動物
1146	明治30年	夏の部	傘張りの傘干せば柿の花散りぬ	柿の花	植物
1147	明治30年	夏の部	貪りてなるべく僧は帰らず椎の花	椎の花	植物
1148	明治30年	夏の部	夕日赤み雨晴れつ芥子花咲出でつ	罌粟の花	植物
1149	明治30年	夏の部	魯に大に諸侯を會す瓜茄子	雑	雑
1150	明治30年	夏の部	麦の秋蘇秦茫然として帰る	麦の秋	時候
1151	明治30年	夏の部	死なばやと翁うめきつ麦の秋	麦の秋	時候
1152	明治30年	夏の部	高時が犬をはしらす麦の秋	麦の秋	時候
1153	明治30年	夏の部	浪花なる娘下りつ麦の秋	麦の秋	時候
1154	明治30年	夏の部	よき女貧家に嫁して粽結ふ	粽	人事
1155	明治30年	夏の部	女の童の巧みに粽ゆふがあり	粽	人事
1156	明治30年	夏の部	恨むらくは妹が粽のちいさくて	粽	人事
1157	明治30年	夏の部	落人にひそかに粽まゐらせぬ	粽	人事
1158	明治30年	夏の部	妻鮓を韓非説難を作りける	鮓	人事
1159	明治30年	夏の部	すしを得つ詩人一堂に會したる	鮓	人事
1160	明治30年	夏の部	探題して公すしてふを得給ひし	鮓	人事
1161	明治30年	夏の部	七八人城中の鮓に義を結ぶ	鮓	人事
1162	明治30年	夏の部	二三子が頻りに鮓を望みける	鮓	人事
1163	明治30年	夏の部	ひとり住ですしを壓す賢なればなり	鮓	人事
1164	明治30年	夏の部	村熟にすしを壓す因て詩を講ず	鮓	人事
1165	明治30年	夏の部	此鮓を娘孕みたる恨かな	鮓	人事
1166	明治30年	夏の部	此鮓をすしとなすべき由申せ	鮓	人事
1167	明治30年	夏の部	鮓空しく壓したる石の横はる	鮓	人事
1168	明治30年	夏の部	鮎の石重きに過ぎたらんを妹恐る	鮎	動物
1169	明治30年	夏の部	すしを壓す石を得つべく出行きぬ	鮓	人事
1170	明治30年	夏の部	思ひきやかばかり鮓のなれんとは	鮓	人事
1171	明治30年	夏の部	すし桶となすべきを得つさげ帰る	鮓	人事
1172	明治30年	夏の部	鮓を壓す石徒らに重きかな	鮓	人事
1173	明治30年	夏の部	妹瘦せて鮓石重き恨かな	鮓	人事
1174	明治30年	夏の部	すしはあらず何やら欲しう思ひける	鮓	人事
1175	明治30年	夏の部	忠義堂に鮓桶運び終りたる	鮓	人事
1176	明治30年	夏の部	鮓すこし残れるを夜さがし得つ	鮓	人事
1177	明治30年	夏の部	すしを得べく妻を厨下にはしらせつ	鮓	人事
1179	明治30年	夏の部	晋あけ易く兎四五疋楚に奔る	短夜	時候

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1180	明治30年	夏の部	単穴に詩を題し五月雨を眠る	五月雨	天文
1181	明治30年	夏の部	尽く小き蚤を逸したる	蚤	動物
1182	明治30年	夏の部	暁に関を出でたる蚤を追ふ	蚤	動物
1183	明治30年	夏の部	周易に蠅糞をしつ溺をしつ	蠅	動物
1184	明治30年	夏の部	取敢へず硯に呑まんとすなる蠅	蠅	動物
1185	明治30年	夏の部	愚なる蚊の何を以て唾壺に出没す	蚊	動物
1186	明治30年	夏の部	西をさして暁の蚊の飛去りぬ	蚊	動物
1187	明治30年	夏の部	屋根の上の蝙蝠を射落さんず	蝙蝠	動物
1188	明治30年	夏の部	蝙蝠に弦を鳴らす徒爾なりき	蝙蝠	動物
1189	明治30年	夏の部	蝙蝠の忽然として見えずなり	蝙蝠	動物
1190	明治30年	夏の部	蝙蝠の今宵東隣より出でぬ	蝙蝠	動物
1191	明治30年	夏の部	疊三ひら敷ける廬を青あらし	青嵐	天文
1192	明治30年	夏の部	草長く水浅きところ螢多かり	螢	動物
1193	明治30年	夏の部	大なる螢たま / \ 西よりす	螢	動物
1194	明治30年	夏の部	行けど / \ 清水ありとしも見えず	清水	地理
1195	明治30年	夏の部	敗軍の清水かきにごし / \	清水	地理
1196	明治30年	夏の部	五月雨の村を犬吠え鶏鳴きぬ	五月雨	天文
1197	明治30年	夏の部	雨五月道蜀に入ること遠し	五月雨	天文
1198	明治30年	夏の部	行くが中に牛は最もさみだるゝ	五月雨	天文
1199	明治30年	夏の部	田舎路の茶屋さみだれて人もなし	五月雨	天文
1200	明治30年	夏の部	箋を展れば夕立の風吹いて来る	夕立	天文
1201	明治30年	夏の部	涼しさの枕水樓と申すあり	涼し	時候
1202	明治30年	夏の部	夕立を危樓と号すべき聳ちぬ	夕立	天文
1203	明治30年	夏の部	夕立や毫を揮へば墨淋漓	夕立	天文
1204	明治30年	夏の部	甚だ可なり試みに昼寐せん	晝寝	人事
1205	明治30年	夏の部	瓜を切れば種が三ツ四ツこぼれける	瓜	植物
1206	明治30年	夏の部	一漢の蚊に苦める古廟かな	蚊	動物
1207	明治30年	夏の部	我を蹴て足長き蚊の飛でゆく	蚊	動物
1208	明治30年	夏の部	薄暗く晝の蚊多し閻魔堂	蚊	動物
1209	明治30年	夏の部	蚊帳の中の蚊を打果す夜明かな	蚊	動物
1210	明治30年	夏の部	撃たんとして撃ち得ざりける蚊を憎む	蚊	動物
1211	明治30年	夏の部	海門や孤帆見る / \ 雲の峯	雲の峰	天文
1212	明治30年	夏の部	北の方に真黒な雲の峯起る	雲の峰	天文
1213	明治30年	夏の部	銅標や鞅鞅の国の雲の峯	雲の峰	天文
1214	明治30年	夏の部	夏の月をさぶ / \ と水渉り来る	夏の月	天文
1215	明治30年	夏の部	魚店と八百屋の間を夏の月	夏の月	天文
1216	明治30年	夏の部	廣き家に大きな蚊帳のほしきかな	蚊帳	人事
1217	明治30年	夏の部	山寺や蚊帳を釣らざる夜をひとり	蚊帳	人事
1218	明治30年	夏の部	明らさまに蚊帳釣てある磯家かな	蚊帳	人事
1219	明治30年	夏の部	ひとり住んで蚊帳の破れをつくろひつ	蚊帳	人事
1220	明治30年	夏の部	岳陽樓に夕立すべきけしきかな	夕立	天文
1221	明治30年	夏の部	雲の峯総の野を壓し崩れんとす	雲の峰	天文
1222	明治30年	夏の部	扇裂いて悟了と叫ぶ男かな	扇	人事
1223	明治30年	夏の部	大女郎に凶扇を渡す小女郎哉	扇	人事
1224	明治30年	夏の部	赤裸々と炎天の小屋を出でゝゆく	炎天	天文
1225	明治30年	夏の部	扇の句一字を脱したる恨み	扇	人事
1226	明治30年	夏の部	團扇もちてからの女の歩み来る	扇	人事
1228	明治30年	夏の部	滝壺に膏薬洗ふ夏の旅	夏	時候

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1229	明治30年	夏の部	女滝男滝四十八滝五月雨	五月雨	天文
1230	明治30年	夏の部	滝のそばに大きなひさごかけてあり	滝	地理
1231	明治30年	夏の部	犠牲や滝どう / \と夕立す	滝	地理
1232	明治30年	夏の部	滝をうしろ文覚出たり夏木立	夏木立	植物
1233	明治30年	夏の部	夏山の道窮まって滝あらはれぬ	夏山	地理
1234	明治30年	夏の部	庭前に滝をつくりいで一家すゞむ	納涼	人事
1235	明治30年	夏の部	閑古鳥をきくべくとして滝の後ろに出づ	閑古鳥	動物
1236	明治30年	夏の部	滝の上に入定したり苔の花	苔の花	植物
1237	明治30年	夏の部	木下閣滝あれば則ち祠あり	木下閣	植物
1239	明治30年	夏の部	若楓小さき橋の朱欄干	若楓	植物
1241	明治30年	夏の部	喬松林を出です昼寐をしたるべく	晝寝	人事
1243	明治30年	夏の部	萩若く庭さゝやかに雨細く	萩若葉	植物
1245	明治30年	夏の部	日は斜つゝじが逕幾曲り	躑躅	植物
1247	明治30年	夏の部	岩清水の止まって潭となり午の月	清水	地理
1249	明治30年	夏の部	籬を排し薫風南山より来る	薫風	天文
1251	明治30年	夏の部	對座して中夜に杜鵑をきかまくす	時鳥	動物
1252	明治30年	夏の部	家を移し葵の多き庭を得つ	葵	植物
1253	明治30年	夏の部	人俗にして帷子を着たる行く	帷子	人事
1254	明治30年	夏の部	旅に病むで癒えたればつゆ正に晴る	梅雨	天文
1256	明治30年	夏の部	通辯をして心太を命じ異人かな	心太	人事
1257	明治30年	夏の部	左遷の道黄州を経て心太	心太	人事
1258	明治30年	夏の部	心太の必ず冷かなるを望む	心太	人事
1259	明治30年	夏の部	取敢へず心太を命じたる主従かな	心太	人事
1260	明治30年	夏の部	野に飢えて偶々心太をさがし得つ	心太	人事
1261	明治30年	夏の部	客僧の東より來つ心太	心太	人事
1262	明治30年	夏の部	浮屠の道たとへば心太の如し	心太	人事
1263	明治30年	夏の部	小盗人の心太を喰ふてみたりける	心太	人事
1264	明治30年	夏の部	野社に心太賣る古き女	心太	人事
1265	明治30年	夏の部	心太一荷の價幾何ぞ	心太	人事
1266	明治30年	夏の部	只心太の冷かなるがあり	心太	人事
1267	明治30年	夏の部	卓上に心太の盤大なり	心太	人事
1268	明治30年	夏の部	中に心太を厭ふひとりあり	心太	人事
1269	明治30年	夏の部	招牌や水滸の店の心太	心太	人事
1270	明治30年	夏の部	真中に心太の盤を据えてあり	心太	人事
1271	明治30年	夏の部	心太に胃の腑損ひし恨かな	心太	人事
1272	明治30年	夏の部	家のうしろ灘声急にして明易き	短夜	時候
1273	明治30年	夏の部	短夜を灘上に泊す水の声	短夜	時候
1274	明治30年	夏の部	短夜や後宮の美女装ひを凝す	短夜	時候
1276	明治30年	夏の部	大早に雲霓を望む海の上	早	天文
1277	明治30年	夏の部	路傍の撫子折りつ / \行く	撫子	植物
1278	明治30年	夏の部	下閣を甲冑鮮かなる出でつ	木下閣	植物
1279	明治30年	夏の部	行者ひとり富士を下るに行逢ひつ	富士詣	人事
1280	明治30年	夏の部	はねる虫いさゝか蚤に似て非なり	蚤	動物
1282	明治30年	夏の部	夏瘦の汝を憐む人もなし	夏瘦	人事
1283	明治30年	夏の部	夏の月音楽起る鴻臚館	夏の月	天文
1284	明治30年	夏の部	水打て静かに對す木魚かな	打水	人事
1285	明治30年	夏の部	暑き日を同行凡そ四五十人	暑さ	時候
1286	明治30年	夏の部	道蠻に入り雨の日多き土用かな	土用	時候

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1287	明治30年	夏の部	海の上を夕立の雲飛揚せり	夕立	天文
1289	明治30年	夏の部	夜道ゆけば山蛭落るあまたゝび	蛭	動物
1290	明治30年	夏の部	覇氣高く蛭が小島に夕立す	蛭	動物
1291	明治30年	夏の部	すさまじく山蛭の屍横はる	蛭	動物
1292	明治30年	夏の部	雲蒸すや泥中の蛭化けぬべく	蛭	動物
1293	明治30年	夏の部	踏迷ひ山蛭多き山に入る	蛭	動物
1294	明治30年	夏の部	瑞艸の根を湧き出づる清水かな	清水	地理
1295	明治30年	夏の部	悟了すらく鳴焼はこれ既成佛	鳴	動物
1296	明治30年	夏の部	土用干して一物を看破了	蟲干	人事
1297	明治30年	夏の部	蝸や食堂に下る法師原	蝸	動物
1298	明治30年	夏の部	癖奇なり一ツ葉の鉢并べたる	一ツ葉	植物
1299	明治30年	夏の部	坐に入て漫に汗拭を求めたり	汗拭	人事
1301	明治30年	夏の部	打磐やむで曉に蓮の白き咲く	蓮	植物
1302	明治30年	夏の部	僧房や蓮に飯喰ふ五六人	蓮	植物
1303	明治30年	夏の部	夜僧房に宿して曉に蓮を見る	蓮	植物
1304	明治30年	夏の部	繽紛と蓮花赫奕と菩薩夢	蓮	植物
1305	明治30年	夏の部	池に臨んで白蓮房と額したり	蓮	植物
1306	明治30年	夏の部	涼しさは漁戸断續のともしかな	涼し	時候
1308	明治30年	夏の部	納涼台に詩をつくるべく君帰る	納涼	人事
1310	明治30年	夏の部	大いなる芭蕉のかげに涼むべし	涼し	時候
1312	明治30年	夏の部	仰向くや昼寝の胸毛風が吹く	晝寝	人事
1314	明治30年	夏の部	納涼台を撤し恰も好きを見る	納涼	人事
1316	明治30年	夏の部	すこし飛べる蝉唾にして見えずなり	蝉	動物
1318	明治30年	夏の部	ところ／＼蚊にさゝれたるが腫れ痛む	蚊	動物
1320	明治30年	夏の部	夙に起きて若葉に對す頭痛かな	若葉	植物
1321	明治30年	夏の部	下闇に嘯いて行く我に病あり	木下闇	植物
1322	明治30年	夏の部	眼を病むであやめの汀に下り立ちぬ	あやめ	植物
1323	明治30年	夏の部	夏の雲赤黒くして人瘡を病む	夏の雲	天文
1324	明治30年	夏の部	夏瘦を君にはをかしがらせ給ふ	夏瘦	人事
1325	明治30年	夏の部	此夏を一の君いたう瘦せ給ふ	夏瘦	人事
1326	明治30年	夏の部	蚊帳のそとのくすしとおん物語かな	蚊帳	人事
1327	明治30年	夏の部	夏瘦や君をまほに得も見給はず	夏瘦	人事
1328	明治30年	夏の部	夏瘦せて十二宮樓の人恨む	夏瘦	人事
1329	明治30年	夏の部	後宮や人夏瘦せて君王を望む	夏瘦	人事
1330	明治30年	夏の部	曉装や人夏瘦もし給はず	夏瘦	人事
1331	明治30年	夏の部	夏瘦を貧にして機による物うしや	夏瘦	人事
1332	明治30年	夏の部	病みてあれば蚊遣火焚かんよしもなし	蚊遣	人事
1333	明治30年	夏の部	病みてより長へに捲かず青簾	青簾	人事
1334	明治30年	夏の部	病床や夢に妹がりに涼みける	納涼	人事
1335	明治30年	夏の部	癪を切て少し涼しき夕かな	涼し	時候
1336	明治30年	夏の部	縁に出でゝ癪をきれば大に夕立す	夕立	天文
1337	明治30年	夏の部	主蚊遣す従者薬を得て帰る	蚊遣	人事
1338	明治30年	夏の部	足の甲の膏薬剥がす清水かな	清水	地理
1339	明治30年	夏の部	虫干や隅に堆き傷寒論	蟲干	人事
1340	明治30年	夏の部	施薬院の門に昼寐の男かな	晝寝	人事
1341	明治30年	夏の部	少し病みて顔白き彌宜の御祓哉	御祓	人事
1342	明治30年	夏の部	蚊にも堪へず薬を蚊帳の中に煮る	蚊	動物
1343	明治30年	夏の部	夕立や雷落ちてより頭痛やむ	夕立	天文

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1344	明治30年	夏の部	清水汲んで主の創口を洗ひける	清水	地理
1345	明治30年	夏の部	夏六月南方瘴癘の地に陣す	六月	時候
1346	明治30年	夏の部	扁鵲が君に葛水を奉る	葛水	人事
1347	明治30年	夏の部	川狩に何ぞ疝氣を恐れんや	川狩	人事
1348	明治30年	夏の部	病僧の蓮の汀を徘徊す	蓮	植物
1349	明治30年	夏の部	赤き幣と鮓供へたり痘の神	鮓	人事
1350	明治30年	夏の部	道連の漢薬を説く夏野かな	夏野	地理
1351	明治30年	夏の部	妻もなき夏書の男病みほうけ	夏書	人事
1352	明治30年	夏の部	用ゐられず帰て病みつ麦の秋	麦の秋	時候
1353	明治30年	夏の部	背に疝を発して憤る蚊帳の中	蚊帳	人事
1354	明治30年	夏の部	病める人の早瓜ほしとぞ申越す	瓜	植物
1355	明治30年	夏の部	枕元の薬瓶に蠅たかりたる	蠅	動物
1356	明治30年	夏の部	路にして暑さに病むと郵便す	暑さ	時候
1357	明治30年	夏の部	病院の門に集へる日傘かな	日傘	人事
1358	明治30年	夏の部	病院の窓あけて見る若葉かな	若葉	植物
1359	明治30年	夏の部	臨月に衣更へたる女かな	更衣	人事
1360	明治30年	夏の部	夏痩せて異人の妻の医師を訪ふ	夏痩	人事
1361	明治30年	夏の部	看護婦の白き衣や夏衣	夏衣	人事
1362	明治30年	夏の部	此夏を諸国大いに疫をやむ	夏	時候
1363	明治30年	夏の部	病臥して夢あしき夜半を子規	時鳥	動物
1364	明治30年	夏の部	蚊帳を出でつ国歩艱難にして吾病めり	蚊帳	人事
1365	明治30年	夏の部	あるじ病みて卯の花垣根しどろなり	卯の花	植物
1366	明治30年	夏の部	明けやすき夜を苦しげに咳嗽す	短夜	時候
1367	明治30年	夏の部	戀に病みて音をのみぞ泣く祭かな	祭	人事
1368	明治30年	夏の部	短夜を心中ありと呼はりぬ	短夜	時候
1369	明治30年	夏の部	後宮の人夏痩せて曉装す	夏痩	人事
1370	明治30年	夏の部	四十雀の五十雀と呼ばるゝ恨かな	雑	雑
1371	明治30年	夏の部	目白去って頬赤来る日向かな	雑	雑
2262	明治31年	夏の部	藤の葉の窓にかぶさり夏に入る	夏	時候
2264	明治31年	夏の部	だぶ / \ と浴せかけた甘茶かな	甘茶	人事
2265	明治31年	夏の部	佛さまの産湯貰ひに参らうぞ	仏生会	人事
2266	明治31年	夏の部	子規夜船に上る蜀の客	時鳥	動物
2268	明治31年	夏の部	水打て松籟起る四睡の囃	打水	人事
2269	明治31年	夏の部	妹がりを卯の花くだしたそがるゝ	卯の花腐し	天文
2270	明治31年	夏の部	水打てば泥亀の首ちぢめたる	打水	人事
2271	明治31年	夏の部	碁に倦むで餘花にあけたる小窓哉	餘花	植物
2273	明治31年	夏の部	老いし妓の衣更へたり単色	更衣	人事
2275	明治31年	夏の部	町中に地車を押す暑さか那	暑さ	時候
2276	明治31年	夏の部	薔薇園のせうび買ひたる異人哉	薔薇	植物
2278	明治31年	夏の部	百姓の筍を送る家例か那	筍	植物
2279	明治31年	夏の部	筍の分野争ふきほひか那	筍	植物
2280	明治31年	夏の部	藪小さく筍痩せて伸びてけり	筍	植物
2281	明治31年	夏の部	筍の杉の木の間伸びてけり	筍	植物
2282	明治31年	夏の部	筍の皮棄てに出づ小川か那	筍	植物
2283	明治31年	夏の部	縁先に筍の土こぼれけり	筍	植物
2284	明治31年	夏の部	筍を掘りをれば竹の雫か那	筍	植物
2285	明治31年	夏の部	竹藪に筍盗む男か那	筍	植物
2286	明治31年	夏の部	七賢の筍飯に會したる	筍	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2287	明治31年	夏の部	筍を盗む竹原月夜か那	筍	植物
2288	明治31年	夏の部	筍に妙なる僧や一ト筆画	筍	植物
2289	明治31年	夏の部	去年買ひし筍賣の来りけり	筍	植物
2290	明治31年	夏の部	筍の伸びたきまゝに伸びにけり	筍	植物
2292	明治31年	夏の部	尼寺に少しばかり咲く紅の花	紅花	植物
2293	明治31年	夏の部	雨蛙宮の森より暮れかゝる	雨蛙	動物
2294	明治31年	夏の部	垣越に水打つ女ちよと見えし	打水	人事
2295	明治31年	夏の部	美少年の名ありかすりの單物	単衣	人事
2296	明治31年	夏の部	さしみ皿にいさゝかの蓼緑なり	蓼	植物
2297	明治31年	夏の部	けふの日の午の刻よりつりかな	梅雨	天文
2299	明治31年	夏の部	狼狽の子子沈むをかしけり	子子	動物
2300	明治31年	夏の部	目すゞしく眉秀でたるが夏書か那	夏書	人事
2301	明治31年	夏の部	道場の昼鎖したるあふちか那	棟の花	植物
2302	明治31年	夏の部	馬を下りて床几涼しさを磯馴松	涼し	時候
2303	明治31年	夏の部	涼風に画箋展べたる二階か那	涼風	天文
2304	明治31年	夏の部	短夜の雨戸あけたる二階か那	短夜	時候
2305	明治31年	夏の部	二階かりて画師がこもりぬ五月雨	五月雨	天文
2307	明治31年	夏の部	鱗形の雲うらゝかや湖の上	麗	時候
2308	明治31年	夏の部	日蝕の雲黄色なり秋の水	秋の水	地理
2309	明治31年	夏の部	油繪や秋日田家雲の色	秋の日	天文
2310	明治31年	夏の部	雨雲の蔽ひかさなる若葉哉	若葉	植物
2311	明治31年	夏の部	浴みして衣かへて山の雲を見る	更衣	人事
2312	明治31年	夏の部	太陽の雲割て出るあつさ哉	暑さ	時候
2313	明治31年	夏の部	巖上の雲の影落つ清水哉	清水	地理
2314	明治31年	夏の部	秋立つや峠の茶屋のあけの雲	立秋	時候
2315	明治31年	夏の部	師が活けし裁縫室のあやめ哉	あやめ	植物
2316	明治31年	夏の部	當直に女生徒あやめ持ち来る	あやめ	植物
2317	明治31年	夏の部	清水酌みに松脂臭き翁哉	清水	地理
2318	明治31年	夏の部	飯喰ふて納涼に出たる旅籠か那	納涼	人事
2319	明治31年	夏の部	炎天の砂利道きしる車か那	炎天	天文
2320	明治31年	夏の部	日盛の天井低き二階か那	日盛	天文
2321	明治31年	夏の部	嵩高にぼろ負ふてゆく暑か那	暑さ	時候
2322	明治31年	夏の部	麦酒盆に麦酒水菓子納涼台	雑	雑
2323	明治31年	夏の部	葉柳の窓打拂ふ雫かな	夏柳	植物
2324	明治31年	夏の部	涼風や紗の窓掛を吹きまくり	涼風	天文
2325	明治31年	夏の部	短夜を語明かしてしまひけり	短夜	時候
2326	明治31年	夏の部	涼しさの尺八吹いて橋を行く	涼し	時候
2327	明治31年	夏の部	川風の蛍吹き入る裏二階	螢	動物
2328	明治31年	夏の部	葉柳に蛍の籠を吊しけり	雑	雑
2329	明治31年	夏の部	鉦太鼓野に見世物の小屋あつし	暑さ	時候
2330	明治31年	夏の部	樂隊の森を出て来る夕涼し	涼し	時候
2331	明治31年	夏の部	川風の蠟燭を吹く涼しかり	涼し	時候
2332	明治31年	夏の部	壇上に蚊も寄りつかぬ咒文か那	蚊	動物
2333	明治31年	夏の部	虫干の古繪に夕日壇の浦	蟲干	人事
2334	明治31年	夏の部	短夜の陸地見えたる船路哉	短夜	時候
2335	明治31年	夏の部	葉柳の月に稽古やくさり鎌	夏柳	植物
2961	明治32年	夏の部	羽あり飛ぶ堂のうしろや日の落つる	羽蟻	動物
2962	明治32年	夏の部	水の上に羽蟻飛行く夜明かな	羽蟻	動物

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2963	明治32年	夏の部	羽蟻とぶ葎の簾や縄朽ちし	羽蟻	動物
2964	明治32年	夏の部	松風に羽蟻吹かるゝ茶店かな	羽蟻	動物
2965	明治32年	夏の部	夥しき羽ありの庭や雨上り	羽蟻	動物
2966	明治32年	夏の部	樟の根に神ともならで羽蟻哉	羽蟻	動物
2967	明治32年	夏の部	日は赫と羽あり画棟に飛上る	羽蟻	動物
2968	明治32年	夏の部	竹縁に飛ばぬ羽蟻や經机	羽蟻	動物
2969	明治32年	夏の部	羽ありとんで紫の花にとまりけり	羽蟻	動物
2970	明治32年	夏の部	羽生へて飛出すありの思ひかな	羽蟻	動物
2971	明治32年	夏の部	羽ありとぶ檣の上や日の光り	羽蟻	動物
2972	明治32年	夏の部	水打てば羽蟻飛つく草の上	羽蟻	動物
2974	明治32年	夏の部	五畝の畑に藍も植ゑけり雨多き	藍蒔く	人事
2975	明治32年	夏の部	草取るや藍に撫子のこぼれ咲き	雑	雑
2976	明治32年	夏の部	藍瘦せて蓼丈高き畑かな	蓼	植物
2977	明治32年	夏の部	草の中に藍もまじりて草の中	藍	植物
2978	明治32年	夏の部	藍苗の畑まで鶏の遊びけり	藍蒔く	人事
2979	明治32年	夏の部	藍うゑて古きかめなど畑の隅	藍蒔く	人事
2980	明治32年	夏の部	山中や悉く藍をうゑし畑	藍蒔く	人事
2981	明治32年	夏の部	商人を泊めたる宿や藍畑	藍	植物
2982	明治32年	夏の部	照りつゞく藍の畑のほこりかな	藍	植物
2983	明治32年	夏の部	出水の藍の畑をひたしけり	藍	植物
2984	明治32年	夏の部	藍多く山路曇りし他國かな	藍	植物
2986	明治32年	夏の部	大木のしだれ櫻や実の多き	櫻の實	植物
2987	明治32年	夏の部	夢に見し実櫻となる故郷かな	櫻の實	植物
2988	明治32年	夏の部	試みにさくらの実かむちよと渋き	櫻の實	植物
2989	明治32年	夏の部	実ざくらを見上る庭や知らぬ鳥	櫻の實	植物
2990	明治32年	夏の部	庭のさくらに鳥の女夫や実をこぼす	櫻の實	植物
2991	明治32年	夏の部	中庭や池にさくらの実が熟す	櫻の實	植物
2992	明治32年	夏の部	柵結ひて実も結ばざる桜かな	櫻の實	植物
2993	明治32年	夏の部	実取る子のさくらに上る岐れ枝	櫻の實	植物
2994	明治32年	夏の部	桜子や鳥飛起つ宮まうで	櫻の實	植物
2995	明治32年	夏の部	桜の実自から落つる山路かな	櫻の實	植物
2997	明治32年	夏の部	兒吹くや若葉の山に人上る	若葉	植物
2998	明治32年	夏の部	山の井に若葉かぶさり祠かな	若葉	植物
2999	明治32年	夏の部	堂荒て鐘にさし出し若葉哉	若葉	植物
3000	明治32年	夏の部	舞殿や若葉の雫吹きつくる	若葉	植物
3001	明治32年	夏の部	石逕の故郷に近き若葉哉	若葉	植物
3002	明治32年	夏の部	学室の若葉月夜や若法師	若葉	植物
3003	明治32年	夏の部	若葉して間に人住む庵かな	若葉	植物
3004	明治32年	夏の部	若葉を出で岩鼻に立つ微風哉	若葉	植物
3005	明治32年	夏の部	知らぬ木や若葉の中に白き花	若葉	植物
3006	明治32年	夏の部	石逕を蛇の横ぎる若葉かな	若葉	植物
3008	明治32年	夏の部	かはせみの嘴をのがれし小魚かな	翡翠	動物
3009	明治32年	夏の部	かはせみの小魚落しぬ藤の棚	翡翠	動物
3010	明治32年	夏の部	かはせみや水緑なる朝月夜	翡翠	動物
3011	明治32年	夏の部	かはせみや汀飛び起つ草のゆれ	翡翠	動物
3012	明治32年	夏の部	翡翠や芦四五本に夜明けたる	翡翠	動物
3013	明治32年	夏の部	たま / \ や翡翠飛去る浅き水	翡翠	動物
3014	明治32年	夏の部	かはせみのとまる一本柳かな	翡翠	動物

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3015	明治32年	夏の部	山陰やかはせみ去て暮るゝ池	翡翠	動物
3016	明治32年	夏の部	かはせみや魚ひそみたる柳の根	翡翠	動物
3017	明治32年	夏の部	小さき洲にかはせみ止り朝の雨	翡翠	動物
3018	明治32年	夏の部	かはせみのとまる巖や草すこし	翡翠	動物
3019	明治32年	夏の部	かはせみや水紋をなす淵の色	翡翠	動物
3020	明治32年	夏の部	かはせみの羽より雫したゝりし	翡翠	動物
3021	明治32年	夏の部	板塀や芭蕉玉巻く比叡の雲	芭蕉玉巻	植物
3022	明治32年	夏の部	門口や柿の花ちる油うり	柿の花	植物
3023	明治32年	夏の部	漣や岩を離れぬ羽ぬけ鴨	羽抜鳥	動物
3024	明治32年	夏の部	大比叡の雲に芭蕉の巻葉哉	芭蕉玉巻	植物
3025	明治32年	夏の部	一八の屋根に鶯舞ふ日和哉	一八	植物
3026	明治32年	夏の部	神前や蓮の浮葉に灯のうつる	蓮の浮葉	植物
3027	明治32年	夏の部	戸明るるや蚊がとんで行く明の星	蚊	動物
3028	明治32年	夏の部	取出す袷わびしや酒の痕	袷	人事
3029	明治32年	夏の部	祭すぎて葵をはさむ歌集かな	葵	植物
3030	明治32年	夏の部	盤石や雫したゝる桐の花	桐の花	植物
3031	明治32年	夏の部	一門の神草かざす祭かな	祭	人事
3032	明治32年	夏の部	親よ子よ瓜や茄子の花盛り	雑	雑
3033	明治32年	夏の部	繪日今の京には清き流あり	日傘	人事
3035	明治32年	夏の部	穂麦わけて舞子の濱に出でしかな	麥	植物
3036	明治32年	夏の部	弟子僧のしばし交りぬ印地打	印地打	人事
3037	明治32年	夏の部	初なりの胡瓜うれしや朝の雨	瓜	植物
3038	明治32年	夏の部	枝蛙苔に落ちけり古き石	雨蛙	動物
3039	明治32年	夏の部	乗合や人の戀きく虎が雨	虎が雨	天文
3040	明治32年	夏の部	破産して穂麦の國を出づるかな	麥	植物
3041	明治32年	夏の部	牡丹亭に画箋を展べし唐子かな	牡丹	植物
3042	明治32年	夏の部	衣更へて舟に上りぬ暁の風	更衣	人事
3043	明治32年	夏の部	灌佛の甘茶冷めたし暮の雲	仏生会	人事
3044	明治32年	夏の部	石竹の露こぼれけり白き砂	石竹	植物
3045	明治32年	夏の部	摘み残す茶の木の雨や夏に入る	夏	時候
3047	明治32年	夏の部	鶯の虎溪に老いし別かな	鶯	動物
3048	明治32年	夏の部	大矢数馬乗りすてし小殿原	矢數	人事
3049	明治32年	夏の部	火串消えて草吹く風や暁近し	照射	人事
3050	明治32年	夏の部	拔出でゝ河骨咲くや金氣水	河骨	植物
3051	明治32年	夏の部	青梅や草の中なる古き幹	梅の實	植物
3052	明治32年	夏の部	鶉遣ひの物も云はざる愚かな	鶉飼	人事
3053	明治32年	夏の部	漣や松葉散落つ水の上	松落葉	植物
3054	明治32年	夏の部	葉柳や水ひた / \ と出町橋	夏柳	植物
3055	明治32年	夏の部	日のもるゝ松の落葉や南禅寺	松落葉	植物
3056	明治32年	夏の部	紫や水に雨ふる杜若	杜若	植物
3057	明治32年	夏の部	麦の穂や逢坂山に閑もなし	麥	植物
3058	明治32年	夏の部	鶯の老いしも知らず泣音かな	老鶯	動物
3059	明治32年	夏の部	草臥れし穂麦の路や寺に入る	麥	植物
3060	明治32年	夏の部	湖も見えて玉巻く芭蕉緑なり	芭蕉玉巻	植物
3061	明治32年	夏の部	てふ / \ の松をはなれて浜辺かな	蝶	動物
3062	明治32年	夏の部	須磨の家の背戸は名所や麦の風	麥	植物
3063	明治32年	夏の部	青嵐須磨をはなるゝ船屋形	青嵐	天文
3065	明治32年	夏の部	耕すやげんげ色濃き水たまり	げんげ	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3066	明治32年	夏の部	嵯峨村に旧蹟多し竹の秋	竹の秋	植物
3068	明治32年	夏の部	したゝりや雲の音きく石の上	滴り	地理
3070	明治32年	夏の部	したゝりの筏下るや大堰川	滴り	地理
3071	明治32年	夏の部	年々を鮎の子上る行方哉	鮎	動物
3072	明治32年	夏の部	蕩漾の若葉の上や鮎のぼる	雑	雑
3074	明治32年	夏の部	野々宮は竹落葉するばかりなり	竹落葉	植物
3076	明治32年	夏の部	さら / \ と屋根はしる竹の落葉かな	竹落葉	植物
3077	明治32年	夏の部	雪隠や昔の窓の柿若葉	柿若葉	植物
3079	明治32年	夏の部	草の中に墓さがし得つ羽蟻とぶ	羽蟻	動物
3081	明治32年	夏の部	撞鐘のほとりに松の落葉かな	松落葉	植物
3083	明治32年	夏の部	嵯峨の山に鐘聞えけり松葉散る	松落葉	植物
3085	明治32年	夏の部	かくや / \ 神輿かきゆく若葉かな	若葉	植物
3087	明治32年	夏の部	閑伽酌むで若葉見上る目はすずし	若葉	植物
3089	明治32年	夏の部	踏分くる野ばらの花や脛痒し	薔薇	植物
3091	明治32年	夏の部	古井に枝蛙落つ洒ぎかな	雨蛙	動物
3093	明治32年	夏の部	日にやけし馬士もまじるや御身拭	日焼	人事
3095	明治32年	夏の部	廣澤や真菰の上の昼の月	真菰	植物
3096	明治32年	夏の部	水湧くや物なつかしき苔の花	苔の花	植物
3097	明治32年	夏の部	蕁菜の花咲く池となりにけり	蕁菜	植物
3098	明治32年	夏の部	蕁とる舟の小唄や宵月夜	蕁菜	植物
3099	明治32年	夏の部	病葉の下にあやしき祠かな	病葉	植物
3100	明治32年	夏の部	椎咲くや油に黒む石灯籠	椎の花	植物
3101	明治32年	夏の部	谷川や石に魚見る百合の花	百合	植物
3102	明治32年	夏の部	宿おりの女訪ひよる粽かな	粽	人事
3103	明治32年	夏の部	宿下りの粽結ひけり五年ぶり	粽	人事
3104	明治32年	夏の部	さらし場に花咲く草の雫かな	晒布	人事
3105	明治32年	夏の部	日蝕の人群るゝなり麦の秋	麦の秋	時候
3106	明治32年	夏の部	生節に木葉かけたり舟がつく	生節	人事
3107	明治32年	夏の部	露切って旦の汁に投げけり	露	植物
3108	明治32年	夏の部	水のんで露の葉すつる山路哉	露	植物
3109	明治32年	夏の部	金銀の氣を吹く山の清水哉	清水	地理
3110	明治32年	夏の部	湖も見えて寺に玉巻く芭蕉哉	芭蕉玉巻	植物
3111	明治32年	夏の部	常盤木や落葉吹散る力餅	常盤木落葉	植物
3112	明治32年	夏の部	境内や銀杏若葉す神の水	若葉	植物
3113	明治32年	夏の部	御祭の鬢髪白き葵かな	葵	植物
3114	明治32年	夏の部	木の間より引き出でにけり競馬	競馬	人事
3115	明治32年	夏の部	葉柳の橋にせまりし神輿かな	夏柳	植物
3116	明治32年	夏の部	観音や若楓透く日の光り	若楓	植物
3117	明治32年	夏の部	尼が愛す萩の若葉や清閑寺	萩若葉	植物
3119	明治32年	夏の部	官人のよき帷子や椰子の下	帷子	人事
3120	明治32年	夏の部	帷子を浣ふあしたの流か那	帷子	人事
3121	明治32年	夏の部	帷子に草の香のぼる故郷か那	帷子	人事
3122	明治32年	夏の部	人の娘帷子を着て宿下り	帷子	人事
3124	明治32年	夏の部	草の上にはら / \ 雨や百合の花	百合	植物
3125	明治32年	夏の部	水湧くや草の葉末の雲の峯	雲の峰	天文
3126	明治32年	夏の部	麦藁の帽吹かれけり水の上	夏帽子	人事
3127	明治32年	夏の部	雲濕ふ保津の川瀬や夏木立	夏木立	植物
3128	明治32年	夏の部	打水にぬれし茶店の柱かな	打水	人事

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3130	明治32年	夏の部	うゑまぜや紫陽花も咲く異種	紫陽花	植物
3131	明治32年	夏の部	山科の田植さびしや竹の風	田植	人事
3132	明治32年	夏の部	草衣を井木にかけし裸かな	裸	人事
3133	明治32年	夏の部	闇涼し草の根をゆく水の音	涼し	時候
3135	明治32年	夏の部	暁の杉に星見る蚊帳の中	蚊帳	人事
3137	明治32年	夏の部	藍うゑし畑に水引く微風かな	藍蒔く	人事
3139	明治32年	夏の部	麦刈て近江の湖の碧きかな	麦刈	人事
3141	明治32年	夏の部	木の間より湖の風吹く田植哉	田植	人事
3143	明治32年	夏の部	涼風の投網の水にぬれしかな	雑	雑
3145	明治32年	夏の部	太閤の千疊敷や茶摘歌	茶摘	人事
3147	明治32年	夏の部	山門や椎の花散る黄檗寺	椎の花	植物
3148	明治32年	夏の部	萬木の濕ふ山や五月雲	梅雨雲	天文
3150	明治32年	夏の部	涼しけや角なき鹿の草に臥す	涼し	時候
3151	明治32年	夏の部	大佛を見れば涼しき男哉	涼し	時候
3152	明治32年	夏の部	蘭を植ゑし愚庵に帰る雲涼し	涼し	時候
3153	明治32年	夏の部	狗ころと和尚と似たり夕すゞみ	納涼	人事
3154	明治32年	夏の部	水に散る神輿洗のかぶり哉	神輿洗い	人事
3155	明治32年	夏の部	飄々と神輿を洗ふ袖涼し	神輿洗い	人事
3156	明治32年	夏の部	水を吹いて鱈に到る風涼し	涼し	時候
3158	明治32年	夏の部	梅干にかしま立する翁かな	梅干す	人事
3159	明治32年	夏の部	木立出づる清き流や夏神樂	夏神樂	人事
3160	明治32年	夏の部	午近く土用の雲の起りけり	土用	時候
3161	明治32年	夏の部	散尽すねむの花見る病哉	合飲の花	植物
3162	明治32年	夏の部	塗盆の水したゝるや夏氷	氷水	人事
3163	明治32年	夏の部	空蟬や土をつかんで寂莫と	空蟬	動物
3164	明治32年	夏の部	月代や川狩の舟遡る	川狩	人事
3165	明治32年	夏の部	草の根に漣立つや水馬	水馬	動物
3166	明治32年	夏の部	雨乞の修験者谷に下りけり	雨乞	人事
3167	明治32年	夏の部	青鷺の東に飛ぶや暁の空	青鷺	動物
3169	明治32年	夏の部	水涼し顔をあぐれば東山	涼し	時候
3170	明治32年	夏の部	賣りに出る青蕃椒一荷かな	青唐辛子	植物
3171	明治32年	夏の部	芋の葉や角大豆の花あだにして	ささげ	植物
3172	明治32年	夏の部	朝起の小便したる青田かな	青田	地理
3173	明治32年	夏の部	岩の下を水流れけり青すゝき	青芒	植物
3174	明治32年	夏の部	鮎賣の水こぼしたる山路かな	鮎	動物
3175	明治32年	夏の部	醤油賣の吾に先だつ夏野哉	夏野	地理
3176	明治32年	夏の部	夏草に温泉の烟立つ軒端かな	夏草	植物
3177	明治32年	夏の部	草の上に帽子おきたる清水かな	清水	地理
3178	明治32年	夏の部	木の枝に脱ぎてかけたり夏羽織	夏羽織	人事
3179	明治32年	夏の部	墓の木に巣を張る蛛や苔の花	苔の花	植物
3180	明治32年	夏の部	雲帰る寺の昼寐の枕かな	晝寝	人事
3181	明治32年	夏の部	虫干の尼もあはれや寂光院	蟲干	人事
3182	明治32年	夏の部	夏艸に瀧のしぶきや白き花	夏草	植物
3183	明治32年	夏の部	瀧にすずみ山蟻に膾さゝれけり	納涼	人事
3829	明治33年	夏の部	青すたれ餘花に閑なる庭の雨	餘花	植物
3830	明治33年	夏の部	方丈は眼さめ玉はず蓮の寺	蓮	植物
3831	明治33年	夏の部	名所の草も螢も賣られけり	螢	動物
3832	明治33年	夏の部	晝顔の花小さくぞ咲出でし	晝顔	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3833	明治33年	夏の部	子子や花一つ咲く燕子花	子子	動物
3834	明治33年	夏の部	鶉籜も淋くなりぬ御還幸	鶉飼	人事
3835	明治33年	夏の部	虫干や山寺覗く小嘸囉	蟲干	人事
3836	明治33年	夏の部	雨乞や日は赫々と照り渡り	雨乞	人事
3837	明治33年	夏の部	晒井のよき水たまる旦那	井戸替え	人事
3838	明治33年	夏の部	火を焚くや烟もれ出る夏木立	夏木立	植物
3839	明治33年	夏の部	武者修業或は照射したりけり	照射	人事
3840	明治33年	夏の部	照射してひとりの母を養へり	照射	人事
3841	明治33年	夏の部	ともしして邪氣を受けたる病哉	照射	人事
3842	明治33年	夏の部	照射する男こわがり駕籠の中	照射	人事
3843	明治33年	夏の部	頭巾取って名告合たる照射哉	照射	人事
3844	明治33年	夏の部	ともしして戻る男や子を愛す	照射	人事
3845	明治33年	夏の部	草むらに大蛇を見たる火串哉	照射	人事
3846	明治33年	夏の部	火串して駆落者と見たりけり	照射	人事
3847	明治33年	夏の部	照射して犠牲をけんず山の神	照射	人事
3848	明治33年	夏の部	頭巾取れば美少年なりねらひ狩	照射	人事
3849	明治33年	夏の部	夢に見し木立の中の百合の花	百合	植物
3850	明治33年	夏の部	百合多き小嶋に神を祀りけり	百合	植物
3851	明治33年	夏の部	岩蔭に小さく咲きたり百合の花	百合	植物
3852	明治33年	夏の部	百合活けて簾に風を遮りぬ	百合	植物
3853	明治33年	夏の部	百合の花折り持ちて暮山を下る	百合	植物
3854	明治33年	夏の部	炭かまの跡の泉や百合の花	百合	植物
3855	明治33年	夏の部	青芒は馬に喰はれぬ百合の花	百合	植物
3856	明治33年	夏の部	山百合のはなべらを打つ小蛇かな	百合	植物
3857	明治33年	夏の部	夜遊ぶ女の神や百合の花	百合	植物
3858	明治33年	夏の部	谷川を越えて逕の百合の花	百合	植物
3859	明治33年	夏の部	佛法を誇って河豚と生れけん	河豚	動物
3860	明治33年	夏の部	佛像に対して奈良の春寒し	春寒	時候
3861	明治33年	夏の部	元日の佛にともす老となり	元日	時候
3862	明治33年	夏の部	灌佛や見上ぐれば皆若葉山	仏生会	人事
3863	明治33年	夏の部	雨のほとけそゞろに寒きおん姿	寒さ	時候
3864	明治33年	夏の部	川中の石の名所や青芒	青芒	植物
10515	明治33年	夏の部	名の知れぬ墓の乱れて苔の花	苔の花	植物
10521	明治33年	夏の部	扇置く亭の遊びや夜に入り	扇	人事
10563	明治33年	夏の部	哀への蛍あはれむ閏月	蛍	植物
10514	明治33年	夏の部	松杉聞く沼青々として閑古鳥	閑古鳥	動物
10547	明治33年	夏の部	野の草の折んとぞ思ふ花もなし	野の草	植物
10557	明治33年	夏の部	天風は後れて来る清水かな	清水	地理
10558	明治33年	夏の部	轉宅の物の花もなき土用かな	土用	時候
10559	明治33年	夏の部	清國の内亂をきく晝寐かな	晝寐	人事
10560	明治33年	夏の部	新宅に雨よるこぶ青田かな	青田	地理
10561	明治33年	夏の部	釣床や下を流るゝ水の石	釣床	人事
10564	明治33年	夏の部	糞舟の野川を下り雲の峰	雲の峰	天文
4021	明治34年	夏の部	青簾捲かんも物ぞ憂かりける	青簾	人事
4022	明治34年	夏の部	明易き旗へんほんどひるがへり	短夜	時候
4023	明治34年	夏の部	緑袍の人に逢ひけり毛虫の精	毛蟲	動物
4024	明治34年	夏の部	くたびれて皆寐入りたる清水かな	清水	地理
4025	明治34年	夏の部	風邪の氣の物ほしからず夏蜜柑	夏蜜柑	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4026	明治34年	夏の部	白藤や昔女のうらみ塚	藤の花	植物
4027	明治34年	夏の部	一ツ新茶一袋去来より	新茶	人事
4028	明治34年	夏の部	染物の浅黄萌黄や花卯木	卯の花	植物
4029	明治34年	夏の部	葉櫻や射反らしたる白羽の矢	葉櫻	植物
4030	明治34年	夏の部	辨慶の髭もそりたる袷哉	袷	人事
4031	明治34年	夏の部	即景の茄子俗なり俳諧師	茄子	植物
4032	明治34年	夏の部	露の葉を披けば水の流哉	露	植物
4033	明治34年	夏の部	大澤の露のしげりや電光	雑	雑
4034	明治34年	夏の部	露の香のいやしからざる料理哉	露	植物
4035	明治34年	夏の部	鮓おして市の心に遠さかり	鮓	人事
4036	明治34年	夏の部	絵紙賣る大津の店や藤の花	藤の花	植物
4037	明治34年	夏の部	夕市の店の鱸や月上る	鱸	動物
4038	明治34年	夏の部	玫瑰の花咲いて海碧りなり	玫瑰	植物
4039	明治34年	夏の部	日の透くや柿の花ちる柿林	柿の花	植物
4040	明治34年	夏の部	少年の夏帽ぬぎし目すゞし	夏帽子	人事
4041	明治34年	夏の部	紫陽花に取乱したる妬かな	紫陽花	植物
4042	明治34年	夏の部	青天に秀でゝ桐の花咲きぬ	桐の花	植物
4043	明治34年	夏の部	冷やかな香齋舐りぬたかむしろ	簞	人事
4044	明治34年	夏の部	蚊を打て物狂はしき修法哉	蚊	動物
4045	明治34年	夏の部	虎を待てば風も起りぬほととぎす	時鳥	動物
4046	明治34年	夏の部	卯の花のうしと見る世や仮住み	卯の花	植物
4047	明治34年	夏の部	蝸牛の静かに物の花を見る	蝸牛	動物
4048	明治34年	夏の部	菩提とは清水の如き心かな	清水	地理
4049	明治34年	夏の部	一面に花咲く苔や雲の影	苔の花	植物
4051	明治34年	夏の部	物云へば共に愚かにして涼し	涼し	時候
4052	明治34年	夏の部	抱箆の夢凡ならず覚えけり	竹夫人	人事
4053	明治34年	夏の部	瓜茄子ころがり合へるえにし哉	雑	雑
4054	明治34年	夏の部	狂歌師の買ひむさぼりぬ初茄子	茄子	植物
4055	明治34年	夏の部	振袖の露を厭ひぬ釣忍	釣忍	人事
4056	明治34年	夏の部	夕立の小鮒や草にはね上る	夕立	天文
4057	明治34年	夏の部	元禄の古茶天明の新茶哉	雑	雑
4058	明治34年	夏の部	わびしさの鮓を探て味噌を得つ	鮓	人事
4059	明治34年	夏の部	山百合や故郷人の草を刈る	百合	植物
4060	明治34年	夏の部	草蟬の百合に取りつく小鳴哉	百合	植物
4061	明治34年	夏の部	さぶしくもあるか月夜の百合の花	百合	植物
4062	明治34年	夏の部	百合活けて座を起去りぬ五尺程	百合	植物
4063	明治34年	夏の部	たきものゝ一間や昼寐しておはす	晝寝	人事
4064	明治34年	夏の部	滝殿を下り来る人やたきものす	滝殿	人事
4065	明治34年	夏の部	殺生の関白殿や時鳥	時鳥	動物
4066	明治34年	夏の部	つゝじ咲く傍に草木もなかりけり	躑躅	植物
4067	明治34年	夏の部	よき水に眼あかるき若葉哉	若葉	植物
4068	明治34年	夏の部	渋茶汲む娘梅干す媼哉	梅干す	人事
4069	明治34年	夏の部	目に青葉松魚は下司の新茶哉	雑	雑
4070	明治34年	夏の部	夏霞草の戸越の湖の上	夏霞	天文
4071	明治34年	夏の部	大徳の拂子や蠅も寄りつかず	蠅	動物
4072	明治34年	夏の部	夏草の茂きが中の軒端かな	夏草	植物
4073	明治34年	夏の部	新妻の鏡臺の上や紅扇	扇	人事
4074	明治34年	夏の部	薬湯のさめてしまひぬ夏の月	夏の月	天文

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4075	明治34年	夏の部	金碧の額の古びや蓮の亭	蓮	植物
4076	明治34年	夏の部	蕪菜の花の盛を夕立かな	夕立	天文
4077	明治34年	夏の部	心中の沙汰も久しや橋納涼	納涼	人事
4078	明治34年	夏の部	川上の空に夜振のあかり哉	夜振	人事
4079	明治34年	夏の部	行き / \ て日傘かくれし野末かな	日傘	人事
4080	明治34年	夏の部	戀もなき草刈共や虎が雨	虎が雨	天文
4081	明治34年	夏の部	蓴採る姿を人に見られけり	蓴菜	植物
4082	明治34年	夏の部	澤庵に訪はれし宵や鮓をおす	鮓	人事
4083	明治34年	夏の部	流去る卵のからや風涼し	涼し	時候
10579	明治34年	夏の部	目の前にまぼろし消えてはちす哉	はちす	植物
10589	明治34年	夏の部	夏野行く馬の嚏や菓草	夏野	地理
4375	明治35年	夏の部	採蓴の姿恥らふうき思	蓴菜	植物
4376	明治35年	夏の部	編笠や故人も我も恙なき	編笠	人事
4377	明治35年	夏の部	澤潟の花さき出てぬ雲の峰	雲の峰	天文
4378	明治35年	夏の部	羅に水草の花を画きけり	羅	人事
4379	明治35年	夏の部	鮎釣の巖に寄りけり百合の花	百合	植物
4380	明治35年	夏の部	蝙蝠や小庭あかるき白菖蒲	菖蒲	植物
4381	明治35年	夏の部	水とく / \ 山葵の花の幽かなり	山葵の花	植物
4382	明治35年	夏の部	満山の植立杉や夏に入る	夏	時候
4383	明治35年	夏の部	鐘が鳴る諸山諸木の若葉かな	若葉	植物
4384	明治35年	夏の部	うらみわび果は筑摩のかさね鍋	筑摩祭	人事
4385	明治35年	夏の部	綿ぬいで貧しき戀を悲みぬ	更衣	人事
4386	明治35年	夏の部	さま / \ の戀ぢや浮世ぢや鍋祭	筑摩祭	人事
4387	明治35年	夏の部	綿ぬぐや重きが上の小夜衣	更衣	人事
4388	明治35年	夏の部	鮑叔に銭拂はせて初鯉魚	初鯉	動物
4389	明治35年	夏の部	浅ましき草の茂りや神泉苑	草茂る	植物
4390	明治35年	夏の部	鶯の老をも知らず四睡かな	老鶯	動物
4391	明治35年	夏の部	灌佛の鐘は上野か初鯉魚	初鯉	動物
4392	明治35年	夏の部	飯喰うて淋しかりけり花卯木	卯の花	植物
4393	明治35年	夏の部	花桐の露にぬれたる鶉かな	桐の花	植物
4394	明治35年	夏の部	油々と草茂るなり午の雲	草茂る	植物
4395	明治35年	夏の部	鶯の老いてせはしき鳴音かな	老鶯	動物
4396	明治35年	夏の部	二の申の祭の旗や青嵐	青嵐	天文
4397	明治35年	夏の部	神前の笙箏築やくらべ馬	競馬	人事
4398	明治35年	夏の部	なよ竹の女竹を植ゑつ細流	竹植る	人事
4399	明治35年	夏の部	菖蒲蓬いづれ六日の軒の露	菖蒲	植物
4400	明治35年	夏の部	一碗の茶を喫了す晝寐起	晝寝	人事
4401	明治35年	夏の部	到來の鮓の香うれし晝寐起	晝寝	人事
4402	明治35年	夏の部	朝日子をそびらに負ふて矢数哉	矢數	人事
4403	明治35年	夏の部	高山の頂に人や夏帽子	夏帽子	人事
4404	明治35年	夏の部	萍やたぐりよせたる花一つ	萍	植物
4405	明治35年	夏の部	掛香や草屋に育つ貴人の子	掛香	人事
4406	明治35年	夏の部	薬つめば薬を鹿のねぶりけり	薬日	人事
4407	明治35年	夏の部	たらちねのあやめ湯まゐるかたばかり	あやめ	植物
4408	明治35年	夏の部	鄙ぶりを人に恥ぢたる粽かな	粽	人事
4409	明治35年	夏の部	菖蒲酒はなやかに蓬酒わびたり	雑	雑
4410	明治35年	夏の部	燕子の寄りもつかざる幟かな	幟	人事
4411	明治35年	夏の部	鯨賣の山路を來る女かな	鯨	動物

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4412	明治35年	夏の部	夕立や八尺の麻刈乱す	夕立	天文
4413	明治35年	夏の部	妹が取る小田の早苗の長短	早苗	植物
4414	明治35年	夏の部	ます鏡榭の花も咲きにけり	榭の花	植物
4415	明治35年	夏の部	鮎賣の水こぼし去る朝戸哉	鮎	動物
4416	明治35年	夏の部	宿の子の淺きなじみや苺やる	苺	植物
4417	明治35年	夏の部	瓜さがす野鍛冶が弟子や瓜の花	瓜の花	植物
4418	明治35年	夏の部	蚊帳を出て芭蕉つめたし眉の上	蚊帳	人事
4419	明治35年	夏の部	鑛を砕く響や雲の峯	雲の峰	天文
4420	明治35年	夏の部	競渡見る二喬や未だ幼き	ボート	人事
4421	明治35年	夏の部	紫陽花の蛇とる児や寺の間	紫陽花	植物
4422	明治35年	夏の部	香薷ねる水したたらず掌	香薷散	人事
4423	明治35年	夏の部	鹿の子の露涼しげにねぶりけり	鹿の子	動物
4424	明治35年	夏の部	夏川や喚べば答へて徒渉り	夏の川	地理
4425	明治35年	夏の部	編笠や人に知られし面魂	編笠	人事
4426	明治35年	夏の部	編笠や風吹來る伊豆の海	編笠	人事
4427	明治35年	夏の部	貯の煮酒の壺や詩を作る	煮酒	人事
4428	明治35年	夏の部	五更の灯煮酒の冷えを照しけり	煮酒	人事
4429	明治35年	夏の部	酒のまぬ杜氏や煮酒の火の加減	煮酒	人事
4430	明治35年	夏の部	封じ去る煮酒の桶や藏はやみ	煮酒	人事
4431	明治35年	夏の部	人のために酒煮るも憂し志	煮酒	人事
4433	明治35年	夏の部	大川の溢るゝ水や雲の峯	雲の峰	天文
4434	明治35年	夏の部	汎濫の水吹く風や雲の峯	雲の峰	天文
4435	明治35年	夏の部	くものみね洪水海と連りぬ	雲の峰	天文
4436	明治35年	夏の部	くものみね洪水國を貫けり	雲の峰	天文
4437	明治35年	夏の部	くものみね洪水森を洗去る	雲の峰	天文
4438	明治35年	夏の部	洪水や忽ち起るくもの峰	雲の峰	天文
4439	明治35年	夏の部	洪水をかぎる木立や雲の峰	雲の峰	天文
4440	明治35年	夏の部	眼前に水漲りぬ雲の峰	雲の峰	天文
4441	明治35年	夏の部	雲の峰くづれ洪水暮れんとす	雲の峰	天文
4442	明治35年	夏の部	くものみね水漲って音もなし	雲の峰	天文
4443	明治35年	夏の部	洪水に吾が立つ丘や雲の峯	雲の峰	天文
4444	明治35年	夏の部	洪水や葉山しげ山雲の峯	雲の峰	天文
4445	明治35年	夏の部	洪水の舟出恐ろし雲の峯	雲の峰	天文
4446	明治35年	夏の部	洪水の野にひた / \ と雲の峯	雲の峰	天文
4447	明治35年	夏の部	雲の峯出水の中の大榎	雲の峰	天文
4448	明治35年	夏の部	横サマに水押寄せぬ雲の峯	雲の峰	天文
4449	明治35年	夏の部	洪水や日たゞゆるがぬ雲の峯	雲の峰	天文
4450	明治35年	夏の部	洪水の老樹に激す雲の峯	雲の峰	天文
4451	明治35年	夏の部	洪水の渦去て雲の峯	雲の峰	天文
4452	明治35年	夏の部	雲の峰洪水の音遠きより	雲の峰	天文
4453	明治35年	夏の部	諸共に起きてふたさぬかやの穴	蚊帳	人事
4454	明治35年	夏の部	冷飯をこぼす夏書の御経かな	夏書	人事
4456	明治35年	夏の部	ひやめし喰終って冷飯腹横はる	雑	雑
4457	明治35年	夏の部	理屈云ふ兼好法師初松魚	初鯉	動物
4458	明治35年	夏の部	武者窓に雨吹きちるや桐の花	桐の花	植物
4459	明治35年	夏の部	鹿の子に馴れて遊びぬ女童	鹿の子	動物
4460	明治35年	夏の部	迷ひ行く鹿の子や神にみちびかれ	鹿の子	動物
4461	明治35年	夏の部	薬ふる夜明の水や白あやめ	あやめ	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4462	明治35年	夏の部	訪ひよれば思ふ女のまゆをえる	繭	人事
4463	明治35年	夏の部	よきまゆをえりわけにけり小一合	繭	人事
4464	明治35年	夏の部	日があたる水馬の夢や菱の花	菱の花	植物
4465	明治35年	夏の部	卵の花の水にこぼれて水馬哉	水馬	動物
4466	明治35年	夏の部	うすものや雨玉階にそゝぐ夕	羅	人事
4467	明治35年	夏の部	うすものや風を怕るゝ御悩み	羅	人事
4468	明治35年	夏の部	石榴の花の盛も久しかり	石榴の花	植物
4469	明治35年	夏の部	麦刈の寺を抜けけり花ざくろ	石榴の花	植物
4470	明治35年	夏の部	皮をぬく竹四五本の月夜哉	竹の皮脱ぐ	植物
4471	明治35年	夏の部	清流や竹の皮ちる竹の風	竹の皮脱ぐ	植物
4472	明治35年	夏の部	追剥に逢はで峠の明易き	短夜	時候
4473	明治35年	夏の部	夕立や熊坂の胸毛ぬるゝ程	夕立	天文
4474	明治35年	夏の部	涼しさや水進む大理石	涼し	時候
4475	明治35年	夏の部	湯あみして薄荷畑の風涼し	涼し	時候
4476	明治35年	夏の部	人の國は又も直訴や田植唄	田植	人事
4477	明治35年	夏の部	雨乞や又現はれし白き虹	雨乞	人事
4478	明治35年	夏の部	鍋さげて山田通ひや五月人	五月	時候
4479	明治35年	夏の部	くす玉の紫がちや右左	薬玉	人事
4480	明治35年	夏の部	人訪へば人の女房の昼ね哉	晝寝	人事
4481	明治35年	夏の部	一家皆昼寐のさまや明けはなし	晝寝	人事
4482	明治35年	夏の部	人の来て昼寐の母御目さめたり	晝寝	人事
4483	明治35年	夏の部	紫陽花に昼寐の臉開きけり	晝寝	人事
4484	明治35年	夏の部	山蟻を恐るゝ樹下の昼ね哉	晝寝	人事
4485	明治35年	夏の部	一人さめて蚊帳をつくらふ昼寐哉	晝寝	人事
4486	明治35年	夏の部	目さむれば虹が出て居る昼寐哉	晝寝	人事
4487	明治35年	夏の部	花活の花が開きぬ昼寐覚	晝寝	人事
4488	明治35年	夏の部	白薔薇を活けて和尚の昼寐哉	晝寝	人事
4489	明治35年	夏の部	鮒すしの消息もあり昼寐起	晝寝	人事
4490	明治35年	夏の部	前栽の日かげとなりぬ昼寐起	晝寝	人事
4491	明治35年	夏の部	庭樹打って人の昼寐を驚かす	晝寝	人事
4492	明治35年	夏の部	盗人の晝寐をしばる社かな	晝寝	人事
4493	明治35年	夏の部	雷や胡瓜畑の花ざかり	瓜の花	植物
4494	明治35年	夏の部	わぶらくは皆になりたる鮒の桶	鮒	人事
4495	明治35年	夏の部	蘭湯や一家兄弟十二人	蘭湯	人事
4496	明治35年	夏の部	子子のいやじゃ / \ と申しけり	子子	動物
4497	明治35年	夏の部	打水の盥の鯉がはねる哉	打水	人事
4498	明治35年	夏の部	卵の花に残る山吹きびしくも	卵の花	植物
4499	明治35年	夏の部	虫干の衣にかくるゝ童かな	蟲干	人事
4501	明治35年	夏の部	水飯に悲しき心起りけり	水飯	人事
4502	明治35年	夏の部	川上の朗詠美なる夜振かな	夜振	人事
4503	明治35年	夏の部	夏菊の黄もめづらしき朝餉哉	夏菊	植物
4504	明治35年	夏の部	蟻螂の世に顔よくも生れけり	蟻螂生る	動物
4505	明治35年	夏の部	屋根の上に土用の花やこぼれ草	土用	時候
4506	明治35年	夏の部	水草に流れ来て去る蟬の殻	空蟬	動物
4507	明治35年	夏の部	石山の石の上飛ぶ螢かな	螢	動物
4508	明治35年	夏の部	水に流す夏書の反古や朝あらし	夏書	人事
4509	明治35年	夏の部	百合切て滝に抛つ修法かな	百合	植物
4510	明治35年	夏の部	石に腰百合の写生や木下闇	百合	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4511	明治35年	夏の部	心よき浅黄のうらや更衣	更衣	人事
4512	明治35年	夏の部	氷むろ山櫻の頃の行幸哉	氷室	人事
4513	明治35年	夏の部	川床にしるき丈山の拂子哉	川床	人事
4514	明治35年	夏の部	夏瘦の手洗ひにゆく泉哉	夏瘦	人事
4515	明治35年	夏の部	佛拝む稚き君やくのえ香	薫衣香	人事
4516	明治35年	夏の部	掛香や領布ふりなから近よりぬ	掛香	人事
4518	明治35年	夏の部	夏羽をり長し短し人の丈け	夏羽織	人事
4519	明治35年	夏の部	詩箋飛んで水に入りけりたかむしろ	簞	人事
4520	明治35年	夏の部	一莖の蓮潔き夏書哉	夏書	人事
4521	明治35年	夏の部	境内の狸の番や栗の花	栗の花	植物
4522	明治35年	夏の部	梅干も日蔭となりぬ店の間	梅干す	人事
4523	明治35年	夏の部	明易き草の嵐や蛇の衣	蛇衣を脱ぐ	動物
4524	明治35年	夏の部	満願の暁出や風かほる	薫風	天文
4525	明治35年	夏の部	五月雨の背戸にすてけり魚のわた	五月雨	天文
4526	明治35年	夏の部	河骨や雲を出でたる日の光	河骨	植物
4527	明治35年	夏の部	百合高く鹿の子小さく画きけり	雑	雑
4528	明治35年	夏の部	銀の箸吹く風や沖膾	沖膾	人事
4529	明治35年	夏の部	乳母が宿の此頃の花や蜀葵	立葵	植物
4530	明治35年	夏の部	洗たくや盥にうつる雲の峰	雲の峰	天文
4531	明治35年	夏の部	心太つくがわざなる漢哉	心太	人事
4532	明治35年	夏の部	潔くすゝり了りぬ心太	心太	人事
4533	明治35年	夏の部	心太人各々が銭勘定	心太	人事
4534	明治35年	夏の部	心太ありやと如意を揮ひけり	心太	人事
4535	明治35年	夏の部	心太五言一句を口吟む	心太	人事
4536	明治35年	夏の部	昼兒の虹見る頃をしぼみけり	晝顔	植物
4537	明治35年	夏の部	見てすぎぬ思ふ女のまゆをえる	繭	人事
4538	明治35年	夏の部	麻畑にあかき旭ざしや山かつら	麻	植物
4539	明治35年	夏の部	水馬名のなき虫も遊ぎけり	水馬	動物
4540	明治35年	夏の部	訃をきいて驚き起つやほとゝぎす	時鳥	動物
4541	明治35年	夏の部	うすものゝ兼好にくき男かな	羅	人事
4542	明治35年	夏の部	水飯に風や四面の蓮より	水飯	人事
4543	明治35年	夏の部	着かへたる白帷子やよだち過	帷子	人事
4544	明治35年	夏の部	蝙蝠や母子すまひの念佛鉦	蝙蝠	動物
4545	明治35年	夏の部	行水や虹消え残る東山	行水	人事
4546	明治35年	夏の部	夏川をわたり少らく跣足哉	夏の川	地理
4547	明治35年	夏の部	夏川のまた吹く風や顧みる	夏の川	地理
4548	明治35年	夏の部	夏川や草刈共の夕渉	夏の川	地理
4549	明治35年	夏の部	夏川や木立もる日のさぶら波	夏の川	地理
4550	明治35年	夏の部	夏川の已にあけたるうがひ哉	夏の川	地理
4551	明治35年	夏の部	夏川に下り立つ人や朝月夜	夏の川	地理
4552	明治35年	夏の部	夏川や夜ふけて渉る水の音	夏の川	地理
4553	明治35年	夏の部	夏川の月見る家や明放し	夏の川	地理
4554	明治35年	夏の部	夏川の月待つさまや捲すだれ	夏の川	地理
4555	明治35年	夏の部	編笠の人に訪はれし昼寐哉	編笠	人事
4556	明治35年	夏の部	編笠やいつもの髭を剃落し	編笠	人事
4557	明治35年	夏の部	編笠を脱いで心太に對しけり	心太	人事
4558	明治35年	夏の部	編笠に湖吹く風の真向哉	編笠	人事
4559	明治35年	夏の部	其中の女と見えつ小編笠	編笠	人事

明治26年～明治35年

夏の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4560	明治35年	夏の部	編笠に故人瘦せたる涙かな	編笠	人事
4561	明治35年	夏の部	編笠をゆるがし笑ふ別哉	編笠	人事
4562	明治35年	夏の部	山寺の餘花紅に目さましき	餘花	植物
4563	明治35年	夏の部	一鳥啼かず餘花更に幽かなる	餘花	植物
4564	明治35年	夏の部	駒牽や鞍に青葉の日の光	青葉	植物
4565	明治35年	夏の部	駒曳や鬣を吹く青あらし	青嵐	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
137	明治27年	秋の部	初秋の鳶の高さよ安房の山	初秋	時候
138	明治27年	秋の部	浦人よ初秋の雑魚ありやなしや	初秋	時候
139	明治27年	秋の部	初秋の枕に近し海の音	初秋	時候
140	明治27年	秋の部	樓高し頭上をはしる天の川	天の川	天文
141	明治27年	秋の部	落潮の漁燈遥なり天の川	天の川	天文
142	明治27年	秋の部	秋風や彼も昔は二千石	秋の風	天文
143	明治27年	秋の部	秋風の砲台高し観音崎	秋の風	天文
144	明治27年	秋の部	海くれて安房の山々秋の風	秋の風	天文
145	明治27年	秋の部	秋風のいさり火消えつ海の闇	秋の風	天文
146	明治27年	秋の部	秋風の鱸肥えたる便りかな	秋の風	天文
147	明治27年	秋の部	縁に出でゝ手を組む人や秋の風	秋の風	天文
148	明治27年	秋の部	秋の風美人眼をやむ帳かな	秋の風	天文
149	明治27年	秋の部	虫の音のやむ時露の音すなり	蟲	動物
150	明治27年	秋の部	大船や霧はれて海の果もなし	霧	天文
151	明治27年	秋の部	秋風や家に白髪之母います	秋の風	天文
152	明治27年	秋の部	稻妻の竹の梢は戦ぐなり	稻妻	天文
153	明治27年	秋の部	朝顔や賣家の札に這ひかゝる	朝顔	植物
154	明治27年	秋の部	朝兒の庄屋が家や寄合衆	朝顔	植物
155	明治27年	秋の部	きり／＼す膳の縁這ふ苔屋かな	きりぎりす	動物
156	明治27年	秋の部	淋しくは爰に來て啼けきり／＼す	きりぎりす	動物
157	明治27年	秋の部	きり／＼す昔話のとぎれかな	きりぎりす	動物
158	明治27年	秋の部	促織の肩に飛びつく浴みかな	こおろぎ	動物
159	明治27年	秋の部	蜻蛉ちら／＼秋静かなる小村かな	蜻蛉	動物
160	明治27年	秋の部	海原や月更けて人樓にあり	月	天文
161	明治27年	秋の部	大原の月下をはしる鉄車かな	月	天文
162	明治27年	秋の部	大海原疊の如し星月夜	星月夜	天文
163	明治27年	秋の部	淺川の水の光りや星月夜	星月夜	天文
164	明治27年	秋の部	秋の雨旅の記をかくひとりかな	秋の雨	天文
165	明治27年	秋の部	荒海や龍王も泣く秋の雨	秋の雨	天文
166	明治27年	秋の部	大杉の梢尖れり秋の空	秋の空	天文
167	明治27年	秋の部	大海の秋静かに月あらはれぬ	秋	時候
168	明治27年	秋の部	行秋や水の底なる栗のいが	行秋	時候
169	明治27年	秋の部	茄子の花小さく咲いて秋暮れぬ	秋の暮	時候
170	明治27年	秋の部	人も見えず一犬吠えて秋くれぬ	秋の暮	時候
171	明治27年	秋の部	栗の種の我から動く夕月夜	栗	植物
172	明治27年	秋の部	水すみて雁影細き野川哉	雁	動物
173	明治27年	秋の部	雁一ツ月のあたりを飛ぶ夜哉	雁	動物
174	明治27年	秋の部	雁の声胡天に入て月落ちぬ	雁	動物
175	明治27年	秋の部	雁なくや扁舟去て水悠々	雁	動物
176	明治27年	秋の部	雁が音や月下をはしる汽車の窓	雁	動物
177	明治27年	秋の部	二三軒柿の紅葉のあはひかな	柿紅葉	植物
178	明治27年	秋の部	草紅葉一逕つきて小家かな	草錦	植物
179	明治27年	秋の部	秋高く海は白帆の往來かな	秋高し	天文
180	明治27年	秋の部	秋晴れたり船去て烟横はる	秋晴	天文
181	明治27年	秋の部	海暮れんとす秋の苔屋に烟起つ	秋	時候
182	明治27年	秋の部	里の秋うなるふみ讀む声すなり	秋	時候
342	明治28年	秋の部	さわやかに秋立つ村の草木かな	立秋	時候
343	明治28年	秋の部	曙の山近うして秋の立つ	立秋	時候

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
344	明治28年	秋の部	曙の雲に秋立つ峠かな	立秋	時候
345	明治28年	秋の部	初秋の蟬ひいと鳴いて飛びにけり	初秋	時候
346	明治28年	秋の部	初秋の人渡るなり瀬田の橋	初秋	時候
347	明治28年	秋の部	初秋の灯火并ぶ港町	初秋	時候
348	明治28年	秋の部	初秋の白河在を旅立ちぬ	初秋	時候
349	明治28年	秋の部	初秋の奥の大名登るなり	初秋	時候
351	明治28年	秋の部	初秋の君は彼方よ浪の音	初秋	時候
352	明治28年	秋の部	初秋の烟起つなり朝の村	初秋	時候
353	明治28年	秋の部	初秋の庭石ぬれて目さめたり	初秋	時候
354	明治28年	秋の部	初秋の手水に映る兒やせたり	初秋	時候
355	明治28年	秋の部	草揺れて灯火揺れて虫のなく	蟲	動物
356	明治28年	秋の部	灯青く秋の雨ふる伽藍かな	秋の雨	天文
357	明治28年	秋の部	辻堂に灯ともす人や秋の雨	秋の雨	天文
358	明治28年	秋の部	奥州の秋の并松雨暗し	秋	時候
359	明治28年	秋の部	何萬里を天の川の音もなし	天の川	天文
360	明治28年	秋の部	龕燈死し僧物いはず電光	稻妻	天文
361	明治28年	秋の部	美しくや小草の露の夕月夜	露	天文
362	明治28年	秋の部	朝露の小狐ぬれて帰るなり	露	天文
363	明治28年	秋の部	白露の我思千々に乱れける	露	天文
364	明治28年	秋の部	はら / \ と葎の露のこぼれける	露	天文
365	明治28年	秋の部	驛路の露の有明面白や	露	天文
366	明治28年	秋の部	白露のこぼれて物を思ひける	露	天文
367	明治28年	秋の部	白露の古き関所をゆくはたれ	露	天文
368	明治28年	秋の部	古道の露踏みしだき / \	露	天文
369	明治28年	秋の部	夕暮の小草花咲く野は廣し	花野	地理
370	明治28年	秋の部	夕月や家を繞りて萩の花	萩	植物
371	明治28年	秋の部	萩咲いてほの三日月の小家かな	萩	植物
372	明治28年	秋の部	雨の萩赤い女の通りけり	萩	植物
373	明治28年	秋の部	草長く灯火細し初嵐	初嵐	天文
374	明治28年	秋の部	文月の太刀佩くは誰が家の子ぞ	文月	時候
375	明治28年	秋の部	更くる夜を橡の実落る山家かな	橡の実	植物
377	明治28年	秋の部	秋風や汝と我と三千里	秋の風	天文
378	明治28年	秋の部	秋の風手はなつ蔓の哀れなり	秋の風	天文
379	明治28年	秋の部	一村は晒月夜となりにけり	月	天文
380	明治28年	秋の部	明月の瀛車路長し那須の原	名月	天文
381	明治28年	秋の部	秋の夕鳥は時に帰るなり	秋の暮	時候
382	明治28年	秋の部	里の秋このみ草のみこぼれけり	秋	時候
383	明治28年	秋の部	菅笠や秋の峠をゆくはたれ	秋	時候
384	明治28年	秋の部	この曉洗ひあげたる秋なるか	秋	時候
385	明治28年	秋の部	秋晴や鎮守の森の赤い旗	秋晴	天文
386	明治28年	秋の部	山寺の秋の灯火幽かなり	秋	時候
387	明治28年	秋の部	桐一葉此夜山僧帰来ず	桐一葉	植物
388	明治28年	秋の部	東雲や幽かに稻のそよぐ音	稻	植物
389	明治28年	秋の部	早稻の香の千疊敷を吹廻ける	稻	植物
390	明治28年	秋の部	女郎花そとば仆れて文字もなし	女郎花	植物
391	明治28年	秋の部	行秋を何國へ越ゆる順礼ぞ	行秋	時候
392	明治28年	秋の部	行く秋を誰が家の子のかしましや	行秋	時候
393	明治28年	秋の部	秋の暮鳥のつゝく何の骨	秋の暮	時候

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
395	明治28年	秋の部	行秋を恙なかりけり君も我も	行秋	時候
396	明治28年	秋の部	藁葺の屋根はら / \ と秋の風	秋の風	天文
397	明治28年	秋の部	谷川に霧吹下ろし / \	霧	天文
398	明治28年	秋の部	ほろ / \ と柳散りけりほろ / \ と	柳散る	植物
514	明治29年	秋の部	瘦犬のくぐり出でたり萩の垣	萩	植物
515	明治29年	秋の部	初秋の松杉高し城の跡	初秋	時候
516	明治29年	秋の部	城跡の草吹きまくる野分かな	野分	天文
518	明治29年	秋の部	酒壺を野分に仆すこと勿れ	野分	天文
520	明治29年	秋の部	誰が家の子ぞと呼ばれん秋の風	秋の風	天文
521	明治29年	秋の部	泣かぬ子の後ろつき見よ秋の風	秋の風	天文
522	明治29年	秋の部	行秋を宋江壁に題しける	行秋	時候
523	明治29年	秋の部	小傾城にこやかに行秋を知らず	行秋	時候
524	明治29年	秋の部	徒らに我髭伸びつ秋のゆく	行秋	時候
526	明治29年	秋の部	帰るべく帰らば新酒熟すべく	新酒	人事
527	明治29年	秋の部	いざ罷らん栗飯の腹ふくれける	栗飯	人事
528	明治29年	秋の部	菊咲いて雨風多き他國かな	菊	植物
529	明治29年	秋の部	長安に滞ること三月菊の花	菊	植物
530	明治29年	秋の部	行秋の心地死ぬべく覚えたり	行秋	時候
531	明治29年	秋の部	玉川の鮎三寸にしてさびたりな	鯖鮎	動物
532	明治29年	秋の部	宿酔や三尺の窓に富士の秋	秋	時候
533	明治29年	秋の部	國境や北を望めバ秋のゆく	行秋	時候
534	明治29年	秋の部	紅葉せり出羽奥州の峯つゞき	紅葉	植物
535	明治29年	秋の部	北國の山々見えつ未枯るゝ	未枯	植物
536	明治29年	秋の部	邯鄲の市は新酒の匂ひかな	新酒	人事
537	明治29年	秋の部	秋のふじ塔三寸の裾野かな	秋	時候
538	明治29年	秋の部	此の恨ほろりとこぼれし露の玉	露	天文
539	明治29年	秋の部	堆く小皿に盛りぬこほれ萩	萩	植物
540	明治29年	秋の部	女郎花くねりたるをばちご折れり	女郎花	植物
541	明治29年	秋の部	鬼灯の豆の如きを三ツばかり	鬼灯	植物
542	明治29年	秋の部	薄き濃き紅葉三ツ四ツ手水鉢	紅葉	植物
543	明治29年	秋の部	啼かず飛ばず鴉がぬれて秋の雨	秋の雨	天文
544	明治29年	秋の部	一人居れば丑満頃の虫が鳴く	蟲	動物
545	明治29年	秋の部	朝兒の小さな屋根に這ひのぼる	朝顔	植物
546	明治29年	秋の部	姫君は朝兒の蒼つませ給ふ	朝顔	植物
547	明治29年	秋の部	妹死んで終に此秋老いにける	暮の秋	時候
548	明治29年	秋の部	鳶飛んで天に戻るか里の秋	秋	時候
549	明治29年	秋の部	よき人の登第したり菊の花	菊	植物
550	明治29年	秋の部	瀬をはやみあはれ / \ 鮎落んとす	鯖鮎	動物
551	明治29年	秋の部	名月の船に琵琶ひく昔思ほゆ	名月	天文
552	明治29年	秋の部	僧死んで月片われぬ峯の上	月	天文
553	明治29年	秋の部	垣をあらみ朝兒の蔓ばかりなり	朝顔	植物
554	明治29年	秋の部	谷間の月に砧の舂かな	砧	人事
555	明治29年	秋の部	三日月の彼方に鹿の声すなり	鹿	動物
556	明治29年	秋の部	船頭の子はみめよくて月夜かな	月	天文
557	明治29年	秋の部	鹿笛のあはれ聞えずならんとす	鹿	動物
558	明治29年	秋の部	渋柿や三郎實語教をよむ	柿	植物
559	明治29年	秋の部	我等二人松茸を煮て句作せん	松茸	植物
560	明治29年	秋の部	塗縁に南天の実のこぼれける	南天の実	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
561	明治29年	秋の部	歌なんど嶋立澤の秋の暮	秋の暮	時候
562	明治29年	秋の部	鹿どもが葉採らんと行けば啼く	鹿	動物
563	明治29年	秋の部	急げ馬鶉もなかず日は暮れぬ	鶉	動物
564	明治29年	秋の部	啄木鳥や宮様は下馬せさせ給ふ	啄木鳥	動物
565	明治29年	秋の部	百舌の声寺子の声や申の刻	鴝	動物
566	明治29年	秋の部	小坊主が最上峯の砧かな	砧	人事
567	明治29年	秋の部	夕暮を下第の人と雁と行く	雁	動物
568	明治29年	秋の部	乗合の寝静まる時雁わたる	雁	動物
569	明治29年	秋の部	苦船の夜の雨音雁の音	雁	動物
570	明治29年	秋の部	雁をきく夜船の底の進士かな	雁	動物
571	明治29年	秋の部	江の村や夕嵐して鳥渡る	渡鳥	動物
572	明治29年	秋の部	畔をゆけば蠡三ツ四ツ飛びぬ	蠡	動物
573	明治29年	秋の部	蠨螂の戈を枕に眠るかな	蠨螂	動物
574	明治29年	秋の部	白虹日を貫いて蠨螂起つ	蠨螂	動物
575	明治29年	秋の部	蟬は小さき黒き虫にぞありける	こおろぎ	動物
576	明治29年	秋の部	蜻蛉の三十六湾日は斜	蜻蛉	動物
577	明治29年	秋の部	蜻蛉一ツ鞍をはなれぬ野道かな	蜻蛉	動物
578	明治29年	秋の部	蜻蛉や斜に長き塔の影	蜻蛉	動物
579	明治29年	秋の部	残る蚊の侮りがたき力かな	秋の蚊	動物
580	明治29年	秋の部	秋の蚊の泣く / \ 雨に出でゝ行く	秋の蚊	動物
581	明治29年	秋の部	秋の蠅承塵光りて恐ろしき	秋の蠅	動物
582	明治29年	秋の部	秋の蠅二ツ三ツ寄合ふ鞍の上	秋の蠅	動物
583	明治29年	秋の部	二ツツ秋の螢の消えてゆく	秋の螢	動物
584	明治29年	秋の部	飛びもやらず秋の螢の一ツかな	秋の螢	動物
585	明治29年	秋の部	秋の蝶つれな芒にはぢかれぬ	秋の蝶	動物
586	明治29年	秋の部	恨かな小町が塚の秋の蝶	秋の蝶	動物
587	明治29年	秋の部	虫どもの夜更けて何を語るのか	蟲	動物
588	明治29年	秋の部	虫の音の草をくゞりて行方かな	蟲	動物
589	明治29年	秋の部	何虫ぞ或は一時に鳴き立つる	蟲	動物
590	明治29年	秋の部	雪洞や虫さがすちごの美しき	蟲	動物
591	明治29年	秋の部	行けど / \ 野路は虫の音ばかり	蟲	動物
592	明治29年	秋の部	蠟燭に紅葉をかざす内侍かな	紅葉	植物
593	明治29年	秋の部	欄干に白衣の客の月夜哉	月	天文
594	明治29年	秋の部	紅葉さげて中將の君立たせ給ふ	紅葉	植物
595	明治29年	秋の部	紅葉狩横川の僧都見たるよ	紅葉狩	人事
596	明治29年	秋の部	神殿に蠟燭を傳ふ夜寒かな	夜寒	時候
597	明治29年	秋の部	渋柿や丈け小さき寺男	柿	植物
598	明治29年	秋の部	柴胡掘て見知らぬ翁帰りける	薬掘	人事
599	明治29年	秋の部	もみぢ葉の簾を撲てひるがへる	紅葉	植物
600	明治29年	秋の部	栗はねて山賊の頭領あらはれぬ	栗	植物
601	明治29年	秋の部	栗を焼く山賊の妻美なるかな	栗	植物
602	明治29年	秋の部	茸狩りて天狗を見たる噂かな	茸狩	人事
603	明治29年	秋の部	空寺や嵐三疋栗一ツ	栗	植物
604	明治29年	秋の部	いが栗をころがして来る童哉	栗	植物
605	明治29年	秋の部	栗はねて大入道と化けても見よ	栗	植物
606	明治29年	秋の部	いが栗をつかまんものとあせりける	栗	植物
607	明治29年	秋の部	乱を避けてくさびらなんど狩り暮らす	茸	植物
608	明治29年	秋の部	茸狩に吾松茸を得んとぞ思ふ	茸狩	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
609	明治29年	秋の部	白馬馬に非ずと云へば栗はねる	栗	植物
610	明治29年	秋の部	夢に木犀の下美人立てりき	木犀	植物
611	明治29年	秋の部	紅葉散る高麗縁の疊哉	紅葉	植物
612	明治29年	秋の部	明星や神前の紅葉巫女の袖	紅葉	植物
613	明治29年	秋の部	芋ひきや偶々宿る旅の僧	芋	植物
614	明治29年	秋の部	百尺の蔦這上る巖かな	蔦	植物
615	明治29年	秋の部	十文字に蔦とざしたる空家かな	蔦	植物
616	明治29年	秋の部	末枯や暮雲平かに奥州路	末枯	植物
617	明治29年	秋の部	菊咲いて朝鮮人が詩を作る	菊	植物
618	明治29年	秋の部	椎の実の八升ばかりこぼれける	椎の實	植物
619	明治29年	秋の部	亡國の志士寄合ふや菊の花	菊	植物
620	明治29年	秋の部	尾花ぼう / \ 驚破漁陽の鼙鼓起る	芒	植物
621	明治29年	秋の部	子を負て昼餉持行く芦の花	蘆の花	植物
622	明治29年	秋の部	何鳥か飛起つ芦の花月夜	蘆の花	植物
623	明治29年	秋の部	二三本鶏頭の丈の高さかな	鶏頭	植物
624	明治29年	秋の部	鶏頭の共に仆るゝ卒塔婆かな	鶏頭	植物
625	明治29年	秋の部	花もなき蓼ぼう / \ と藏やしき	蓼の花	植物
626	明治29年	秋の部	死馬の紅葉かぶりて流れける	紅葉	植物
627	明治29年	秋の部	旭出るや紅葉よりつく橋の杭	紅葉	植物
628	明治29年	秋の部	稲こきの其家の舂もと浪人	稲こき	人事
629	明治29年	秋の部	花もなき鶏頭散りぬ地藏堂	鶏頭	植物
630	明治29年	秋の部	里の子の切りさいなむや鶏頭花	鶏頭	植物
631	明治29年	秋の部	犬殺は武士の果なり稲の花	稲の花	植物
632	明治29年	秋の部	稲刈や兄弟二人睦しき	稲刈	人事
633	明治29年	秋の部	鳳仙花を人形姫に奉る	鳳仙花	植物
634	明治29年	秋の部	笑ましげに鬼灯ならず女の子	鬼灯	植物
635	明治29年	秋の部	野菊なんをかしきものにはありける	野菊	植物
636	明治29年	秋の部	盗人のいさかひすなり芒原	芒	植物
637	明治29年	秋の部	大株の芒刈られてしまひけり	芒	植物
638	明治29年	秋の部	黒い牛赤い牛居る花野哉	花野	地理
639	明治29年	秋の部	やう / \ に谷を出れば花野かな	花野	地理
640	明治29年	秋の部	ひとり来て何やら思ふ花野かな	花野	地理
641	明治29年	秋の部	芭蕉十八尺欄に上る影婆娑たり	芭蕉	植物
642	明治29年	秋の部	ふくべツいつまでも / \ さがりける	瓢	植物
643	明治29年	秋の部	笑て答へずひさごを叩く童子かな	瓢	植物
644	明治29年	秋の部	かくの如きふくべに似たるものありや	瓢	植物
645	明治29年	秋の部	がむしやむと唐辛子かむ男かな	唐辛子	植物
646	明治29年	秋の部	あれに見ゆる紅葉の山は何山か	紅葉	植物
647	明治29年	秋の部	庵せましふくべころがる二ツまで	瓢	植物
648	明治29年	秋の部	僧喝す柳は緑り唐辛子	唐辛子	植物
649	明治29年	秋の部	紅葉した漆畑を風が吹く	紅葉	植物
650	明治29年	秋の部	二三十紅葉の山の夕鴉	紅葉	植物
651	明治29年	秋の部	家古く柿の大木紅葉せり	柿	植物
652	明治29年	秋の部	伸上り紅葉折らまくほしき女	紅葉	植物
653	明治29年	秋の部	橋朽ちて両岸の紅葉半散る	紅葉	植物
654	明治29年	秋の部	小屋の前の櫛紅葉せり水車	櫛紅葉	植物
655	明治29年	秋の部	飯や焚く村南の紅葉烟起つ	紅葉	植物
656	明治29年	秋の部	紅葉午にして木こりが娘戀を歌ふ	紅葉	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
657	明治29年	秋の部	少年詩を吟じて紅葉山下を過ぐ	紅葉	植物
658	明治29年	秋の部	夕虹の紅葉につゞく峠かな	紅葉	植物
659	明治29年	秋の部	縁に散る紅葉を掃ふ若き尼	散紅葉	植物
660	明治29年	秋の部	散紅葉真白き手して拾ひける	散紅葉	植物
661	明治29年	秋の部	一片の紅葉を千々にさく女	紅葉	植物
662	明治29年	秋の部	一漢酒を被て紅葉をゆする	紅葉	植物
663	明治29年	秋の部	岩角を打てば裂けぬべき紅葉かな	紅葉	植物
664	明治29年	秋の部	断岸を紅葉すべること数ふべからず	紅葉	植物
665	明治29年	秋の部	そばふれば紅葉さゝやく音すなり	紅葉	植物
666	明治29年	秋の部	そばぬれて紅葉をくゞる樵夫かな	紅葉	植物
667	明治29年	秋の部	暁や紅葉もこぼれ露もこぼれ	紅葉	植物
668	明治29年	秋の部	幾秋の紅葉は朽ちて何になる	紅葉	植物
669	明治29年	秋の部	大木の紅葉の下や毬の唄	紅葉	植物
670	明治29年	秋の部	童子云へらく紅葉した山に師はありと	紅葉	植物
671	明治29年	秋の部	里近し紅葉の奥の唄の声	紅葉	植物
672	明治29年	秋の部	紅葉して門長へに鎖したり	紅葉	植物
673	明治29年	秋の部	漁人帰る丹楓江上夕照す	楓	植物
674	明治29年	秋の部	見送りや紅葉の村の外れまで	紅葉	植物
675	明治29年	秋の部	一村は徴兵帰る紅葉する	紅葉	植物
676	明治29年	秋の部	紙燭して見れば紅葉がこぼれぬる	紅葉	植物
677	明治29年	秋の部	深潭や風死して紅葉散りこぼれ	紅葉	植物
678	明治29年	秋の部	大澤に紅葉飄る嵐かな	紅葉	植物
679	明治29年	秋の部	岩角にへばりつゐたる紅葉哉	紅葉	植物
680	明治29年	秋の部	乞食ども紅葉のかげにやすらへり	紅葉	植物
681	明治29年	秋の部	見て居ればボキと紅葉折る男哉	紅葉	植物
682	明治29年	秋の部	くる / \ と犬ころはしる紅葉かな	紅葉	植物
683	明治29年	秋の部	村の子が紅葉釣り寄す小川哉	紅葉	植物
684	明治29年	秋の部	据風呂や紅葉こぼるゝ蓋の上	紅葉	植物
685	明治29年	秋の部	紅葉葉のひらり / \ と舞落ちぬ	紅葉	植物
686	明治29年	秋の部	飯鍋に紅葉ちり込む山家かな	紅葉	植物
687	明治29年	秋の部	据風呂を出れば紅葉飛つきぬ	紅葉	植物
688	明治29年	秋の部	子は紅葉さげ母は野茶屋に病めりける	紅葉	植物
689	明治29年	秋の部	紅葉焼いて爛すべく酒を賣る女	紅葉	植物
690	明治29年	秋の部	鉄漿くろト\紅葉が茶屋の女笑ふ	紅葉	植物
692	明治29年	秋の部	両三軒紅葉の中の日の御旗	紅葉	植物
693	明治29年	秋の部	ところト\運動會や紅葉山	紅葉	植物
694	明治29年	秋の部	夕晴や紅葉振り / \ 馬士唄ふ	紅葉	植物
695	明治29年	秋の部	何茸か紅葉かぶりて居たりける	紅葉	植物
696	明治29年	秋の部	山段々紅葉しぬべく見えにける	紅葉	植物
697	明治29年	秋の部	ところ / \ 紅葉しぬべく病める葛	紅葉	植物
698	明治29年	秋の部	葛の葉の黄なるもあり紅なるもあり	葛紅葉	植物
699	明治29年	秋の部	川中の岩に何の木か紅葉す	紅葉	植物
700	明治29年	秋の部	大樹せず小樹尽く紅葉す	紅葉	植物
701	明治29年	秋の部	手を拍て笑へば紅葉こぼれける	紅葉	植物
703	明治29年	秋の部	此の別れ紅葉拵て微笑すべく	紅葉	植物
704	明治29年	秋の部	覚束な剋に臨める葛紅葉	葛紅葉	植物
705	明治29年	秋の部	戀なるべく紅葉の蔭に二人ゐる	紅葉	植物
706	明治29年	秋の部	屋根見えつ紅葉の村に犬吠ゆる	紅葉	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
707	明治29年	秋の部	日は照りつ紅葉の山に雨がふる	紅葉	植物
708	明治29年	秋の部	炭に焼かんと紅葉伐仆す谷間哉	紅葉	植物
709	明治29年	秋の部	蔦の葉の薄紅に恥らへり	蔦紅葉	植物
710	明治29年	秋の部	紅葉の茶屋覗けバ女病みてあり	紅葉	植物
711	明治29年	秋の部	一樹の紅葉爰に甘酒ありと有り	紅葉	植物
712	明治29年	秋の部	炭焼の娘紅葉と申す艶なり	紅葉	植物
713	明治29年	秋の部	我宿は俎板も鍋も紅葉哉	紅葉	植物
714	明治29年	秋の部	さら / \ と紅葉すべり落つ鬼瓦	紅葉	植物
716	明治29年	秋の部	我戀は渋柿の渋の渋からず	柿	植物
717	明治29年	秋の部	柳散る / \ 驛馬繫がれて物をくふ	柳散る	植物
718	明治29年	秋の部	渋柿の二ツ三ツ残る梢かな	柿	植物
719	明治29年	秋の部	渋柿の枝裂けなんとしたるを支へてあり	柿	植物
720	明治29年	秋の部	古家の柳散り / \ 日が暮れる	柳散る	植物
721	明治29年	秋の部	仙台の城下の外づれ末枯れぬ	末枯	植物
722	明治29年	秋の部	穢多村の渋柿見ゆる野中哉	柿	植物
723	明治29年	秋の部	旅人宿の灯火暗く散る柳	柳散る	植物
724	明治29年	秋の部	旗立てゝ徴兵迎ふ村の秋	秋	時候
725	明治29年	秋の部	渋柿に階子かけたる小家かな	柿	植物
727	明治29年	秋の部	草鞋買ふべく腰に錢あり暮の秋	暮の秋	時候
728	明治29年	秋の部	出水して粟の穂先を小舟漕ぐ	粟	植物
730	明治29年	秋の部	いざ起てよ萩の中道二人行かむ	萩	植物
731	明治29年	秋の部	別れても地として渋柿なからんや	柿	植物
732	明治29年	秋の部	宮城野の萩ある處まで送れ	萩	植物
733	明治29年	秋の部	一ツ宛渋柿喰ふて別れうぞ	柿	植物
735	明治29年	秋の部	初秋の乾坤朗らかに軒せよ	初秋	時候
736	明治29年	秋の部	此秋は三千の発句物すべし	秋	時候
738	明治29年	秋の部	つく / \ と踊見て居る男かな	踊	人事
740	明治29年	秋の部	秋風の大地震ふて已まざりき	秋の風	天文
741	明治29年	秋の部	がっくりと大地裂けたり秋の風	秋の風	天文
742	明治29年	秋の部	早稲の香や出羽街道は鶏の声	稲	植物
743	明治29年	秋の部	地震やむで日暮れて秋の雨がふる	秋の雨	天文
744	明治29年	秋の部	秋の雨親なき子らの泣いて行く	秋の雨	天文
745	明治29年	秋の部	二三人家失ひて秋の雨	秋の雨	天文
746	明治29年	秋の部	鶏も鳴かず地震の跡の秋の雨	秋の雨	天文
747	明治29年	秋の部	秋なれば雨なれば病みぬればこそ	秋	時候
748	明治29年	秋の部	秋雨のいつこに濡れておはすらん	秋の雨	天文
749	明治29年	秋の部	据風呂に秋の風もる庇かな	秋の風	天文
750	明治29年	秋の部	夜は長しらんぷの笠に物をかく	夜長	時候
751	明治29年	秋の部	秋の夜の夫婦いさかふ木賃かな	秋の夜	時候
752	明治29年	秋の部	芒わけて女出てたり雨の中	芒	植物
753	明治29年	秋の部	荒瀧の霧を裂くこと五百尺	霧	天文
754	明治29年	秋の部	嘯けば大澤の霧渦きぬ	霧	天文
755	明治29年	秋の部	女郎花踏みにじられて哀れなり	女郎花	植物
756	明治29年	秋の部	雨に行けばもたれんとすなり女郎花	女郎花	植物
757	明治29年	秋の部	そばふるや秋の蝶々戀もなし	秋の蝶	動物
758	明治29年	秋の部	山裂けて大木震ふ秋の風	秋の風	天文
759	明治29年	秋の部	日は西へ詮方もなし秋の蝶	秋の蝶	動物
760	明治29年	秋の部	名月や妻を娶らば正に今宵	名月	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
761	明治29年	秋の部	風やむで秋の奥州日は暮れぬ	秋	時候
762	明治29年	秋の部	ひや / \ と洪水の跡月が照る	月	天文
763	明治29年	秋の部	西の方安達太郎山霧を抜く	霧	天文
764	明治29年	秋の部	利根の濁流大霧割いて奔到す	霧	天文
766	明治29年	秋の部	夜は寒し水を隔てゝ異人唄ふ	夜寒	時候
767	明治29年	秋の部	狂人の頻りに鳴子鳴らしけり	鳴子	人事
768	明治29年	秋の部	戯れに鳴子を鳴らす異人かな	鳴子	人事
769	明治29年	秋の部	萩の花少しこぼれて三日の月	萩	植物
770	明治29年	秋の部	夜を寒み薫物くゆる廣間哉	夜寒	時候
772	明治29年	秋の部	一盆の芋皆喰ふてしまひけり	芋	植物
773	明治29年	秋の部	君見よや此水切て落さんず	落し水	地理
774	明治29年	秋の部	虫鳴くや少将戀の細道を	蟲	動物
775	明治29年	秋の部	門前を宗祇が通る芋がある	芋	植物
777	明治29年	秋の部	丹を煉る鍋かけてあり桐一葉	桐一葉	植物
778	明治29年	秋の部	小坊主が名月の鐘つかんとゆく	名月	天文
780	明治29年	秋の部	力なや地を這ふ蔦の薄紅葉	薄紅葉	植物
781	明治29年	秋の部	一面に小草の花の夕月夜	夕月夜	天文
782	明治29年	秋の部	江北へ鴉が飛んで秋暮るゝ	暮の秋	時候
783	明治29年	秋の部	秋風の猪病んで死なんとす	秋の風	天文
785	明治29年	秋の部	右左十歩ばかりの花野かな	花野	地理
786	明治29年	秋の部	鐵燈籠朽ちて虫なく夜毎かな	蟲	動物
787	明治29年	秋の部	三夜網す偶々得たる鱸かな	鱸	動物
788	明治29年	秋の部	重陽の酒壺仆す何奴ぞ	重陽	人事
789	明治29年	秋の部	稻妻や金掘る山の恐ろしき	稻妻	天文
791	明治29年	秋の部	一山の月明かに鐘黒く	月	天文
792	明治29年	秋の部	深淵にひら / \ と秋の蝶黄なり	秋の蝶	動物
793	明治29年	秋の部	未枯や黒う固まる馬の糞	未枯	植物
794	明治29年	秋の部	頬白き人の寒がるあしたかな	朝寒	時候
795	明治29年	秋の部	明星や白菊細く丈け高く	菊	植物
796	明治29年	秋の部	白露の草皆二寸ばかりなる	露	天文
797	明治29年	秋の部	白い旗赤い旗なんど里の秋	秋	時候
798	明治29年	秋の部	葉ちいさく紅る薄く哀れなり	薄紅葉	植物
799	明治29年	秋の部	白雲鶏犬秋長へに老いずもあれ	秋	時候
800	明治29年	秋の部	岩鼻や秋風白き九十九里	秋の風	天文
802	明治29年	秋の部	普請濟むで雨となりけり鶏頭花	鶏頭	植物
803	明治29年	秋の部	鶏頭のこけつ仆れつ藏普請	鶏頭	植物
804	明治29年	秋の部	塵塚や月に鶏頭丈け八尺	鶏頭	植物
805	明治29年	秋の部	塵塚や鶏頭やせてなほ赤し	鶏頭	植物
806	明治29年	秋の部	月暈あり鶏頭の影化けぬべく	鶏頭	植物
807	明治29年	秋の部	門口や左何やら右鶏頭	鶏頭	植物
808	明治29年	秋の部	ぱっさりと窓にもうし葉鶏頭	雁來紅	植物
809	明治29年	秋の部	鶏頭を逆さまに吊す小店かな	鶏頭	植物
810	明治29年	秋の部	淺ましや鶏頭の葉のむしられて	鶏頭	植物
811	明治29年	秋の部	雨つれ / \ 鶏頭十句成らんとす	鶏頭	植物
813	明治29年	秋の部	村会や台湾の稻二タ作す	稻	植物
814	明治29年	秋の部	村会の門口に菊なんどあり	菊	植物
815	明治29年	秋の部	村会や古学校のやゝ寒き	やや寒	時候
816	明治29年	秋の部	村会や渋柿落る窓の外	柿	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
817	明治29年	秋の部	野分して村会議場仆れつべく	野分	天文
818	明治29年	秋の部	芋引の村会覗く時計かな	芋	植物
819	明治29年	秋の部	村会のがらす窓破れて稲の花	稲の花	植物
820	明治29年	秋の部	村会や役人にすゝむ芋一盆	芋	植物
821	明治29年	秋の部	村会や二三人よりて秋のあめ	秋の雨	天文
822	明治29年	秋の部	末枯や村会議員皆袴	末枯	植物
823	明治29年	秋の部	重陽や偶村会して終に酒	重陽	人事
825	明治29年	秋の部	調練の輜重つゞきぬ秋の村	秋	時候
826	明治29年	秋の部	野茶屋あり吊したる柿の尻黒み	柿	植物
827	明治29年	秋の部	びいどろ欠け散らばりつ末枯るゝ	末枯	植物
828	明治29年	秋の部	柿を隣り空瓶の棚傾きつ	柿	植物
829	明治29年	秋の部	店先や空瓶ころがり秋の蠅	秋の蠅	動物
830	明治29年	秋の部	渋柿や屋根葺換ふる煤くろく	柿	植物
831	明治29年	秋の部	いたいけに紅葉しかゝる轍かな	紅葉	植物
832	明治29年	秋の部	百舌鳥なくや草の実むしる乞食の子	鴟	動物
833	明治29年	秋の部	蓮の実飛んで大に笑ふ男あり	蓮實飛ぶ	植物
834	明治29年	秋の部	刈稻の中に飯喰ふ男かな	稻刈	人事
835	明治29年	秋の部	紅葉せよ我妻酒をかもすべく	紅葉	植物
836	明治29年	秋の部	七八人赤裸々なるが鰯引く	鰯引	人事
837	明治29年	秋の部	雁が音や燕王賢を招くときく	雁	動物
838	明治29年	秋の部	帯にはさむ栗こぼしたる娘かな	栗	植物
839	明治29年	秋の部	水とん / \ 鶴鴿の尾たらし / \	鶴鴿	動物
840	明治29年	秋の部	花白く莖赤き之をなんそば	蕎麥花	植物
841	明治29年	秋の部	鯉も出でつゐもりも出でつ秋の虹	秋の虹	天文
842	明治29年	秋の部	句集あみて栗飯と題せんはいかに	栗飯	人事
843	明治29年	秋の部	奉納の手拭吊るす紅葉かな	紅葉	植物
844	明治29年	秋の部	末枯や赤く彫りたる不動尊	末枯	植物
845	明治29年	秋の部	末枯の藪も畑も夕日かな	末枯	植物
846	明治29年	秋の部	薄暗し知らず木の実か草の実か	雑	雑
847	明治29年	秋の部	石壇や登りも果てず木の実落つ	木の實	植物
848	明治29年	秋の部	晝棟さびて老樹更に紅葉せず	紅葉	植物
849	明治29年	秋の部	地にあれば末枯るゝなり比翼塚	末枯	植物
850	明治29年	秋の部	百舌鳥なくや女大勢不動に詣づ	鴟	動物
851	明治29年	秋の部	末枯れて不動の臍の細る思ひ	末枯	植物
853	明治29年	秋の部	願はくは新酒の酔の三十里	新酒	人事
854	明治29年	秋の部	毒茸は喰はず遙かに酒許せ	茸	植物
855	明治29年	秋の部	其芒なければ淋しかるべきか	芒	植物
856	明治29年	秋の部	其芒なければ淋しかるべきか	芒	植物
857	明治29年	秋の部	少年の紅葉に狂すときかば我	紅葉	植物
858	明治29年	秋の部	少年の紅葉に狂すときかば我	紅葉	植物
859	明治29年	秋の部	渋柿を喰ふてしまへば帰るなり	柿	植物
860	明治29年	秋の部	渋柿を喰ふてしまへば帰るなり	柿	植物
861	明治29年	秋の部	君来らず栗飯少し残りける	栗飯	人事
863	明治29年	秋の部	去って栗留って酒いづれ秋	秋	時候
865	明治29年	秋の部	路ばたの紅葉ゆすらば出でゝ見よ	紅葉	植物
866	明治29年	秋の部	もみぢはの二片三片枝にあり	紅葉	植物
867	明治29年	秋の部	洪水や月を浸して押寄する	月	天文
868	明治29年	秋の部	二三人頬冠りして月に行く	月	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
869	明治29年	秋の部	明月や檜棒廻はず法師原	名月	天文
10614	明治29年	秋の部	野分吹く矢留の城の草長し	野分	天文
10615	明治29年	秋の部	稲の香の吹き廻はるなり大広間	稲の香	植物
10616	明治29年	秋の部	澄む山や月地震の後の腥	月	天文
10617	明治29年	秋の部	風ひや / \ 大地裂けたるあはひ哉	冷ゆ	時候
10618	明治29年	秋の部	谷暗し昼の稲妻割りて入る	稲妻	天文
10619	明治29年	秋の部	稲妻や地震の跡の仮屋々々	稲妻	天文
10620	明治29年	秋の部	稲妻の顔見合はする人もなし	稲妻	天文
10621	明治29年	秋の部	秋さめの何処を濡れて迎るらむ	秋雨	天文
10622	明治29年	秋の部	稲妻や大きな家の仆れてある	稲妻	天文
10623	明治29年	秋の部	稲妻の中夜哭声四方に起る	稲妻	天文
10624	明治29年	秋の部	秋雨や中夜哭声四野に満つ	秋雨	天文
10625	明治29年	秋の部	稲妻の奥州山河五十四郡	稲妻	天文
10626	明治29年	秋の部	やむ人の枕並べて秋の風	秋の風	天文
10627	明治29年	秋の部	仮小屋の秋さめに病む女の子	秋雨	天文
10628	明治29年	秋の部	朝寒の松原通るひとりかな	朝寒	時候
10629	明治29年	秋の部	隧道をくぐれば蕎麦の花三(寸)カ	蕎麦の花	植物
10630	明治29年	秋の部	西の方蕎麦の花咲く里一つ	蕎麦の花	植物
10631	明治29年	秋の部	そこのけよあゝら長安一片の月	月	天文
10632	明治29年	秋の部	名月や背戸の畑に風呂たい(たり)カ	名月	天文
10633	明治29年	秋の部	朝顔の蔓細く花小さなる	朝顔	植物
10634	明治29年	秋の部	名月や土蔵の蔭は薄暗く	名月	天文
10635	明治29年	秋の部	名月や五升樽提げて其角く(る)カ	名月	天文
10636	明治29年	秋の部	名月の焼芋かぢり / \ ゆく	名月	天文
10637	明治29年	秋の部	二三人名月の門を出でゝゆく	名月	天文
10639	明治29年	秋の部	三日月の西方十万憶土哉	三日月	天文
10640	明治29年	秋の部	名月や傾城たんねんと薫物(す)カ	名月	天文
10641	明治29年	秋の部	蚯蚓の尾を切るなよと申しける	蚯蚓	動物
10642	明治29年	秋の部	踊子の戻ればもとの禅の寺	踊り子	人事
10643	明治29年	秋の部	秋風や草鞋買ふべき腰の銭	秋風	天文
10644	明治29年	秋の部	紅葉手にして村女頻りに恋を歌ふ	紅葉	植物
10645	明治29年	秋の部	人なども紅葉の陰にやすらへり	紅葉	植物
10646	明治29年	秋の部	嵐して紅葉散り込む谷の水	紅葉	植物
10647	明治29年	秋の部	何と云ふか城下のはづれ末枯れし	末枯	植物
10648	明治29年	秋の部	谷間や紅葉舞上る夕あらし	紅葉	植物
10649	明治29年	秋の部	君が代は渋柿ならぬ里もなし	渋柿	植物
10651	明治29年	秋の部	笹原を稲妻切てまはりける	稲妻	天文
10652	明治29年	秋の部	茸狩を御息所のいなみ玉ふ	茸狩	人事
10654	明治29年	秋の部	夜に入れば蠟燭立てゝ菊見哉	菊見	人事
10655	明治29年	秋の部	橋杭に紅葉の枝の流れよる	紅葉	植物
10612	明治29年	秋の部	子規おらがとぶろく呑みに来よ	どぶろく	人事
10638	明治29年	秋の部	舟歌は聞えずなりて夜さむし	夜さむし	天文
10653	明治29年	秋の部	馬を馳す八州の野は末枯れぬ	末枯	植物
1373	明治30年	秋の部	癩病の小屋を出て薬煮る月夜かな	月	天文
1374	明治30年	秋の部	病むちごの月にも芋にもむづかりぬ	雑	雑
1375	明治30年	秋の部	病みやせてひとり灯籠の下に立つ	燈籠	人事
1376	明治30年	秋の部	客にして病み再び秋に逢へる悲し	秋	時候
1377	明治30年	秋の部	鱸さげて漁師が娘医師を訪ふ	鱸	動物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1378	明治30年	秋の部	病やゝ怠りつ氣秋に入る	秋	時候
1379	明治30年	秋の部	立秋を東隣の病者詩を吟ず	立秋	時候
1380	明治30年	秋の部	七夕に病んで物かく女かな	七夕	人事
1381	明治30年	秋の部	病を力め魂祭るべく灯ともしつ	魂祭	人事
1382	明治30年	秋の部	創をつゝむで稻妻に立つ男かな	稻妻	天文
1383	明治30年	秋の部	稻妻に病兵多き野陣かな	稻妻	天文
1384	明治30年	秋の部	落武者のちんばひとりゆく野分かな	野分	天文
1385	明治30年	秋の部	小角力の薬煮てゐる旅籠かな	角力	人事
1386	明治30年	秋の部	朝顔に薬を煮る男鰥にして迂	朝顔	植物
1387	明治30年	秋の部	夕暮を病める角力の馬で来る	角力	人事
1388	明治30年	秋の部	病院の庭に虫なく寐覚かな	蟲	動物
1389	明治30年	秋の部	いとゞ病める身にしむや起て内に入る	身に入む	時候
1390	明治30年	秋の部	医者 of 興木槿咲いたる門に入る	木槿	植物
1391	明治30年	秋の部	縁側に薬鍋を持出でつ月を見る	月	天文
1392	明治30年	秋の部	雁が音の去年は越路に病みたりし	雁	動物
1393	明治30年	秋の部	門前を医者 of 興いそぐ秋の暮	秋の暮	時候
1394	明治30年	秋の部	病めるにかあらん案山子が倒れゐる	案山子	人事
1395	明治30年	秋の部	医者 of 門に順礼の子や秋の暮	秋の暮	時候
1396	明治30年	秋の部	君が病に鱸鮮けきなどがよし	鱸	動物
1397	明治30年	秋の部	只ひとり鳴立澤の湯治かな	鳴	動物
1398	明治30年	秋の部	枕上の薬瓶を引寄す夜半の秋	秋の夜	時候
1399	明治30年	秋の部	疫をやむ村に砧の音もなし	砧	人事
1400	明治30年	秋の部	明月の土手をいざりの車行く	名月	天文
1401	明治30年	秋の部	病む人の菊に目さむる廣間かな	菊	植物
1402	明治30年	秋の部	腫物の顔仰向けて月見かな	月見	人事
1403	明治30年	秋の部	眼を病みつ童して白菊手折らしむ	菊	植物
1404	明治30年	秋の部	白髪にして古法を講ず菊の花	菊	植物
1405	明治30年	秋の部	醫者の庭に殊に菊咲く赤き菊	菊	植物
1406	明治30年	秋の部	菊の露に丹を煉るべく菊畑	菊	植物
1407	明治30年	秋の部	薬掘の月夜に帰る梁甫吟	薬掘	人事
1408	明治30年	秋の部	看病やひとり夜寒の枕元	夜寒	時候
1409	明治30年	秋の部	長き夜を暁方に誕生す	夜長	時候
1410	明治30年	秋の部	貧道士の病を咒ふ夜寒かな	夜寒	時候
1411	明治30年	秋の部	病む乳児の銀杏に笑むぞ嬉しき	銀杏	植物
1412	明治30年	秋の部	病める汝に唐辛を與へんか	唐辛子	植物
1413	明治30年	秋の部	貧なる医の松茸を狩りに出でし	松茸	植物
1414	明治30年	秋の部	足駄穿いて月夜に帰る按摩かな	月	天文
1415	明治30年	秋の部	疝氣ある人の先づ吟じ帰る月見かな	月見	人事
1416	明治30年	秋の部	病を忘れ汝と酌み合ふ新酒かな	新酒	人事
1417	明治30年	秋の部	縁端に松茸を干す医者が妻	松茸	植物
1418	明治30年	秋の部	薬掘て里に出でたる道士かな	薬掘	人事
1419	明治30年	秋の部	多病にして白菊多く作りにし	菊	植物
1420	明治30年	秋の部	村に住んで松茸の友に医者を得つ	松茸	植物
1421	明治30年	秋の部	或時は松露或時は茯苓を突く	雜	雜
1422	明治30年	秋の部	安産や秋の夜中をどよめきぬ	秋の夜	時候
1423	明治30年	秋の部	秦淮の残月夢に似たるかな	有明月	天文
1425	明治30年	秋の部	滝涸れつ天の川の斜なり	天の川	天文
1426	明治30年	秋の部	黒雲の天の川を絶つ夜半かな	天の川	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1427	明治30年	秋の部	谷底に仰いで天の川を見る	天の川	天文
1428	明治30年	秋の部	遠の灯や暁方の天の川	天の川	天文
1429	明治30年	秋の部	壇上や銀河に對し香を炷く	天の川	天文
1430	明治30年	秋の部	逢はぬ戀鶏鳴きあけの露深み	露	天文
1431	明治30年	秋の部	長き夜を動かざる佛師が影法師	夜長	時候
1432	明治30年	秋の部	艸むらや偶々きちかうの白き咲く	桔梗	植物
1433	明治30年	秋の部	異人館に夜な / \ 踊る音すなり	踊	人事
1434	明治30年	秋の部	朝兒に半月白き戸口かな	朝顔	植物
1435	明治30年	秋の部	冷かや汀に立てば星が飛ぶ	流星	天文
1436	明治30年	秋の部	和蘭の波止場で秋の風に逢ふ	秋の風	天文
1438	明治30年	秋の部	行く / \ や松虫吟じ鈴虫和す	雑	雑
1439	明治30年	秋の部	薬掘て日暮に帰る人あやし	薬掘	人事
1440	明治30年	秋の部	虫賣と連立て終に市に入る	蟲賣	人事
1441	明治30年	秋の部	重箱の埃掃ひつ今朝の秋	今朝の秋	時候
1442	明治30年	秋の部	店を過ぎり南瓜の不具なるを憎む	南瓜	植物
1443	明治30年	秋の部	明窓淨几朝兒の巻をかゝむかな	朝顔	植物
1445	明治30年	秋の部	妾宅に小さき灯籠つるしたり	燈籠	人事
1446	明治30年	秋の部	灯籠に芒かぶさる小家かな	燈籠	人事
1447	明治30年	秋の部	川を隔て暁方の高灯籠	燈籠	人事
1448	明治30年	秋の部	日くれて灯籠の町に入りぬ	燈籠	人事
1449	明治30年	秋の部	兩岸の灯籠を見て下りけり	燈籠	人事
1450	明治30年	秋の部	家毎に赤き灯籠吊したり	燈籠	人事
1451	明治30年	秋の部	沈香亭に灯籠つるしひとりゐる	燈籠	人事
1452	明治30年	秋の部	草家二軒中に灯籠の高き立つ	燈籠	人事
1453	明治30年	秋の部	川風に灯籠消えてしまひけり	燈籠	人事
1454	明治30年	秋の部	清人の亭に灯籠つるしたり	燈籠	人事
1455	明治30年	秋の部	いくさあり灯籠つるす家もなし	燈籠	人事
1456	明治30年	秋の部	揚屋町の灯籠見れば美しくしき	燈籠	人事
1457	明治30年	秋の部	斥候の高灯籠を打見やる	燈籠	人事
1459	明治30年	秋の部	くさいろ / \ 秋いろ / \ の花咲きぬ	秋	時候
1461	明治30年	秋の部	一人ゆけば小萩が野辺を雨がふる	萩	植物
1462	明治30年	秋の部	暮に出でゝ萩咲けるあたり人戀し	萩	植物
1463	明治30年	秋の部	男萩丈高く暁に露けしや	萩	植物
1464	明治30年	秋の部	女萩とかや細やかにして花咲ける	萩	植物
1465	明治30年	秋の部	萩寺の萩盛りなり二三日	萩	植物
1466	明治30年	秋の部	馬に喰はれ少し花咲く萩の株	萩	植物
1467	明治30年	秋の部	萩長くして灯籠に達すべく	萩	植物
1468	明治30年	秋の部	寺に寐て五更に萩の露の音	萩	植物
1469	明治30年	秋の部	雨の中を一荷尽く萩の花	萩	植物
1470	明治30年	秋の部	花まばらに丈徒らに長き萩	萩	植物
1472	明治30年	秋の部	兄弟が一斗の粟を搗て居る	粟	植物
1473	明治30年	秋の部	雲高み山畑の粟黄に熟す	粟	植物
1474	明治30年	秋の部	川に沿ひ夕日が岡の粟黄なり	粟	植物
1475	明治30年	秋の部	はら / \ と露こぼす穂や粟月夜	粟	植物
1476	明治30年	秋の部	粟の中に抜け出でし稗を風が吹く	粟	植物
1478	明治30年	秋の部	道にして大霧に咽び上り得ず	霧	天文
1479	明治30年	秋の部	どう / \ と狭霧の中の水車	霧	天文
1480	明治30年	秋の部	浦風の狭霧を吹くや沖の方	霧	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1481	明治30年	秋の部	暁や霧が小嶋に灯の残る	霧	天文
1482	明治30年	秋の部	龍蟄す窟を霧の渦きぬ	霧	天文
1483	明治30年	秋の部	とある村に帰り後れし燕とぶ	秋燕	動物
1484	明治30年	秋の部	初汐の房州遠み船かぶり	初汐	地理
1485	明治30年	秋の部	日もすがらつく / \ ほうしつくほうし	つくつく法師	動物
1486	明治30年	秋の部	都より残る暑さの便りかな	残暑	時候
1488	明治30年	秋の部	狡兎死して汝は萩を枕かな	萩	植物
1489	明治30年	秋の部	鶏の子の野分に少し飛ばされし	野分	天文
1490	明治30年	秋の部	白い萩と細い芒の株とあり	雑	雑
1491	明治30年	秋の部	風雲や唐もろこしの丈高く	唐黍	植物
1492	明治30年	秋の部	瘡をやみ居れば頻りに稲妻す	稲妻	天文
1493	明治30年	秋の部	瘡落ちて縁より月をさし入れぬ	月	天文
1494	明治30年	秋の部	今朝はしも秋海棠に歌よみし	秋海棠	植物
1495	明治30年	秋の部	晴れし夜を西の方屢々稲妻す	稲妻	天文
1496	明治30年	秋の部	野の中に角力場立てし小村哉	角力	人事
1497	明治30年	秋の部	裏町を角力の太鼓通りける	角力	人事
1498	明治30年	秋の部	夕暮を角力大勢町に入る	角力	人事
1499	明治30年	秋の部	虫どもの小萩が下に戀すかな	萩	植物
1500	明治30年	秋の部	女郎花折るべくとして物思ふ	女郎花	植物
1501	明治30年	秋の部	芒わけて小高き処に出でたり	芒	植物
1502	明治30年	秋の部	稲妻の馬上八幡を遙拜す	稲妻	天文
1503	明治30年	秋の部	小提灯に野分しば / \ 吹きつける	野分	天文
1504	明治30年	秋の部	海岸や野分の雲を吹飛ばす	野分	天文
1505	明治30年	秋の部	秋風の小夜にさら / \ と音すなり	秋の風	天文
1506	明治30年	秋の部	風にひびく玉川の里の砧かな	砧	人事
1507	明治30年	秋の部	砧やみて玉川に浴ふ村月夜	砧	人事
1508	明治30年	秋の部	とある村の砧ひとしく打出しぬ	砧	人事
1509	明治30年	秋の部	夜道して砧の里を打過ぎぬ	砧	人事
1510	明治30年	秋の部	沙魚釣の沙魚釣上る頻りなり	鯊釣	人事
1511	明治30年	秋の部	妻の留守に鱸を得たる詩人かな	鱸	動物
1512	明治30年	秋の部	あるが中に巨口細鱗なる鱸	鱸	動物
1513	明治30年	秋の部	無住寺や後ろは蓼の花盛り	蓼の花	植物
1514	明治30年	秋の部	綿摘や夕日の畑を散らばりつ	綿取	人事
1515	明治30年	秋の部	暮を急ぎ野菊のさかり捨てがたき	野菊	植物
1516	明治30年	秋の部	月夜な / \ 背戸の畑の蕎麦の花	蕎麦花	植物
1517	明治30年	秋の部	淋しうて出れば案山子が立てゐる	案山子	人事
1518	明治30年	秋の部	五六人根岸に會す野分の日	野分	天文
1520	明治30年	秋の部	萩芒うなづき合ふて別れかな	雑	雑
1521	明治30年	秋の部	君が立つ午の刻より野分かな	野分	天文
1522	明治30年	秋の部	秋風を吾子下るなり最上川	秋の風	天文
1523	明治30年	秋の部	薄暗くふくべ三ツ四ツさがりける	瓢	植物
1524	明治30年	秋の部	虫が鳴く神泉苑の月夜かな	月	天文
1525	明治30年	秋の部	垣つゞき根岸の里の木槿かな	木槿	植物
1526	明治30年	秋の部	殊更に木槿の一木栽ゑてあり	木槿	植物
1527	明治30年	秋の部	葛の葉の端山に起る野分かな	野分	天文
1528	明治30年	秋の部	門に出でつしばしゑむ村花火	花火	人事
1529	明治30年	秋の部	二階より花火眺めやる旅人かな	花火	人事
1530	明治30年	秋の部	中島に花火あげたる岸暗み	花火	人事

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1531	明治30年	秋の部	池の中に小舟物して花火かな	花火	人事
1532	明治30年	秋の部	人の子や我子に椎の實を手向け	椎の實	植物
1533	明治30年	秋の部	鶏の尾の野分に逆立事しばし	野分	天文
1534	明治30年	秋の部	犬吹かれ鶏鳴き出す秋の風	秋の風	天文
1535	明治30年	秋の部	葛の葉の日午にして風白き	葛	植物
1536	明治30年	秋の部	會散じひとり詩作る夜の長き	夜長	時候
1537	明治30年	秋の部	新酒賣る家の女の見も馴れず	新酒	人事
1538	明治30年	秋の部	野の店に新酒の杉葉青きかな	新酒	人事
1539	明治30年	秋の部	新酒の鬼殺しと名づくかんばしき	新酒	人事
1540	明治30年	秋の部	野の店に残る暑さの蠅群れつ	残暑	時候
1541	明治30年	秋の部	蟬どもの残る暑さを啼き出しぬ	残暑	時候
1542	明治30年	秋の部	草原や残る暑さの蛇を見る	残暑	時候
1543	明治30年	秋の部	溜水の涸れなんとする残暑かな	残暑	時候
1544	明治30年	秋の部	物狂はしうあるは芒の中に立つ	芒	植物
1545	明治30年	秋の部	岩多く短き芒ばかりかな	芒	植物
1546	明治30年	秋の部	芒喰ひ尽して牧場に馬もなし	芒	植物
1547	明治30年	秋の部	短くてから芒と申す鉢にあり	芒	植物
1548	明治30年	秋の部	川中の岩に夕日す花すゝき	芒	植物
1549	明治30年	秋の部	路傍に芒刈るなり姉妹	萱刈	人事
1550	明治30年	秋の部	野社の右も左も芒かな	芒	植物
1551	明治30年	秋の部	方三尺芒が岡の祠かな	芒	植物
1552	明治30年	秋の部	萩に泣き芒に怨じ日たゝ戀	雑	雑
1553	明治30年	秋の部	洪水を一家避難す栗畑	栗	植物
1554	明治30年	秋の部	洪水を月円なるがあらはれぬ	月	天文
1555	明治30年	秋の部	避病院に秋のてふ / \ 青きとぶ	秋の蝶	動物
1556	明治30年	秋の部	巽より野分起り乾に去る	野分	天文
1557	明治30年	秋の部	名月や何やら欲しき我が思	名月	天文
1558	明治30年	秋の部	芋の葉に灯火うつる戸口かな	芋	植物
1559	明治30年	秋の部	秋風の帝闕さかんなるを見る	秋の風	天文
1560	明治30年	秋の部	南殿や制に應じて月を賦す	月	天文
1561	明治30年	秋の部	油も買はずしばらく月と相對す	月	天文
1562	明治30年	秋の部	妹黄菊姉白菊をかざしかな	菊	植物
1563	明治30年	秋の部	一輪の白菊咲きぬ貞女塚	菊	植物
1564	明治30年	秋の部	蛤を屑しとせざる雀かな	雀蛤となる	動物
1565	明治30年	秋の部	或夜案山子夢に入つて怨ずらく	案山子	人事
1566	明治30年	秋の部	田の案山子畑の案山子を呼ばんとす	案山子	人事
1567	明治30年	秋の部	風さはがしく案山子割據す山畑	案山子	人事
1568	明治30年	秋の部	狂かあらぬか案山子を脇はさんで奔る	案山子	人事
1569	明治30年	秋の部	志蛤にあるらしき雀かな	雀蛤となる	動物
1570	明治30年	秋の部	白菊の一枝を與へ去らしめつ	菊	植物
1571	明治30年	秋の部	謁見やたま / \ 菊の間に置酒す	菊	植物
1572	明治30年	秋の部	山路深く菊の扉を見得たり	菊	植物
1573	明治30年	秋の部	道に立て異人指す案山子かな	案山子	人事
1574	明治30年	秋の部	蛤を思ひとまりし雀かな	雀蛤となる	動物
1575	明治30年	秋の部	三ツ栗を一ツ / \ の別かな	栗	植物
1576	明治30年	秋の部	栗のいが仰向いて笑ふ梢かな	栗	植物
1577	明治30年	秋の部	二ツ栗や一つを送るいがの中	栗	植物
1578	明治30年	秋の部	錦心繡腸にして柘榴子と号す	柘榴	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1579	明治30年	秋の部	落水の一處に落合ふ濁りかな	落水	地理
1580	明治30年	秋の部	三ツ栗の只一ツ残る思ひかな	栗	植物
1581	明治30年	秋の部	古の箕子の國行けば鷓鴣の啼く	鷓鴣	動物
1582	明治30年	秋の部	車遠く撰みに洩れし虫の鳴く	蟲	動物
1583	明治30年	秋の部	夕風やさいかちの實を吹き鳴らす	皂角	植物
1584	明治30年	秋の部	佛刻み菊に親む一間かな	菊	植物
1585	明治30年	秋の部	雨の如く露おつるなり森の中	露	天文
1586	明治30年	秋の部	露乾かず野に雲低れて草長く	露	天文
1587	明治30年	秋の部	大礮の露にぬれたる横はる	露	天文
1588	明治30年	秋の部	虫の音の露とやなりし夜明方	露	天文
1589	明治30年	秋の部	庭前に露氣紛々と下るなり	露	天文
1590	明治30年	秋の部	鶏の子の晨に出でゝ露をふむ	露	天文
1591	明治30年	秋の部	前栽や紫の露あけの露	露	天文
1592	明治30年	秋の部	朝露の乾くべくもあらぬ社頭哉	露	天文
1593	明治30年	秋の部	大旗の露打拂ふ嵐かな	露	天文
1594	明治30年	秋の部	鉢植に露置きたるを取入れつ	露	天文
1595	明治30年	秋の部	砂原の露にぬれしを裸足かな	露	天文
1596	明治30年	秋の部	落鮎の築にも入らぬ行くへかな	鯖鮎	動物
1598	明治30年	秋の部	美しき菊の御苑の朝日かな	菊	植物
1599	明治30年	秋の部	かしこしや袞龍の御袖菊の花	菊	植物
1600	明治30年	秋の部	菊の間に萬國の諸侯賀をまをす	菊	植物
1601	明治30年	秋の部	君が代は東籬の菊の雨露多し	菊	植物
1602	明治30年	秋の部	卓上や菊の杯菊の酒	菊	植物
1603	明治30年	秋の部	頌に曰く聖代只今菊の花	菊	植物
1604	明治30年	秋の部	夙に起きて菊を東籬の露に採る	菊	植物
1605	明治30年	秋の部	菊挿すべく古瓶を得つ埃多き	菊	植物
1606	明治30年	秋の部	白き瘦せぬ小鍛冶が庭の菊の花	菊	植物
1607	明治30年	秋の部	東海に旭出でつ城の紅葉かな	紅葉	植物
1608	明治30年	秋の部	木の實黄に草の實紅く野に旭出づ	雑	雑
1609	明治30年	秋の部	君が代の菊の花びら大いなり	菊	植物
1610	明治30年	秋の部	菊の御門をさす朝賀の馬車	菊	植物
1611	明治30年	秋の部	行秋を天に怪しき雲起る	行秋	時候
1612	明治30年	秋の部	江樓やいつくともなく秋のゆく	行秋	時候
1613	明治30年	秋の部	長き夜をあやしき禽の声すなり	夜長	時候
1615	明治30年	秋の部	松茸の老いて山を出づる物うかり	松茸	植物
1616	明治30年	秋の部	木幣や秋風動く熊祭	秋の風	天文
1617	明治30年	秋の部	色かへぬ松をと母の宣ひぬ	色変えぬ松	植物
1618	明治30年	秋の部	こぼれ沈む南天の實や手水鉢	南天の実	植物
1619	明治30年	秋の部	旅籠屋に冬を待つまもあらぬ哉	冬を待つ	時候
1620	明治30年	秋の部	さび鮎を賣残しけり家中町	鯖鮎	動物
1621	明治30年	秋の部	啄木鳥のつゝきもあへず飛去りぬ	啄木鳥	動物
1623	明治30年	秋の部	病あるかすこし後れし鴛鴦の妻	鴛鴦	動物
1624	明治30年	秋の部	瘡落ちて飽まで喰ふ河豚かな	河豚	動物
1625	明治30年	秋の部	炭ついで再び煮出す薬かな	炭	人事
2337	明治31年	秋の部	高樓に人のけはひや星今宵	星月夜	天文
2338	明治31年	秋の部	七夕や夜更けて騒ぐ竹の風	七夕	人事
2339	明治31年	秋の部	欄干に星の契りを見る夜哉	星合い	人事
2340	明治31年	秋の部	傾城の星数へけり星今宵	星月夜	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2341	明治31年	秋の部	文月やをり / \ 通る女づれ	文月	時候
2342	明治31年	秋の部	秋立つやお城の松の朝あらし	立秋	時候
2343	明治31年	秋の部	山の井の水湧きあふれ初あらし	初嵐	天文
2344	明治31年	秋の部	初秋の枕に近し水の音	初秋	時候
2345	明治31年	秋の部	秋暑し出水のあとの泥まみれ	残暑	時候
2346	明治31年	秋の部	稲妻の水をはしるやつゞけさま	稲妻	天文
2347	明治31年	秋の部	初月を草葉の風が吹て行く	初月	天文
2348	明治31年	秋の部	よき頃にはっと開きし花火哉	花火	人事
2349	明治31年	秋の部	磯十里松風の音天の川	天の川	天文
2350	明治31年	秋の部	よき人の硯洗へる汀かな	硯洗	人事
2351	明治31年	秋の部	人の娘踊の場より盗まれぬ	踊	人事
2352	明治31年	秋の部	灯籠や輿を出てゆく仲の町	燈籠	人事
2353	明治31年	秋の部	骸骨を画く揚屋の灯籠か那	燈籠	人事
2355	明治31年	秋の部	雨の中を曾良と翁と萩芒	雑	雑
2356	明治31年	秋の部	萩芒奥の細道雨がふる	雑	雑
2357	明治31年	秋の部	大粒の雨が落来るきみ畑	唐黍	植物
2358	明治31年	秋の部	芭蕉葉のはら / \ 雨に目さめたり	芭蕉	植物
2359	明治31年	秋の部	はたごやに秋の雨きく七部集	秋の雨	天文
2360	明治31年	秋の部	庭前の雨夜もすがら虫も鳴かず	蟲	動物
2361	明治31年	秋の部	兩岸の秋雨秋風最上川	雑	雑
2362	明治31年	秋の部	雨ふらんとして踊の太鼓打ちやまず	踊	人事
2363	明治31年	秋の部	酣にして雨がふる踊か那	踊	人事
2364	明治31年	秋の部	秋の蚊の雨の夕暮鳴いて来る	秋の蚊	動物
2365	明治31年	秋の部	縁先に梨の皮剥く月夜か那	月	天文
2366	明治31年	秋の部	この道は萩の里へと通ふなり	萩	植物
2367	明治31年	秋の部	故里に母と飯喰ふ角力か那	角力	人事
2368	明治31年	秋の部	草花の露に爪先ぬらしけり	露	天文
2369	明治31年	秋の部	霧さめや顔白き人の宮詣で	霧	天文
2370	明治31年	秋の部	引越して虫聞出しぬ縁の下	蟲	動物
2371	明治31年	秋の部	鍬の土こぼれし月の戸口哉	月	天文
2372	明治31年	秋の部	國元の角力召されぬお庭先	角力	人事
2374	明治31年	秋の部	駕を出て萩に泣き伏す山路哉	萩	植物
2375	明治31年	秋の部	しのび駕萩の裏門三日の月	萩	植物
2376	明治31年	秋の部	灯籠や駕を出て行く仲の町	燈籠	人事
2377	明治31年	秋の部	木犀や駕召し給ふお庭先	木犀	植物
2378	明治31年	秋の部	霧さめや駕出給ふ宮詣で	霧	天文
2379	明治31年	秋の部	よき駕や芙蓉咲いたる庭の前	芙蓉	植物
2380	明治31年	秋の部	草いろ / \ 花たばつくる駕の内	草花	植物
2381	明治31年	秋の部	代官の駕送り出す稲の花	稲の花	植物
2382	明治31年	秋の部	たそがれや医者 of 駕ゆく木槿垣	木槿	植物
2383	明治31年	秋の部	空駕や渡し吹かるゝ秋の暮	秋の暮	時候
2384	明治31年	秋の部	駕で越す峠八里や花芒	芒	植物
2385	明治31年	秋の部	取巻の女房の駕や花野ゆく	花野	地理
2387	明治31年	秋の部	名月に木蘭の舩浮べたり	名月	天文
2388	明治31年	秋の部	舩の人に花すすき振る夕日か那	芒	植物
2389	明治31年	秋の部	漣や月の笹舟くつがへる	月	天文
2390	明治31年	秋の部	人を送る管絃の舩や秋の虹	秋の虹	天文
2391	明治31年	秋の部	網打ちし舩や月下の水烟	網打	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2392	明治31年	秋の部	船をつなぎ岸に上りつ秋の風	秋の風	天文
2393	明治31年	秋の部	夜な / \ の戀の船路や芦の花	蘆の花	植物
2394	明治31年	秋の部	逢戀や舟漕入るゝ芦の花	蘆の花	植物
2395	明治31年	秋の部	帰るべく船に先立つ燕哉	秋燕	動物
2396	明治31年	秋の部	舷に露吹き散らす芒か那	芒	植物
2398	明治31年	秋の部	絵巻物あるは花野を牛車	花野	地理
2399	明治31年	秋の部	がたひしと夜さむの車路次に入る	夜寒	時候
2400	明治31年	秋の部	俗にして車を賃す菌狩	茸狩	人事
2401	明治31年	秋の部	案内や車を下りて草の花	草花	植物
2402	明治31年	秋の部	りん / \ と車はしるや橋月夜	月	天文
2403	明治31年	秋の部	名月の門に乗入るよき車	名月	天文
2404	明治31年	秋の部	いさゝかの萩など咲いて車寄	萩	植物
2405	明治31年	秋の部	鴟鳴くや車を下りて異人ゆく	鴟	動物
2406	明治31年	秋の部	朝寒の車下りたり宮の前	朝寒	時候
2407	明治31年	秋の部	待合の柳散るなりほろ車	柳散る	植物
2408	明治31年	秋の部	荷車の馬に喰はせる芒か那	芒	植物
2409	明治31年	秋の部	顔に散る棹の雫や船の月	月	天文
2411	明治31年	秋の部	我を追ふ朝兎の蔓から / \ に	朝顔	植物
2412	明治31年	秋の部	俳諧や寺の紅葉の焼豆腐	紅葉	植物
2414	明治31年	秋の部	窓あけて雁を見送る女か那	雁	動物
2415	明治31年	秋の部	いわしひく村の惣出や濱日和	鰯引	人事
2416	明治31年	秋の部	木の実など取りつゝゆかば日がくれむ	木の實	植物
2417	明治31年	秋の部	真先に宮の大木紅葉せり	紅葉	植物
2418	明治31年	秋の部	刈残す芒の株や寺の畑	芒	植物
2419	明治31年	秋の部	行秋をこよひも人に別れけ里	行秋	時候
2420	明治31年	秋の部	材木や米代川の秋の風	秋の風	天文
2421	明治31年	秋の部	夕暮を戀の細道草紅葉	草錦	植物
2423	明治31年	秋の部	菊さけて翁夫婦や渡りそめ	菊	植物
2424	明治31年	秋の部	芋の子を洗上げたる小川哉	芋	植物
2426	明治31年	秋の部	寺に住む詩人訪ひよる鳶の門	鳶	植物
2427	明治31年	秋の部	秋の蝶黄なるが多し寺の松	秋の蝶	動物
2428	明治31年	秋の部	方丈や朝日にうとき白芙蓉	芙蓉	植物
2429	明治31年	秋の部	未枯のせざる水田の蓮もあ里	未枯	植物
2430	明治31年	秋の部	蔓ひけば青きが出でぬ烏瓜	烏瓜	植物
2431	明治31年	秋の部	山門に車下りたり鴟の声	鴟	動物
2432	明治31年	秋の部	出水に蓼丈高く花咲きぬ	雑	雑
2433	明治31年	秋の部	路傍や写生してゐる秋日和	秋日和	天文
2434	明治31年	秋の部	石大にして石露の苔の開かざる	雑	雑
2435	明治31年	秋の部	草花の中に黄なるが拔出でし	草花	植物
2437	明治31年	秋の部	木犀やお経を写す朝机	木犀	植物
2438	明治31年	秋の部	山駕のお肌寒くぞ覚ほすらん	肌寒	時候
2439	明治31年	秋の部	湖近く竹の嵐や星月夜	星月夜	天文
2440	明治31年	秋の部	秋雨や浮世を語る小商人	秋の雨	天文
2441	明治31年	秋の部	わが庭の月や初する隣りあり	初摺	人事
2442	明治31年	秋の部	鳴きさうな鹿見て通る夕か那	鹿	動物
2443	明治31年	秋の部	綿取のふくやかに肥えし女か那	綿取	人事
2445	明治31年	秋の部	囊虫の泣明したる甲斐もなし	囊虫	動物
2447	明治31年	秋の部	杯に菊の雫のたまりける	菊	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2448	明治31年	秋の部	床の間に菊の雫のこぼれける	菊	植物
2449	明治31年	秋の部	菊刈て瘦せたる菊の残りけり	残菊	植物
2450	明治31年	秋の部	とざしたる月の戸口や菊白し	菊	植物
2451	明治31年	秋の部	山路来て菊作る家を見つれたり	菊	植物
2452	明治31年	秋の部	残る菊瘦せて白きをいとほしみ	残菊	植物
2453	明治31年	秋の部	菊折れて人の心をいたましむ	菊	植物
2454	明治31年	秋の部	菊の間に酒もりしたる公卿哉	菊	植物
2455	明治31年	秋の部	團子喰ふ茶屋の人数や菊人形	菊人形	人事
2456	明治31年	秋の部	菊咲いて妻を娶りし詩人か那	菊	植物
2457	明治31年	秋の部	わが庭の白菊を愛す黄菊がち	菊	植物
2458	明治31年	秋の部	菊そへてまみらす菊の酒となん	菊の酒	人事
2459	明治31年	秋の部	圓き月尾花が末にあらはれぬ	芒	植物
2460	明治31年	秋の部	調練の旗ひらめかす花野哉	花野	地理
2461	明治31年	秋の部	白菊に香の烟や雨ほそし	菊	植物
3185	明治32年	秋の部	飯濟むや踊あるべき村旅籠	踊	人事
3186	明治32年	秋の部	初秋の草に風吹く寐覚哉	初秋	時候
3187	明治32年	秋の部	迎火のしめりがちなる哀れか那	迎火	人事
3188	明治32年	秋の部	七夕の歌を乞はれし旅籠かな	七夕	人事
3189	明治32年	秋の部	蝸や木の間に見ゆる赤き雲	蝸	動物
3190	明治32年	秋の部	七夕の紅きともしや京の町	七夕	人事
3191	明治32年	秋の部	雷の陣たのもしき弦かな	雷	天文
3192	明治32年	秋の部	蘭を愛す入唐の僧や山の雲	蘭	植物
3193	明治32年	秋の部	朝兒の蒼を見るや星明り	朝顔	植物
3194	明治32年	秋の部	蜻蛉の生れ出でたる草葉かな	蜻蛉	動物
3196	明治32年	秋の部	七夕を君にたよりす思ひやり	七夕	人事
3198	明治32年	秋の部	母乗せて彼岸詣や馬に萩	萩	植物
3199	明治32年	秋の部	打かつぐ太鼓うれしき踊かな	踊	人事
3200	明治32年	秋の部	裸子の泥に菱とる秋暑し	残暑	時候
3201	明治32年	秋の部	太鼓買ふて町を出るや稲の花	稲の花	植物
3202	明治32年	秋の部	海山や二百十日の空の色	二百十日	時候
3203	明治32年	秋の部	虫選びともし消えたる草の風	蟲	動物
3204	明治32年	秋の部	葉鶏頭南瓜畑は荒れにけり	雁來紅	植物
3205	明治32年	秋の部	碧梧は伐仆されつ庭の月	月	天文
3206	明治32年	秋の部	横雲や萩に夜明くる高台寺	萩	植物
3207	明治32年	秋の部	俳諧は蓮の実飛ぶが如きかな	蓮實飛ぶ	植物
3209	明治32年	秋の部	水にちる花火の色や目さましき	花火	人事
3210	明治32年	秋の部	くれなゐの或はみどりの花火哉	花火	人事
3211	明治32年	秋の部	よく揚る花火は天の川近し	花火	人事
3212	明治32年	秋の部	中流に舟を泛べて花火哉	花火	人事
3213	明治32年	秋の部	金龍の水をはしれる花火哉	花火	人事
3214	明治32年	秋の部	芦の洲に舟漕ぎよせし花火哉	花火	人事
3215	明治32年	秋の部	花火消えて稲妻光る目先哉	花火	人事
3216	明治32年	秋の部	兩國の橋は落ちたる花火哉	花火	人事
3217	明治32年	秋の部	月代や花火消えたる岡の上	花火	人事
3218	明治32年	秋の部	揚花火岸の柳に消えにけり	花火	人事
3219	明治32年	秋の部	大粒な雨降りいでし花火かな	花火	人事
3221	明治32年	秋の部	萩わけて橋の名を見る庭荒れし	萩	植物
3222	明治32年	秋の部	石に萩夜露こぼるゝばかりなり	萩	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3223	明治32年	秋の部	藤棚の荒れし軒端や萩の丈	萩	植物
3224	明治32年	秋の部	萩の人に茶盆を運ぶまはり道	萩	植物
3225	明治32年	秋の部	萩咲くや木の間に見ゆる人の影	萩	植物
3226	明治32年	秋の部	萩の園犬ころ多き芝生かな	萩	植物
3227	明治32年	秋の部	松の木を繞りて萩の逦かな	萩	植物
3228	明治32年	秋の部	寺俗に萩乱れ咲く人出かな	萩	植物
3229	明治32年	秋の部	商人の女房なりけり萩の花	萩	植物
3230	明治32年	秋の部	異草もまじりて萩の蒼かな	萩	植物
3232	明治32年	秋の部	寐そべてひやづく壁を踏みにけり	冷か	時候
3233	明治32年	秋の部	冷や物打着せし腹の上	冷か	時候
3234	明治32年	秋の部	ひや/ \と浪打寄する木の根哉	冷か	時候
3235	明治32年	秋の部	つきにゆきし鐘冷かに大なり	冷か	時候
3236	明治32年	秋の部	幢幔やひや/ \として風が吹く	冷か	時候
3237	明治32年	秋の部	冷かに楸散るなり門の内	冷か	時候
3238	明治32年	秋の部	冷かな風に吹かれてかしま立	冷か	時候
3239	明治32年	秋の部	雨一夜ひやづく空となりにけり	冷か	時候
3240	明治32年	秋の部	冷かや草を拂へば石に露	冷か	時候
3241	明治32年	秋の部	夙に起きて刻む佛や冷やかに	冷か	時候
3243	明治32年	秋の部	鶏の子は籠に戻りつ秋の雨	秋の雨	天文
3244	明治32年	秋の部	篝火を草に打振り牛祭	牛祭	人事
3245	明治32年	秋の部	松枯れて葡萄の月を賞しけり	葡萄	植物
3246	明治32年	秋の部	装ひや萩に連立つ三四人	萩	植物
3247	明治32年	秋の部	柳散り戸口に古き轍かな	柳散る	植物
3248	明治32年	秋の部	柿の葉と柿と盛りたる器かな	柿	植物
3249	明治32年	秋の部	椋鳥の木の実をこぼす坂の上	椋鳥	動物
3250	明治32年	秋の部	穂芒の馬の腹うつ野分かな	野分	天文
3251	明治32年	秋の部	老樂の鳴子も引いて見たりけり	鳴子	人事
3252	明治32年	秋の部	長き夜の雨ふり已まぬ旅籠哉	夜長	時候
3253	明治32年	秋の部	雨垂れのいさごを洗ひ鳳仙花	鳳仙花	植物
3254	明治32年	秋の部	末なりの鬼灯残る青みがち	鬼灯	植物
3256	明治32年	秋の部	奏聞の孝子もありて年豊か	豊年	人事
3257	明治32年	秋の部	豊年の村に入りけり奉幣使	豊年	人事
3258	明治32年	秋の部	豊年は津々浦々の踊かな	豊年	人事
3259	明治32年	秋の部	豊年の舞樂起るや行在所	豊年	人事
3260	明治32年	秋の部	實る秋千石舩に帆をあげて	秋	時候
3261	明治32年	秋の部	豊かなる瑞穂の國や秋日和	秋日和	天文
3262	明治32年	秋の部	入船の港賑はふ米の秋	秋	時候
3263	明治32年	秋の部	國々の五穀みのると奏しけり	豊年	人事
3264	明治32年	秋の部	瑞兆の雲も現れ実る秋	豊年	人事
3265	明治32年	秋の部	豊年の夫も帰りて嬉しけれ	豊年	人事
3267	明治32年	秋の部	洪水や黍に風吹く朝月夜	唐黍	植物
3268	明治32年	秋の部	江月や鶴飛去りし舟の上	月	天文
3269	明治32年	秋の部	小錢もちて酒買ひに行く村の月	月	天文
3270	明治32年	秋の部	明月の水は東に流れけり	名月	天文
3271	明治32年	秋の部	冷かな月夜なりけり雨上り	月	天文
3272	明治32年	秋の部	明月の庭には木々の雫かな	名月	天文
3273	明治32年	秋の部	明月の風颯々と吹いて来る	名月	天文
3274	明治32年	秋の部	明月の葉廣柏や暗き窓	名月	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3275	明治32年	秋の部	草庵の灯も見えて嵯峨の月	月	天文
3276	明治32年	秋の部	いくさやんで月に暈見る野末哉	月	天文
3278	明治32年	秋の部	打やまぬ踊太鼓や雨になり	踊	人事
3279	明治32年	秋の部	笛吹の美男なりける踊かな	踊	人事
3280	明治32年	秋の部	踊ありとふれまはりけり稲の花	踊	人事
3281	明治32年	秋の部	宿を出て踊見にゆく他国かな	踊	人事
3282	明治32年	秋の部	京の人をとめて踊を習ひけり	踊	人事
3283	明治32年	秋の部	時の疫の踊もなくて村さびし	踊	人事
3284	明治32年	秋の部	篝火の草木にうつり踊かな	踊	人事
3285	明治32年	秋の部	道心のさそひ出されし踊かな	踊	人事
3286	明治32年	秋の部	下加茂の踊召されし御庭哉	踊	人事
3287	明治32年	秋の部	月に雲踊も散ってしまひけり	踊	人事
3288	明治32年	秋の部	古の神泉苑や秋の水	秋の水	地理
3289	明治32年	秋の部	花芒小石がちなる山路哉	芒	植物
3290	明治32年	秋の部	草花に水流れ入る小橋哉	草花	植物
3291	明治32年	秋の部	山越の暮に悲しき案山子哉	案山子	人事
3292	明治32年	秋の部	つはくらも帰りて門の穂蓼哉	蓼の花	植物
3293	明治32年	秋の部	末枯の茄子畑や水が退く	末枯	植物
3294	明治32年	秋の部	いが栗の青きが落ちぬ谷の水	栗	植物
3295	明治32年	秋の部	後の月は菊に灯す夜なりけり	後の月	天文
3296	明治32年	秋の部	此頃の夜寒の空や星が見え	夜寒	時候
3297	明治32年	秋の部	小謡の夕山越や薬掘	薬掘	人事
3299	明治32年	秋の部	豆引いて鶏頭残る畑かな	豆引	人事
3300	明治32年	秋の部	豆引いてかけし軒端に照る日哉	豆引	人事
3301	明治32年	秋の部	畑の豆畦豆も引いてしまひけり	豆引	人事
3302	明治32年	秋の部	引残す豆に鶏遊びけり	豆引	人事
3303	明治32年	秋の部	荒畑や草の中より豆を引く	豆引	人事
3304	明治32年	秋の部	豆引や小豆畑はまだ青し	豆引	人事
3305	明治32年	秋の部	雨晴れて豆引かばやと思ひけり	豆引	人事
3306	明治32年	秋の部	草荒れて豆引くべくもあらぬかな	豆引	人事
3307	明治32年	秋の部	畔豆を引くや門口に鶏を追ふ	豆引	人事
3308	明治32年	秋の部	豆引いて荷ひ来りし労れかな	豆引	人事
3310	明治32年	秋の部	山路来て男に逢ひぬ木賊刈	木賊刈	人事
3311	明治32年	秋の部	木賊刈る雨もさびしやハツ下り	木賊刈	人事
3312	明治32年	秋の部	木賊刈る男は村の鰥夫かな	木賊刈	人事
3313	明治32年	秋の部	木賊刈寺に寄りけり石に鎌	木賊刈	人事
3314	明治32年	秋の部	三日月や風さら / \ と木賊刈	木賊刈	人事
3315	明治32年	秋の部	木賊刈る男に道を問ひにけり	木賊刈	人事
3316	明治32年	秋の部	木賊刈木賊の中の昼餉哉	木賊刈	人事
3317	明治32年	秋の部	小盗人出づる山路や木賊刈	木賊刈	人事
3318	明治32年	秋の部	道の辺に木賊刈干す小石哉	木賊刈	人事
3319	明治32年	秋の部	領内を忍びの狩や木賊刈	木賊刈	人事
3321	明治32年	秋の部	起き出でゝ葉姜を掘るひじり哉	生姜	植物
3322	明治32年	秋の部	葉姜を荷ひ来りぬ市の雨	生姜	植物
3323	明治32年	秋の部	朝の雨姜の若葉ぬるゝ程	生姜	植物
3324	明治32年	秋の部	葉姜やしめりがちなる畑の土	生姜	植物
3325	明治32年	秋の部	葉姜の葉ながらにして卓の上	生姜	植物
3326	明治32年	秋の部	葉姜の草にまじりて伸びにけり	生姜	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3327	明治32年	秋の部	葉姜を洗へば白き根なりけり	生姜	植物
3328	明治32年	秋の部	霧雨や葉姜を掘る山の畑	生姜	植物
3329	明治32年	秋の部	よき酒に葉姜ひたし贈りけり	生姜	植物
3330	明治32年	秋の部	葉姜の掘残されて更くる秋	秋深し	時候
3331	明治32年	秋の部	葉姜の葉は緑なる梅酢哉	生姜	植物
3332	明治32年	秋の部	葉姜を朝に嗜む老儒哉	生姜	植物
3334	明治32年	秋の部	叔母の子をさそふ鬼灯畑哉	鬼灯	植物
3335	明治32年	秋の部	男の子にも鬼灯分つ大人ぶり	鬼灯	植物
3336	明治32年	秋の部	鬼灯も賣れぬ小店や日短かし	鬼灯	植物
3337	明治32年	秋の部	鬼灯も鶏頭も皆泥まみれ	雑	雑
3338	明治32年	秋の部	鬼灯の青きもまじり多くなる	鬼灯	植物
3339	明治32年	秋の部	鬼灯を貰ひに来るや隣の子	鬼灯	植物
3340	明治32年	秋の部	鬼灯も枯れ勝にして蒜の畑	鬼灯	植物
3341	明治32年	秋の部	鬼灯に蝶も見えけり日をうけて	鬼灯	植物
3342	明治32年	秋の部	草わけて鬼灯さがす屋敷跡	鬼灯	植物
3343	明治32年	秋の部	鬼灯を賣りに來りぬ例の媼	鬼灯	植物
3344	明治32年	秋の部	飴賣の鬼灯も賣る物日哉	鬼灯	植物
3345	明治32年	秋の部	鬼灯は刈尽されぬ昼の虫	鬼灯	植物
3346	明治32年	秋の部	鬼灯の殻引裂いて憂かな	鬼灯	植物
3347	明治32年	秋の部	鬼灯の切捨てられてしなびけり	鬼灯	植物
3349	明治32年	秋の部	見知らざる翁もまじり菌狩	茸狩	人事
3350	明治32年	秋の部	茸狩の茸を煮るべき用意哉	茸狩	人事
3351	明治32年	秋の部	茸狩に仙を羨む心あり	茸狩	人事
3352	明治32年	秋の部	茸狩や鶏鳴く村を見下ろして	茸狩	人事
3353	明治32年	秋の部	炭焼に訪寄る昼や菌狩	茸狩	人事
3354	明治32年	秋の部	茸狩の寺に集ひし戻りかな	茸狩	人事
3355	明治32年	秋の部	炭焼の娘をなぶり菌狩	茸狩	人事
3356	明治32年	秋の部	菌狩薬も掘りて戻りけり	茸狩	人事
3357	明治32年	秋の部	茸狩や襟に落ちたる松の露	茸狩	人事
3358	明治32年	秋の部	茸狩や溪に下りし人の声	茸狩	人事
3359	明治32年	秋の部	名も知らぬ菌を取ってすてにけり	茸狩	人事
3360	明治32年	秋の部	山僧やさそひ出されて菌狩	茸狩	人事
3361	明治32年	秋の部	茸狩の連にはぐれし下山かな	茸狩	人事
3362	明治32年	秋の部	茸狩の松茸を撰る籠の中	茸狩	人事
3363	明治32年	秋の部	かり得たる菌に草をかぶせけり	茸狩	人事
3365	明治32年	秋の部	初汐や鐘つき出す磯の寺	初汐	地理
3366	明治32年	秋の部	初汐に二十日の月も出でにけり	初汐	地理
3367	明治32年	秋の部	初汐に風吹く磯の木立哉	初汐	地理
3368	明治32年	秋の部	初汐や淡路の山に昼の月	初汐	地理
3369	明治32年	秋の部	初汐の漫々として星光る	初汐	地理
3370	明治32年	秋の部	初汐や寫の草木の日の光り	初汐	地理
3371	明治32年	秋の部	初汐や鳴から帰る朝の舟	初汐	地理
3372	明治32年	秋の部	初汐の武さしの國や朝畑	初汐	地理
3373	明治32年	秋の部	初汐や磯は雨ふる小家がち	初汐	地理
3374	明治32年	秋の部	初汐に夜明くる村や舟の窓	初汐	地理
3375	明治32年	秋の部	舟人の初汐ばかり更けにけり	初汐	地理
3376	明治32年	秋の部	初汐や高きに立てる磯の寺	初汐	地理
3378	明治32年	秋の部	嬉しくも萩につれ立つ三人かな	萩	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3380	明治32年	秋の部	露しぐれ笠傾くる風もあり	露しぐれ	天文
3381	明治32年	秋の部	もろともに萩を見にきと傳へてよ	萩	植物
3383	明治32年	秋の部	曲物に柚の葉もそへて柚味噌哉	柚味噌	人事
3384	明治32年	秋の部	方外のゆみそをわかつ笹葉哉	柚味噌	人事
3385	明治32年	秋の部	老禪に柚味噌乞ひ得て戻りけり	柚味噌	人事
3386	明治32年	秋の部	この頃のゆみそもありて小酒哉	柚味噌	人事
3387	明治32年	秋の部	柚味噌の残少き愚庵かな	柚味噌	人事
3388	明治32年	秋の部	酒のまぬ人ばかりなり新柚みそ	柚味噌	人事
3389	明治32年	秋の部	わびしくも芭蕉を泊めしゆみそ哉	柚味噌	人事
3390	明治32年	秋の部	ゆみそつくる朝の厨のうそ寒し	柚味噌	人事
3391	明治32年	秋の部	山里は豆腐に遠き柚みそ哉	柚味噌	人事
3392	明治32年	秋の部	芋の子を呉れてゆみそを貰ひけり	柚味噌	人事
3394	明治32年	秋の部	入船の新酒もありて祭かな	新酒	人事
3395	明治32年	秋の部	店先に新酒の樽や鶏頭花	新酒	人事
3396	明治32年	秋の部	村中に新酒をくばり祝儀哉	新酒	人事
3397	明治32年	秋の部	野の店の新酒の酔や草の花	新酒	人事
3398	明治32年	秋の部	新酒のむで夜道をゆくやさめ心地	新酒	人事
3399	明治32年	秋の部	賣出しの草花かざる新酒など	新酒	人事
3400	明治32年	秋の部	樽入は新酒なりけりよい嫁御	新酒	人事
3401	明治32年	秋の部	酔顔の下司もうれしき新酒哉	新酒	人事
3402	明治32年	秋の部	新酒積んで川を下るや花芒	新酒	人事
3403	明治32年	秋の部	雨がちの新酒も遅き村さびし	新酒	人事
3404	明治32年	秋の部	菊咲いて君来ましたり此夕	菊	植物
3405	明治32年	秋の部	なか/＼に花野を遠み牛車	花野	地理
3406	明治32年	秋の部	夕月の戸口にあたりひさご哉	瓢	植物
3407	明治32年	秋の部	暁の星も消えけり白桔梗	桔梗	植物
3408	明治32年	秋の部	新そばは弥亘もまじりて発句哉	新蕎麥	人事
3409	明治32年	秋の部	古の月夜に似たる砧かな	砧	人事
3410	明治32年	秋の部	満目の蓮破れぬ風曇り	破蓮	植物
3411	明治32年	秋の部	引きそめし豆の畑や雁わたる	雁	動物
3412	明治32年	秋の部	大名の白河を立つあけの雁	雁	動物
3413	明治32年	秋の部	酒買ふて舟に戻るや暮の雁	雁	動物
3414	明治32年	秋の部	積奠の襟を正しくうそ寒き	やや寒	時候
3415	明治32年	秋の部	雁金や雨ふり出でし舟の窓	雁	動物
3416	明治32年	秋の部	初雁やまだ鶏頭の瘦せながら	雁	動物
3417	明治32年	秋の部	鶏の子の落穂拾ふや畦の草	落穂	植物
3418	明治32年	秋の部	夕晴の菊鮮かや土ぬれし	菊	植物
3419	明治32年	秋の部	紅葉散る縁に雨垂しぶきけり	紅葉	植物
3420	明治32年	秋の部	柳ちり/＼日もくれんとす	柳散る	植物
3421	明治32年	秋の部	赤菊の咲き乱れたり勝手口	菊	植物
3422	明治32年	秋の部	鰯引大雨風となりけり	鰯引	人事
3423	明治32年	秋の部	ぐみの木の葉も落尽す濱の風	茱萸	植物
3424	明治32年	秋の部	飛んで来る鳥にしぐれけり	時雨	天文
3425	明治32年	秋の部	しぐれ来て少しかゝりぬ利休窓	時雨	天文
3426	明治32年	秋の部	大雨に砂洗はれし黄菊かな	菊	植物
3427	明治32年	秋の部	料理屋を出てしぐれけりもみの裏	時雨	天文
3428	明治32年	秋の部	赤々と瀬にうつる雲や鮎のさび	鯖鮎	動物
3429	明治32年	秋の部	谷川の尖りし石や鮎落る	鯖鮎	動物

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3430	明治32年	秋の部	さびあゆの貫かれけり草の骨	鯖鮎	動物
3431	明治32年	秋の部	さびあゆの岩に便らん思哉	鯖鮎	動物
3432	明治32年	秋の部	さびあゆの膳に上りぬ山はたご	鯖鮎	動物
3433	明治32年	秋の部	さびあゆの身をかくすべきすべをなみ	鯖鮎	動物
3434	明治32年	秋の部	しばらくは日向に寄りぬ下りあゆ	鯖鮎	動物
3435	明治32年	秋の部	此頃の鮎もさびたり鰯すし	鯖鮎	動物
3436	明治32年	秋の部	落鮎の身も黄みけり網の中	鯖鮎	動物
3437	明治32年	秋の部	あゆも落ち尾花もちりてしまひけり	雑	雑
3438	明治32年	秋の部	秋風や岩に干からびし海の草	秋の風	天文
3439	明治32年	秋の部	自茲去ていつくに君は花芒	芒	植物
3440	明治32年	秋の部	思ひあまり暮秋の山を下りけり	暮の秋	時候
3441	明治32年	秋の部	秋も末になりける顔や君も亦	暮の秋	時候
3442	明治32年	秋の部	旅もはや茲に九月の酒中り	九月	時候
3443	明治32年	秋の部	掃はざる银杏落葉や能樂堂	银杏散る	植物
3444	明治32年	秋の部	眼中の秋に海あり吾老矣	秋	時候
3445	明治32年	秋の部	此頃の日和つゝきや茶の荅	茶の花	植物
3446	明治32年	秋の部	茶の花の垣も低しや馬に乗り	茶の花	植物
3447	明治32年	秋の部	茶の花の木幡あたりや雨さびし	茶の花	植物
3448	明治32年	秋の部	茶の花や霜早くふる山の寺	茶の花	植物
3449	明治32年	秋の部	茶の花も咲きぬ異木の帰花	茶の花	植物
3450	明治32年	秋の部	朝起の去来は柿を眺めけり	柿	植物
3452	明治32年	秋の部	茸狩や木の間に見ゆる京の町	茸狩	人事
3453	明治32年	秋の部	茸狩や草につらぬく茸の数	茸狩	人事
3455	明治32年	秋の部	鳥も来ず紅葉に早き金閣寺	紅葉	植物
3456	明治32年	秋の部	達磨の画秋風吹くが如きかな	秋の風	天文
3458	明治32年	秋の部	境内は名のある桜もみじかな	桜紅葉	植物
3460	明治32年	秋の部	渋柿はみんな鴉に喰はれうぞ	柿	植物
3462	明治32年	秋の部	染物に赤蜻蛉や京の川	赤蜻蛉	動物
3464	明治32年	秋の部	風吹くや木津の川辺の棉畑	棉	植物
3466	明治32年	秋の部	よき人の墓も荒れたり鶏頭花	鶏頭	植物
3468	明治32年	秋の部	雨の中に朝戸を開けて蕎麦の花	蕎麦花	植物
3470	明治32年	秋の部	秋雨や鶏の米賣る媪が店	秋の雨	天文
3472	明治32年	秋の部	しん / \ と霧に雨ふる神の山	霧	天文
3473	明治32年	秋の部	上流の紅葉も見えつ五十鈴川	紅葉	植物
3475	明治32年	秋の部	神樂殿の雨に人なきそぞろ寒	そぞろ寒	時候
3476	明治32年	秋の部	朝寒や宮作るべき木の匂ひ	朝寒	時候
3477	明治32年	秋の部	やゝ寒き雨や見上ぐる神の杉	やや寒	時候
3478	明治32年	秋の部	神木のひやゝかにして雫かな	冷か	時候
3479	明治32年	秋の部	秋にして雨にして神の残シの灯	秋	時候
3481	明治32年	秋の部	山風の霧吹きおろす畏さよ	霧	天文
3483	明治32年	秋の部	幾秋の千木高うして宮の雨	秋	時候
3485	明治32年	秋の部	やや久しき汽車の遅れや夜の寒き	夜寒	時候
3487	明治32年	秋の部	海岸に宿れる夜半や秋の雨	秋の雨	天文
3489	明治32年	秋の部	草花も吾もぬれけり雨三日	草花	植物
3491	明治32年	秋の部	大佛の口影を踏むや肌寒う	肌寒	時候
3492	明治32年	秋の部	大佛のうしろは山や秋の風	秋の風	天文
3494	明治32年	秋の部	月の夜は達磨の眼光りけり	月	天文
3496	明治32年	秋の部	鎌倉を見たり満地の秋の風	秋の風	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3499	明治32年	秋の部	北国の山の紅葉や雪早し	紅葉	植物
3500	明治32年	秋の部	帰省して今年の粟を炊きけり	粟	植物
3501	明治32年	秋の部	茶の花に遊ぶ小鳥も見馴れたり	茶の花	植物
3502	明治32年	秋の部	茶の花や引残されし烏瓜	茶の花	植物
3503	明治32年	秋の部	茶の花や俗も閑なる寺の會	茶の花	植物
3504	明治32年	秋の部	茶畑の荒れて久しや花咲きぬ	茶の花	植物
3505	明治32年	秋の部	草枯の畑や茶の木の荅がち	茶の花	植物
3506	明治32年	秋の部	海中の巖を吹くや秋の風	秋の風	天文
3507	明治32年	秋の部	此頃の燕も帰り干蓑	秋燕	動物
3508	明治32年	秋の部	三四の菌を草に包みけり	茸	植物
3509	明治32年	秋の部	神嘗の祭の月となりけり	神嘗祭	人事
3510	明治32年	秋の部	渋柿や袴つけたる氏子ども	柿	植物
3511	明治32年	秋の部	まはり道の足もよごさず草紅葉	草錦	植物
3512	明治32年	秋の部	草紅葉運動会は果てにけり	草錦	植物
3513	明治32年	秋の部	秋晴の道に物干す筵哉	秋晴	天文
3514	明治32年	秋の部	月に歩す偶々九月十三夜	九月	時候
3515	明治32年	秋の部	百舌鳥鳴いて目黒に近き木立かな	鴟	動物
3516	明治32年	秋の部	十町もありと云ふ道や花芒	芒	植物
3517	明治32年	秋の部	酒ものまず夜を寒がりて寐たりけり	夜寒	時候
3518	明治32年	秋の部	冷やかに神の扉を閉るなり	冷か	時候
3519	明治32年	秋の部	岩木山の雪を見上る刈田哉	刈田	地理
3520	明治32年	秋の部	雨寒く刈田を雁の低う飛ぶ	刈田	地理
3521	明治32年	秋の部	老一人田も刈終へてしまひけり	刈田	地理
3522	明治32年	秋の部	秋もはや里は刈田の雨つゞき	刈田	地理
3523	明治32年	秋の部	刈跡の水も落さぬ櫓哉	櫓	植物
3524	明治32年	秋の部	山里や田を刈りてより小淋しき	刈田	地理
3525	明治32年	秋の部	岡の畑のそばも実となる刈田哉	刈田	地理
3526	明治32年	秋の部	豆引の刈田を眺め戻りけり	刈田	地理
3527	明治32年	秋の部	この頃の秋の霜ふる刈田哉	刈田	地理
3528	明治32年	秋の部	鶏追へば刈田に遠く遊びけり	刈田	地理
3529	明治32年	秋の部	山の田は刈られて久し散尾花	芒	植物
3530	明治32年	秋の部	少し明かき刈田の果や雲のきれ	刈田	地理
3531	明治32年	秋の部	薄明き月の戸口や葉鶏頭	雁來紅	植物
3532	明治32年	秋の部	よき酒を買にやりけり鯉漬	鯉漬	人事
3533	明治32年	秋の部	松茸の土こぼれけり台どころ	松茸	植物
3534	明治32年	秋の部	松茸に草ちらばりぬ台處	松茸	植物
3535	明治32年	秋の部	神の木の盤桓として野分かな	野分	天文
3536	明治32年	秋の部	秋の山に上りて見たり雲の色	秋の山	地理
3537	明治32年	秋の部	鶺鴒や川原に咲ける黄なる花	鶺鴒	動物
3538	明治32年	秋の部	清水の愚庵を訪ひぬ蘭の歌	蘭	植物
3539	明治32年	秋の部	入唐の僧帰りけり蘭の花	蘭	植物
3540	明治32年	秋の部	幽谷に人もすみけり蘭の花	蘭	植物
3541	明治32年	秋の部	岩を負ひて咲かざる蘭の茂りけり	蘭	植物
3542	明治32年	秋の部	菊の花且の物と思ふかな	菊	植物
3543	明治32年	秋の部	蕙と蘭と共に吹かるゝ且かな	蘭	植物
3544	明治32年	秋の部	蘭咲くや岩にこぼれし日の光	蘭	植物
3545	明治32年	秋の部	蘭の香や愚なる子の僧となり	蘭	植物
3546	明治32年	秋の部	蘭の鉢貴人の前に据ゑにけり	蘭	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3547	明治32年	秋の部	よき水も流れて蘭の多き谷	蘭	植物
3548	明治32年	秋の部	蘭の苞いやしき人の通りけり	蘭	植物
3549	明治32年	秋の部	蘭の花桂の露や星明り	蘭	植物
3550	明治32年	秋の部	蘭の花野分も知らぬ岩により	蘭	植物
3551	明治32年	秋の部	盆石と花なき蘭を愛しけり	蘭	植物
3552	明治32年	秋の部	襖あけて書院に蘭を運びけり	蘭	植物
3554	明治32年	秋の部	渋柿や流行り出したる大黒天	柿	植物
3555	明治32年	秋の部	實もならぬよしある柿の一木哉	柿	植物
3556	明治32年	秋の部	小一里を枝柿もちて帰りけり	柿	植物
3557	明治32年	秋の部	小淋しき山里路や柿落葉	柿落葉	植物
3558	明治32年	秋の部	渋柿の葉も青々と秋暑し	柿	植物
3559	明治32年	秋の部	渋柿は枝に残れり干菓	柿	植物
3560	明治32年	秋の部	渋柿の村も見えけり花芒	柿	植物
3561	明治32年	秋の部	門に入る医者的車や柿落葉	柿落葉	植物
3562	明治32年	秋の部	渋柿の扁たきを名の在所哉	柿	植物
3563	明治32年	秋の部	渋柿に到る逕も荒れにけり	柿	植物
3565	明治32年	秋の部	俳諧は酒温むるすべもなし	温め酒	人事
3566	明治32年	秋の部	雨となりし運動会や草紅葉	草錦	植物
3567	明治32年	秋の部	低き木の紅葉もまじり花芒	芒	植物
3568	明治32年	秋の部	俳諧の別は似たり柿の蒂	柿	植物
3569	明治32年	秋の部	柚の皮の味噌も残りて別哉	柚味噌	人事
3570	明治32年	秋の部	五六人高きに登る菊の花	菊	植物
3571	明治32年	秋の部	あたためて柚味噌なめけりさしむかひ	柚味噌	人事
3572	明治32年	秋の部	莽として愁ふ芒や君は去る	芒	植物
3573	明治32年	秋の部	風に臨んで暮秋の人を送りけり	暮の秋	時候
3574	明治32年	秋の部	よき人の袍衣うめし木はもみじけり	紅葉	植物
3575	明治32年	秋の部	皆曰く是より遠し秋の風	秋の風	天文
3576	明治32年	秋の部	足らざりし柚味噌に惜き別哉	柚味噌	人事
3578	明治32年	秋の部	木の間から海は見えけり露しぐれ	露しぐれ	天文
3579	明治32年	秋の部	露しぐれ袖にかこひし小提灯	露しぐれ	天文
3580	明治32年	秋の部	山駕に露しぐれきく小淋しき	露しぐれ	天文
3581	明治32年	秋の部	露しぐれ鳥も啼かざる木立哉	露しぐれ	天文
3582	明治32年	秋の部	露しぐれ人出て給ふ車寄	露しぐれ	天文
3583	明治32年	秋の部	露しぐれ森を出てたる日の光	露しぐれ	天文
3584	明治32年	秋の部	内宮の神の灯残り露しぐれ	露しぐれ	天文
3585	明治32年	秋の部	しばし憩ふ一木の松や露しぐれ	露しぐれ	天文
3586	明治32年	秋の部	露しぐれ水に散込む夜明哉	露しぐれ	天文
3587	明治32年	秋の部	露しぐれ既に乾いて草の花	露しぐれ	天文
3588	明治32年	秋の部	夕ふじや垣の茶の木も咲きそめて	茶の花	植物
3589	明治32年	秋の部	黍からを踏んで逕のやゝ寒き	唐黍	植物
3590	明治32年	秋の部	大國の刈田の上やくもり勝	刈田	地理
3591	明治32年	秋の部	山越之狭き刈田や蕎麦の花	蕎麦花	植物
3592	明治32年	秋の部	税輕し糶すり唄も昔ぶり	糶摺	人事
3593	明治32年	秋の部	此頃の雁もまれなり尾花散る	芒散る	植物
3594	明治32年	秋の部	登臨の城高うして雲の秋	秋の雲	天文
3595	明治32年	秋の部	草の実もこぼれて久し古き墓	草の實	植物
3596	明治32年	秋の部	八月の鱸をさくや舟の客	八月	時候
3597	明治32年	秋の部	笠の中に木実を取りし山路哉	木の實	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3598	明治32年	秋の部	紅葉見て滝の裏へもまはりけり	紅葉	植物
3599	明治32年	秋の部	朝寒の菊一ツ咲く戸口哉	雑	雑
3600	明治32年	秋の部	掃かざなりし藤棚の下や冬近し	冬近し	時候
3601	明治32年	秋の部	別るゝに物の悲しや草の花	草花	植物
3602	明治32年	秋の部	心細く北向く兒や秋の風	秋の風	天文
3603	明治32年	秋の部	秋風や道にちらばる草の骨	秋の風	天文
3604	明治32年	秋の部	岩多き國に入りけり秋の風	秋の風	天文
3605	明治32年	秋の部	秋風や桑の畑の泥乾き	秋の風	天文
3606	明治32年	秋の部	洪水や日くれて秋の風が吹く	秋の風	天文
3607	明治32年	秋の部	朝寒や眉の上なる吾妻山	朝寒	時候
3608	明治32年	秋の部	古の奥州路なり秋の風	秋の風	天文
3609	明治32年	秋の部	秋の雲藏王岳を奔りけり	秋の雲	天文
3610	明治32年	秋の部	もろともに新酒の酔や國訛	新酒	人事
3611	明治32年	秋の部	萩芒芒は穂にも出でずして	雑	雑
3612	明治32年	秋の部	十境の外に菊咲く蘭若かな	菊	植物
3613	明治32年	秋の部	芋の子をとりて芋の葉捨てにけり	芋	植物
3614	明治32年	秋の部	茸もなく松の下草花さびし	茸	植物
3615	明治32年	秋の部	衰へし蜻蛉を見る落穂哉	雑	雑
3616	明治32年	秋の部	みとり子の其子美し菊の綿	菊	植物
3617	明治32年	秋の部	穴に入る頃を野ら蛇うとましき	蛇穴に入る	動物
3618	明治32年	秋の部	いさゝかの苺を干して戸さし勝	苺干	人事
3619	明治32年	秋の部	東海に臨む旅籠や星月夜	星月夜	天文
3620	明治32年	秋の部	美しき木の葉の色や鮭の肌	鮭	動物
3621	明治32年	秋の部	末枯れし萩や芒はさびしかり	雑	雑
3622	明治32年	秋の部	よく歌ふ蚯蚓や姫の恋ならん	蚯蚓鳴く	動物
3623	明治32年	秋の部	紫の花は小さし草の秋	秋の草	植物
3624	明治32年	秋の部	末枯れし野や白日を風の吹く	末枯	植物
3625	明治32年	秋の部	巢にもよらで燕さびしき別かな	秋燕	動物
3626	明治32年	秋の部	鳥を射る蝦夷の男や秋の海	秋の海	地理
3627	明治32年	秋の部	傘をさして出てけり雨月夜	月	天文
3628	明治32年	秋の部	椎の実や神恐しき森の風	椎の實	植物
3629	明治32年	秋の部	鳴立て月は東にあらはれぬ	鳴	動物
3630	明治32年	秋の部	腸を洗はれてゐる糸瓜哉	糸瓜	植物
3631	明治32年	秋の部	女郎花折らんともせで通りけり	女郎花	植物
3632	明治32年	秋の部	山盛の栗商や後の月	後の月	天文
3633	明治32年	秋の部	長き夜の星や軒端に迫りたる	夜長	時候
3634	明治32年	秋の部	肌さむき松の鱗の雫かな	肌寒	時候
3635	明治32年	秋の部	白菊の蒼尊し天津星	菊	植物
3636	明治32年	秋の部	俳諧師秋の茄子をめでにけり	秋茄子	植物
3637	明治32年	秋の部	綿干すや路にほこりも立たぬ風	綿	植物
3638	明治32年	秋の部	鶏頭に吹溜りけり柿落葉	雑	雑
3639	明治32年	秋の部	行秋や渺茫として海の色	行秋	時候
3640	明治32年	秋の部	二ツ栗別るゝ戀もありぬべし	栗	植物
3641	明治32年	秋の部	雨の中にひとり山田の稲を刈る	稲刈	人事
3642	明治32年	秋の部	稲妻やくれて家に入るひとり者	稲妻	天文
3643	明治32年	秋の部	炭を焼く男に逢ひぬ紅葉狩	紅葉狩	人事
3644	明治32年	秋の部	白菊や夜は星辰二十八	菊	植物
3645	明治32年	秋の部	鱗閣の人誰々ぞ菊の花	菊	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3646	明治32年	秋の部	鳴子引老いては物に氣短き	鳴子	人事
3647	明治32年	秋の部	鳴子引楚の項王を怨みけり	鳴子	人事
3648	明治32年	秋の部	鳴子引秦時の民や法三章	鳴子	人事
3649	明治32年	秋の部	朝寒や白朝兒の花一ツ	朝顔	植物
3650	明治32年	秋の部	鯊釣や尾花に當る西入日	鯊釣	人事
3651	明治32年	秋の部	鶏頭も穂蓼も焦げてしまひけり	雑	雑
3652	明治32年	秋の部	枝豆や月南面の忠義堂	枝豆	植物
3653	明治32年	秋の部	落し水月は屋後に傾きぬ	落し水	地理
3654	明治32年	秋の部	物思へば夢定らず遠砧	砧	人事
3655	明治32年	秋の部	雨風や二百十日の家淋し	二百十日	時候
3656	明治32年	秋の部	思ふ事云はで桔梗の蒼哉	桔梗	植物
3657	明治32年	秋の部	長き夜の若宮を思ふ里居哉	夜長	時候
3658	明治32年	秋の部	草市や手にあまりたる物の数	草市	人事
3659	明治32年	秋の部	あざやかな願の糸や笹の露	露	天文
3660	明治32年	秋の部	少しつゝ焼米貰ふ寺子かな	焼米	人事
3661	明治32年	秋の部	油畫や玉川の里草の花	草花	植物
10587	明治32年	秋の部	裏街の踊もまじる踊かな	踊	人事
3866	明治33年	秋の部	朝貌のもの悲しくも咲き残り	朝顔	植物
3867	明治33年	秋の部	朝顔の一輪さきや濃紫	朝顔	植物
3868	明治33年	秋の部	朝顔の思ひや鉢の置所	朝顔	植物
3869	明治33年	秋の部	朝貌ののびるがまゝや花の数	朝顔	植物
3870	明治33年	秋の部	こて / \ と朝貌の鉢や俗和尚	朝顔	植物
3871	明治33年	秋の部	朝顔や水明かに星映り	朝顔	植物
3872	明治33年	秋の部	朝顔の花を描くや葉の緑	朝顔	植物
3873	明治33年	秋の部	朝顔や早起きをする胃の病	朝顔	植物
3874	明治33年	秋の部	朝顔の鉢砕けたり花の末	朝顔	植物
3875	明治33年	秋の部	朝顔を見て心よしかしまだち	朝顔	植物
3876	明治33年	秋の部	既にして秋暑からず水の家	残暑	時候
3877	明治33年	秋の部	秋暑し河伯を呪ふ川の壇	残暑	時候
3878	明治33年	秋の部	秋あつき此頃青き蝶出でぬ	残暑	時候
3879	明治33年	秋の部	秋あつく薬草實ること遅し	残暑	時候
3880	明治33年	秋の部	秋あつく御悩重らせ給ひけり	残暑	時候
3881	明治33年	秋の部	名月や伽羅たきすてゝ人もなし	名月	天文
3882	明治33年	秋の部	雨寒し刈残したる青き稻	稻	植物
3883	明治33年	秋の部	秋雨や人を弔ふ文をかく	秋の雨	天文
3884	明治33年	秋の部	しらげたる新米五升草の庵	新米	人事
3885	明治33年	秋の部	雁金も尾花も風に吹かれけり	雑	雑
3886	明治33年	秋の部	枝豆の殻ばかり憂きものはなし	枝豆	植物
3887	明治33年	秋の部	御題を賜ふ社頭の紅葉かな	紅葉	植物
3888	明治33年	秋の部	誰やらによう似た顔や相撲取	角力	人事
3889	明治33年	秋の部	相撲場に露したゝりぬ神の杉	角力	人事
3890	明治33年	秋の部	小相撲のだまされている揚屋哉	角力	人事
3891	明治33年	秋の部	乗込んだ東八ヶ國の角力哉	角力	人事
3892	明治33年	秋の部	先年の角力の跡や草の花	草花	植物
3893	明治33年	秋の部	妹にめぐり遇ひたる相撲かな	角力	人事
3894	明治33年	秋の部	小相撲や師匠の墓にすゝり泣	角力	人事
3895	明治33年	秋の部	酒飲めぬ相撲はさびし小杯	角力	人事
3896	明治33年	秋の部	相撲取の子を養へり男伊達	角力	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3897	明治33年	秋の部	食あたりして小相撲の残りけり	角力	人事
3898	明治33年	秋の部	温めもせず磊塊に澆ぐ酒	温め酒	人事
3899	明治33年	秋の部	晨々の霜ふる秋に驚きぬ	秋	時候
3900	明治33年	秋の部	また青き神の銀杏や九月尽	九月尽	時候
3901	明治33年	秋の部	紅茸に云ひ寄る菌もありぬべし	茸	植物
3902	明治33年	秋の部	毒茸の毒とも見えぬ憎み哉	茸	植物
3903	明治33年	秋の部	松茸の老いて朽ちなん憤り	松茸	植物
3904	明治33年	秋の部	鎌倉は畑ばかりや星月夜	星月夜	天文
10516	明治33年	秋の部	葦一過の雨に吹かれけり	葦	植物
10517	明治33年	秋の部	湾々の芦の花風日の夕	芦の花	植物
10518	明治33年	秋の部	蘭を得て花をいやしむひしり哉	蘭	植物
10519	明治33年	秋の部	蝸や魯智院既に山を去る	蝸	動物
10520	明治33年	秋の部	いさゝかの橋銭を守る秋の雨	秋の雨	天文
10522	明治33年	秋の部	衰残の菊に友を得つ九月尽	九月尽	時候
10523	明治33年	秋の部	月正によるし軒端の通草棚	通草	植物
10524	明治33年	秋の部	六朝の碑を読む野菊かな	野菊	植物
10525	明治33年	秋の部	風流の旅路なるかな女郎花	女郎花	植物
10526	明治33年	秋の部	風雲の影ひやゝけき木末かな	木末	天文
10527	明治33年	秋の部	石趨の踏みにじりかり女郎花	女郎花	植物
10528	明治33年	秋の部	牛頭馬頭も踊り出したる一夜哉	踊	人事
10529	明治33年	秋の部	下草の青きを見るや櫨紅葉	櫨紅葉	植物
10530	明治33年	秋の部	戀中の渋柿をおくるか思無邪	渋柿	植物
10532	明治33年	秋の部	旅籠屋や芋の名月芋団子	芋団子	人事
10533	明治33年	秋の部	魂棚鼠尾草の花哀れなり	鼠尾草	植物
10534	明治33年	秋の部	稲の花すこし風吹くならひかな	稲の花	植物
10542	明治33年	秋の部	掛稲に日は當りけり蓼の花	蓼の花	植物
10543	明治33年	秋の部	鶏の子や露の草花或るは潜り	露	天文
10544	明治33年	秋の部	豆引いて鶏頭淋し瘦せながら	鶏頭	植物
10546	明治33年	秋の部	鄙に来て踊の唄や昔ぶり	踊	人事
10550	明治33年	秋の部	鬼灯の壳を捨てたり池の上	鬼灯	植物
10551	明治33年	秋の部	驚きし夜寒の里や山あらし	夜寒	時候
10552	明治33年	秋の部	蕎麥咲や晴れたる川の照反し	蕎麥	植物
10562	明治33年	秋の部	甘酒を飲んで旦の暇乞	甘酒	人事
10565	明治33年	秋の部	朝顔や朝戸あけたる典座敷	朝顔	植物
10566	明治33年	秋の部	小淋しく雨降る宵や高燈籠	燈籠	人事
10567	明治33年	秋の部	虫鳴くや落窪の君人を待つ	虫鳴く	動物
10568	明治33年	秋の部	名月や馬上ゆゝしき金覆輪	名月	天文
10570	明治33年	秋の部	新渋の瓶に日あたる戸口なか	新渋	人事
10571	明治33年	秋の部	南山の秋に対して澹如たり	秋	時候
10572	明治33年	秋の部	逞しき渋柿の木や古き家	渋柿	植物
10573	明治33年	秋の部	芍薬の根を分けて或は薬とす	芍薬の根	植物
10574	明治33年	秋の部	菊咲いて酒の琥珀の光あり	菊	植物
10575	明治33年	秋の部	稻刈りて積蓼に夕日當りけり	稻刈	人事
10535	明治33年	秋の部	ひやゝかに覚えてさめし宵寝哉	冷か	時候
10536	明治33年	秋の部	鹿笛に依々たる鹿の想ひかな	鹿笛	動物
10537	明治33年	秋の部	鳴子引く郡の太守を見送りぬ	鳴子引く	人事
10538	明治33年	秋の部	冷やしたる梨の皮むく刃哉	梨	植物
10541	明治33年	秋の部	妻なくて砧の盤の夜露かな	砧	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
10545	明治33年	秋の部	老いて猶砧うつなる母悲し	砧	人事
10549	明治33年	秋の部	小鳥狩愚に生れたる家老の子	小鳥狩	人事
10576	明治33年	秋の部	臨終の物たまはぬ夜寒かな	夜寒	時候
10539	明治33年	秋の部	靱磨や奥に泊めたる俳諧師	靱磨	人事
10540	明治33年	秋の部	靱磨の歌も歌はぬか夫婦哉	靱磨	人事
4085	明治34年	秋の部	草花も悲しとや見む親にして	草花	植物
4086	明治34年	秋の部	虫の音にあこがるゝ身も恋にこそ	蟲	動物
4087	明治34年	秋の部	思ひつゝ寐よとや虫の鳴くならん	蟲	動物
4088	明治34年	秋の部	草に鳴く虫や月夜のたまり水	蟲	動物
4089	明治34年	秋の部	鳴く虫の其父をよび母をよび	蟲	動物
4090	明治34年	秋の部	踊夜の西する月ややるせなき	踊	人事
4091	明治34年	秋の部	故郷に一ト夜は踊るなつかしみ	踊	人事
4092	明治34年	秋の部	樂みは昔ながらの踊かな	踊	人事
4093	明治34年	秋の部	踊見に出たいと思ふ夕餉哉	踊	人事
4094	明治34年	秋の部	蛇の身の斑に光り秋暑し	残暑	時候
4095	明治34年	秋の部	関白の様な兒して瓢かな	瓢	植物
4096	明治34年	秋の部	かき買と去来と見上く梢かな	柿	植物
4097	明治34年	秋の部	渋かるとなぶられ去ぬ柿をなご	柿	植物
4098	明治34年	秋の部	柿食へばどこか渋いかなどゝ禪	柿	植物
4099	明治34年	秋の部	しぶかきや載ち奔る陶淵明	柿	植物
4100	明治34年	秋の部	新藁に且ちる柿の紅葉哉	柿紅葉	植物
4101	明治34年	秋の部	落人に歌を讀みけり木賊刈	木賊刈	人事
4102	明治34年	秋の部	濁酒に赤菊の宿も小うれしき	菊	植物
4103	明治34年	秋の部	落鮎の網に入りけり暮の雨	鯖鮎	動物
4104	明治34年	秋の部	庭鳥に紫苑の露や吹きつける	紫苑	植物
4105	明治34年	秋の部	峯入は皆柿道心とや申す	柿	植物
4106	明治34年	秋の部	落雷の杉の一ト木や草紅葉	草錦	植物
4107	明治34年	秋の部	日に當る岩の裸や蔦紅葉	蔦紅葉	植物
4108	明治34年	秋の部	何虫の身にしみどゝと鳴音かな	蟲	動物
4109	明治34年	秋の部	鰯引あすは雨ちやと申しけり	鰯引	人事
4110	明治34年	秋の部	登臨の客鯉魚風に嘆ずらく	秋の風	天文
4111	明治34年	秋の部	一尺の布を縫ひある夜寒かな	夜寒	時候
4112	明治34年	秋の部	二氣未だ合はず恁麼の瓢かな	瓢	植物
4113	明治34年	秋の部	三逕や秋の氣を吐く松の老	秋	時候
4114	明治34年	秋の部	四方皆嶽恐ろしき月夜かな	月	天文
4115	明治34年	秋の部	五音和す月夜の鐘や水の上	月	天文
4116	明治34年	秋の部	清瀨の上を且ちる日の夕	且散る	植物
4117	明治34年	秋の部	虫鳴いて物のあはれと覚えけり	蟲	動物
4118	明治34年	秋の部	虫の音の露に消入る思ひかな	蟲	動物
4119	明治34年	秋の部	鳴虫の玉をころがす美音哉	蟲	動物
4120	明治34年	秋の部	虫鳴くや憂さに堪へざる小夜衣	蟲	動物
4121	明治34年	秋の部	魑魅去て木に住む虫の鳴くさびし	蟲	動物
4122	明治34年	秋の部	宿貧し虫の来て鳴く古壘	蟲	動物
4123	明治34年	秋の部	客泊めて浮世話や踊の夜	踊	人事
4124	明治34年	秋の部	月に打つ踊太鼓や人少な	踊	人事
4125	明治34年	秋の部	寺の樹をとよもす踊太鼓かな	踊	人事
4126	明治34年	秋の部	漢宮の踊秦時の名月に	踊	人事
4127	明治34年	秋の部	雨雲を恐れ心の踊かな	踊	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4128	明治34年	秋の部	三人の娘踊のたくみ哉	踊	人事
4129	明治34年	秋の部	疫ありて小村につどふ踊かな	踊	人事
4130	明治34年	秋の部	ありたけの水を吐いたる糸瓜哉	糸瓜	植物
4131	明治34年	秋の部	養老の賜もあり稲の花	稲の花	植物
4132	明治34年	秋の部	松の実を踏んで境内ありきけり	新松子	植物
4133	明治34年	秋の部	唐きびの影も月夜の眺かな	唐黍	植物
4134	明治34年	秋の部	つと入を待まうけたる主哉	衝突入	人事
4135	明治34年	秋の部	犬殺梨の木老いて実らざり	梨	植物
4136	明治34年	秋の部	ながらへて何の糸瓜のぶら下り	糸瓜	植物
4137	明治34年	秋の部	蠹ふるやうはばみ穴に入る夕	蛇穴に入る	動物
4138	明治34年	秋の部	蛇穴に入りてしまひしけはひ哉	蛇穴に入る	動物
4139	明治34年	秋の部	戀蛇の穴に入るべき別かな	蛇穴に入る	動物
4140	明治34年	秋の部	蛇穴に入るや彼岸の日は西へ	蛇穴に入る	動物
4141	明治34年	秋の部	蛇穴に入る頃草のにしきかな	蛇穴に入る	動物
4142	明治34年	秋の部	蛇穴に入らんと思ふ覚悟かな	蛇穴に入る	動物
4143	明治34年	秋の部	人の世はこんなものとて蛇穴へ	蛇穴に入る	動物
4144	明治34年	秋の部	草を打ち蛇をして穴に入らしめぬ	蛇穴に入る	動物
4145	明治34年	秋の部	蛇穴に入れば松風蘿月哉	蛇穴に入る	動物
4146	明治34年	秋の部	蛇穴に入りてみゝづの唄ひかな	蛇穴に入る	動物
4147	明治34年	秋の部	宮様の茲に御成や草錦	草錦	植物
4148	明治34年	秋の部	畏しや武徳は秋の氣の如し	秋	時候
4149	明治34年	秋の部	風を切てそれ矢の行くへ秋の空	秋の空	天文
4150	明治34年	秋の部	秋風を斬て太刀鳴る壯ん也	秋の風	天文
4151	明治34年	秋の部	蓮の実の飛ぶよと見れば柔ら哉	蓮實飛ぶ	植物
4152	明治34年	秋の部	秋駒の勝ほこりたる足掻哉	馬肥ゆる	動物
4153	明治34年	秋の部	自転車を下りて紫苑に歩みよる	紫苑	植物
4154	明治34年	秋の部	唐にしき大和にしきや花草	草花	植物
4155	明治34年	秋の部	音楽の空に聞ゆる月夜哉	月	天文
4156	明治34年	秋の部	麦酒のんでそぞろ寒兒してゐたり	そぞろ寒	時候
4157	明治34年	秋の部	蓮の実の飛とも知らで達磨哉	蓮實飛ぶ	植物
4158	明治34年	秋の部	蓮の実の飛とは見えてうつゝ哉	蓮實飛ぶ	植物
4159	明治34年	秋の部	菊は皆蒼なりけり後の雛	後の雛	人事
4160	明治34年	秋の部	朝戸出のみかん畑や秋の霜	秋の霜	天文
4161	明治34年	秋の部	水をふいて大きな梨や二ツわり	梨	植物
4162	明治34年	秋の部	徒らに物の悲しき花野哉	花野	地理
4163	明治34年	秋の部	沙魚釣の沙魚やく店や新走	新酒	人事
4164	明治34年	秋の部	秋風の藪も鳥もぬかご哉	秋の風	天文
4165	明治34年	秋の部	よき虫の選にもれし美音哉	蟲	動物
4166	明治34年	秋の部	新蕎麦に芭蕉の噂したりけり	新蕎麥	人事
4167	明治34年	秋の部	豆引に誘はる朝の日和かな	豆引	人事
10554	明治34年	秋の部	紅葉狩白衣の人に逢へりけり	紅葉狩	人事
10555	明治34年	秋の部	君見ずや松露は松の露と書く	露	天文
4567	明治35年	秋の部	秋の水仙家の鍋を閑却す	秋の水	地理
4568	明治35年	秋の部	釣人の夕腹へりぬ萩の風	萩	植物
4569	明治35年	秋の部	朝顔に日あたる頃や暇乞	朝顔	植物
4570	明治35年	秋の部	初嵐夜天文を覗ひぬ	初嵐	天文
4571	明治35年	秋の部	月明の清きに耐へず桐一葉	桐一葉	植物
4573	明治35年	秋の部	なく虫の今宵もなきぬ然れども	蟲	動物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4575	明治35年	秋の部	別れんとすれば一劔秋に鳴る	秋	時候
4576	明治35年	秋の部	僧よりも瘦せたる蘭の緑かな	蘭	植物
4577	明治35年	秋の部	蘭を獲て氣傲る人や去にけり	蘭	植物
4578	明治35年	秋の部	幽谷に蘭あり美ナル哉之ノ子	蘭	植物
4579	明治35年	秋の部	風蘭の姿や轉夕君を思ふ	蘭	植物
4580	明治35年	秋の部	蘭に鳴く虫に紙燭や兒の顔	蘭	植物
4581	明治35年	秋の部	西瓜きれば故人偶々過ぎりけり	西瓜	植物
4582	明治35年	秋の部	戀歌の秋の部よみぬ小夜枕	秋	時候
4583	明治35年	秋の部	西瓜喰ふ宵の剪燈新話哉	西瓜	植物
4584	明治35年	秋の部	庭上の爽氣や粥をすゝりけり	爽か	時候
4585	明治35年	秋の部	秋寒し雨にうたるゝ紅芙蓉	芙蓉	植物
4586	明治35年	秋の部	目さむれば蚊帳の萌黄も九月哉	九月	時候
4587	明治35年	秋の部	枝豆や月明らかに人の兒	枝豆	植物
4588	明治35年	秋の部	蝶の翼秋海棠に力なし	秋海棠	植物
4589	明治35年	秋の部	捨扇さながら人の戀しけれ	秋扇	人事
4590	明治35年	秋の部	寂として蘭に水わく山の中	蘭	植物
4591	明治35年	秋の部	旭巳にとんぼ飛ぶなり花芙蓉	芙蓉	植物
4592	明治35年	秋の部	白きものに愛着もなき木槿哉	木槿	植物
4593	明治35年	秋の部	長吉が出世取巻く角力かな	角力	人事
4594	明治35年	秋の部	目指されて踊出でたり男振	踊	人事
4595	明治35年	秋の部	踊から呼戻されし一人哉	踊	人事
4596	明治35年	秋の部	薬園の花こぼれけり秋の水	秋の水	地理
4597	明治35年	秋の部	唐黍に月落かゝる野分哉	野分	天文
4598	明治35年	秋の部	唐黍にかくるゝ戀や尻の冷え	唐黍	植物
4599	明治35年	秋の部	釣竿も見えず萩吹く風ばかり	萩	植物
4600	明治35年	秋の部	岩上の松影をふむ氣爽か	爽か	時候
4601	明治35年	秋の部	朝兒の主はわかし文章生	朝顔	植物
4602	明治35年	秋の部	早稲の香や病もいえてかしま立	稻	植物
4603	明治35年	秋の部	早稲咲いて水こゝろよき旦哉	稻	植物
4604	明治35年	秋の部	臨濟の口の廣さよ蓮の実が	蓮實飛ぶ	植物
4605	明治35年	秋の部	白萩を佛の花と手折りけり	萩	植物
4606	明治35年	秋の部	無東西只秋風の声をきく	秋の風	天文
10583	明治35年	秋の部	秋涼し人の眼に立つ大構ひ	秋涼し	天文
10591	明治35年	秋の部	草花をよしとよく見て描かれし	草花	植物

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
184	明治27年	冬の部	小春日の竿に並べる雀かな	小春	時候
185	明治27年	冬の部	月に吠ゆる犬や十夜の人帰る	十夜	人事
186	明治27年	冬の部	夕しぐれ佐野のわたりを古法師	時雨	天文
187	明治27年	冬の部	箱根越えて灯ともす村のしぐれける	時雨	天文
188	明治27年	冬の部	落潮のいさり火遠くしぐれけり	時雨	天文
189	明治27年	冬の部	船千艘しぐれて暮るゝ港かな	時雨	天文
190	明治27年	冬の部	大方はしくれて衛士の篝かな	時雨	天文
191	明治27年	冬の部	木枯の海山暮れて静かなり	凧	天文
192	明治27年	冬の部	鶏なくや霜の晨の村外れ	霜	天文
193	明治27年	冬の部	霜白し十萬軒の鬼瓦	霜	天文
194	明治27年	冬の部	霜の夜の狐鳴くなり多賀の城	霜	天文
195	明治27年	冬の部	霜白し上人帰る嵯峨の奥	霜	天文
196	明治27年	冬の部	霜の荒野灯残る村のつゞきける	霜	天文
197	明治27年	冬の部	霜きら / \ 朝賀の車つゞきける	霜	天文
198	明治27年	冬の部	月きら / \ 龍湖の氷音もなし	氷	天文
199	明治27年	冬の部	すさましや氷さけたる外がはま	氷	天文
200	明治27年	冬の部	谷底に猪死で氷りける	氷	天文
201	明治27年	冬の部	雪折れの竹の大藪すさまじや	雪折れ	植物
202	明治27年	冬の部	雪の夜を月下の駒の見えずなり	雪	天文
203	明治27年	冬の部	上苑に鶴なく霜のあしたかな	霜	天文
204	明治27年	冬の部	雪の夜や峰を隔てゝ人の声	雪	天文
205	明治27年	冬の部	一山の木魚絶えたり夜の雪	雪	天文
206	明治27年	冬の部	あけぼのや雪の松原馬じるし	雪	天文
207	明治27年	冬の部	冬籠密柑の皮の散らばりぬ	冬籠	人事
208	明治27年	冬の部	冬籠麓の村の鶏の声	冬籠	人事
209	明治27年	冬の部	東路に尼ひとり泣く炬燵かな	炬燵	人事
210	明治27年	冬の部	京の人の文かいてゐる炬燵かな	炬燵	人事
211	明治27年	冬の部	老僧の火桶抱へて眠りける	火桶	人事
212	明治27年	冬の部	吾妹子の袖口赤き火桶かな	火桶	人事
213	明治27年	冬の部	炭がまや昔ながらの八瀬の奥	炭がま	人事
214	明治27年	冬の部	侍の臍あらはなる蒲團かな	蒲團	人事
215	明治27年	冬の部	紙衣着て京に歌よむ男あり	紙衣	人事
217	明治27年	冬の部	頭巾脱いて萬歳謠ふ翁かな	頭巾	人事
218	明治27年	冬の部	旗竿の一段高し冬木立	冬木	植物
219	明治27年	冬の部	うつくしや枯木の中の日の御旗	枯木	植物
220	明治27年	冬の部	裏町や干菜の軒の日のみ旗	干菜	人事
221	明治27年	冬の部	井戸端の大根白き寒さかな	寒さ	時候
222	明治27年	冬の部	角灯の谷中を通る寒さかな	寒さ	時候
223	明治27年	冬の部	竹揺れて湖上の星の寒さかな	寒さ	時候
224	明治27年	冬の部	霜やけの手を并べたる寺子哉	霜焼	人事
225	明治27年	冬の部	狼の水にかゞむや冬の月	冬の月	天文
226	明治27年	冬の部	冬の月鳥居をくゞる狂女哉	冬の月	天文
227	明治27年	冬の部	大比叡の雲脚はやし冬の月	冬の月	天文
228	明治27年	冬の部	車去て都大路の月さむし	寒月	天文
229	明治27年	冬の部	殿前の羽林の鋒や冬の月	冬の月	天文
230	明治27年	冬の部	寒月の廊下を通る局かな	寒月	天文
231	明治27年	冬の部	月さむし御講の堤牛車	寒月	天文
232	明治27年	冬の部	冬されの畑に出でたり狐の子	冬ざれ	時候

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
233	明治27年	冬の部	破巢の梢に高し冬の山	冬山	天文
234	明治27年	冬の部	鳥の糞巖に白し冬の山	冬山	天文
235	明治27年	冬の部	順礼の母に追ひつく枯野哉	枯野	天文
236	明治27年	冬の部	落葉して笥の音の細りゆく	落葉	植物
237	明治27年	冬の部	鐘樓の瓦古りにたり冬木立	冬木	植物
238	明治27年	冬の部	僧入定山茶花一枝こぼれける	山茶花	植物
239	明治27年	冬の部	山茶花のほろ / \ と散る伽藍かな	山茶花	植物
240	明治27年	冬の部	むさし野の尾花枯れたり月われたり	枯芒	植物
241	明治27年	冬の部	尾花枯れて月落る野の果もなし	枯芒	植物
242	明治27年	冬の部	舟去て古渡の枯芦暮れにける	枯蘆	植物
243	明治27年	冬の部	草枯れて土手の夕日の力なし	草枯	植物
244	明治27年	冬の部	からかきの縁に散らばる苔屋哉	蛎	動物
245	明治27年	冬の部	月更けて水鳥もなし加茂川原	水鳥	動物
246	明治27年	冬の部	漣や岩に寄來るをしニツ	鴛鴦	動物
247	明治27年	冬の部	旭さすや鴛鴦眠る石の上	鴛鴦	動物
248	明治27年	冬の部	なく千鳥傾城伽羅をたく夕	千鳥	動物
249	明治27年	冬の部	餅蜜柑吹革祭の棚黒し	吹革祭	人事
250	明治27年	冬の部	火起して吹革祭の袴かな	吹革祭	人事
251	明治27年	冬の部	行列や東海道の枯柳	枯柳	植物
252	明治27年	冬の部	大師講背戸に女の声すなり	大師講	人事
253	明治27年	冬の部	風呂吹に一山の僧居並べり	風呂吹	人事
254	明治27年	冬の部	河豚汁や机の上の普門品	河豚汁	人事
255	明治27年	冬の部	河豚汁飽くまで喰ふ女かな	河豚汁	人事
256	明治27年	冬の部	経よむや河豚喰ふたる兒もあり	河豚	動物
257	明治27年	冬の部	入る月の沖に汐吹く鯨かな	鯨	動物
258	明治27年	冬の部	大鷹の明星睨む梢かな	鷹	動物
259	明治27年	冬の部	古曆木賃の宿に残りけり	古曆	人事
260	明治27年	冬の部	赤鬚の市に出でたり年のくれ	年の暮	時候
261	明治27年	冬の部	行年を尼ひとり泣く関の宿	行年	時候
262	明治27年	冬の部	宿かりて煤掃く旅の法師かな	煤拂	人事
263	明治27年	冬の部	瘦犬の何をあさるぞ冬の村	冬	時候
265	明治27年	冬の部	死馬を引出す冬の小村かな	冬	時候
266	明治27年	冬の部	煤掃に馬引出す小家かな	煤拂	人事
267	明治27年	冬の部	行年の馬士のさげたる何魚ぞ	行年	時候
400	明治28年	冬の部	散紅葉笥斜に水細し	散紅葉	植物
401	明治28年	冬の部	水青うして兩岸の紅葉散る	散紅葉	植物
402	明治28年	冬の部	凧の終日土手を打て鳴る	凧	天文
403	明治28年	冬の部	凧や湖上の星のきらめきぬ	凧	天文
404	明治28年	冬の部	狐火のしぐれ / \ て消ゆるなり	狐火	天文
405	明治28年	冬の部	垣朽ちて我紙衾あらはなる	衾	人事
406	明治28年	冬の部	頭巾もて塞いでも見たり壁の穴	頭巾	人事
407	明治28年	冬の部	宮柱太敷立て神の留主	神の旅	人事
408	明治28年	冬の部	古沓や又古沓や霜の朝	霜	天文
409	明治28年	冬の部	きら / \ と小春の杉の梢かな	小春	時候
411	明治28年	冬の部	君がため名所旧跡時雨せん	時雨	天文
413	明治28年	冬の部	羅漢達されども寒き夜をいかむ	寒さ	時候
414	明治28年	冬の部	小夜時雨そこ行く人や誰候	時雨	天文
415	明治28年	冬の部	羽をり / \ 鴨の羽たゝく音すなり	鴨	動物

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
416	明治28年	冬の部	寒月を漕ぎ帰るなり渡守	寒月	天文
417	明治28年	冬の部	初冬の取敢へず酒を買ひにけり	初冬	時候
418	明治28年	冬の部	寺子らが手を並べたる火桶かな	火桶	人事
419	明治28年	冬の部	落葉さら / \ 僧は叩く月下の門	落葉	植物
420	明治28年	冬の部	夕風や伽藍の落葉吹きまくる	落葉	植物
421	明治28年	冬の部	石壇の落葉ふみ / \ 僧かへる	落葉	植物
422	明治28年	冬の部	君見よや簀の子の落葉朽ちもせん	落葉	植物
423	明治28年	冬の部	枯蔓の梢より吹落されぬ	枯蔓	植物
424	明治28年	冬の部	哀れ菊枯れたる中の花一ツ	枯菊	植物
425	明治28年	冬の部	達磨忌や塞いで見たる壁の穴	達磨忌	人事
426	明治28年	冬の部	達磨忌や夜更けてはらり壁の土	達磨忌	人事
427	明治28年	冬の部	冬枯や厠の屋根の鳥の糞	冬枯	植物
428	明治28年	冬の部	鉢叩轉べばひさご碎けなん	鉢叩	人事
429	明治28年	冬の部	鉢叩七十八と答へけり	鉢叩	人事
430	明治28年	冬の部	鉢叩たゝかで帰る時悲し	鉢叩	人事
431	明治28年	冬の部	そこ退けよ罷出でたり鉢叩	鉢叩	人事
432	明治28年	冬の部	更くる夜の瓦をすべる落葉かな	落葉	植物
433	明治28年	冬の部	つくねんと雑魚寝にもるゝ一人かな	雑魚寝	人事
434	明治28年	冬の部	あちら向きこちら向くなり年こもり	年籠	人事
435	明治28年	冬の部	年守夜せう事なしのともしかな	年籠	人事
436	明治28年	冬の部	大年の乳児這上る俵かな	大晦日	時候
437	明治28年	冬の部	人の家のいさかひやみて除夜の雨	除夜	時候
438	明治28年	冬の部	大晦日小判落した人の行く	大晦日	時候
439	明治28年	冬の部	小晦日いさゝか掃きぬ門の雪	小晦日	時候
440	明治28年	冬の部	春近き芥の上の芥かな	春近し	時候
441	明治28年	冬の部	寺男汝も春待つか立てある	春待	時候
442	明治28年	冬の部	油尽きて火消えて年流れたり	行年	時候
443	明治28年	冬の部	力なく年の梢を入る日かな	年の暮	時候
444	明治28年	冬の部	我年は下の五文字の名残かな	年の名残	時候
445	明治28年	冬の部	年一ト夜いさゝか惜しき思あり	除夜	時候
446	明治28年	冬の部	行年をうなる文よむ隣かな	行年	時候
447	明治28年	冬の部	年の暮偶々鳥が飛んでゆく	年の暮	時候
448	明治28年	冬の部	掛取に狩野の一軸を説き明かす	掛乞	人事
449	明治28年	冬の部	二三人侍衆の年わすれ	年忘	人事
450	明治28年	冬の部	二三人何を語りて年忘	年忘	人事
451	明治28年	冬の部	面白や權兵衛が宿の宵飾	門松立つ	人事
453	明治28年	冬の部	折しも時雨盗人何処を駆抜くらむ	時雨	天文
871	明治29年	冬の部	大根の引残されて拔出でたり	大根	植物
872	明治29年	冬の部	骨鳴るべく木枯の不動立ってある	凧	天文
873	明治29年	冬の部	凧の海を渡りて鞆鞆へ	凧	天文
874	明治29年	冬の部	雲黄なり江北一帯冬枯れつ	冬枯	植物
875	明治29年	冬の部	行くこと十歩にして野は枯れ天空し	枯野	天文
876	明治29年	冬の部	枯野行き尽くる處のほとり海を見る	枯野	天文
877	明治29年	冬の部	氷月夜天未黒き北氷洋	氷	天文
878	明治29年	冬の部	人も居らず鉢植の菊枯れてあり	枯菊	植物
879	明治29年	冬の部	縁先や根こぎにしたる菊枯れつ	枯菊	植物
880	明治29年	冬の部	掃溜や枯れたる中の菊の葉青み	枯菊	植物
881	明治29年	冬の部	枯菊の半刈られて半あり	枯菊	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
882	明治29年	冬の部	病む菊の此夕暮を枯れにける	枯菊	植物
883	明治29年	冬の部	菊枯れて荷馬引込む畑かな	枯菊	植物
884	明治29年	冬の部	畑中や菊二三本枯れて立つ	枯菊	植物
885	明治29年	冬の部	墓原菊も何も枯れて夕嵐	枯菊	植物
886	明治29年	冬の部	枯れたるをばたばねあげたり菊畑	枯菊	植物
887	明治29年	冬の部	菊枯れて下駄痕多き畑かな	枯菊	植物
888	明治29年	冬の部	一束の枯れし菊たよふ野川かな	枯菊	植物
889	明治29年	冬の部	墓守の枯菊を焚くべく積上げつ	枯菊	植物
890	明治29年	冬の部	原中に人を賣るなり冬の月	冬の月	天文
891	明治29年	冬の部	冬枯の城南は半ば城北は皆	冬枯	植物
892	明治29年	冬の部	凧や折れて飛散る桑の枝	凧	天文
893	明治29年	冬の部	畑中や桑冬枯れて風白く	冬枯	植物
894	明治29年	冬の部	凧の山川蒼々茫々と	凧	天文
895	明治29年	冬の部	葬かあらぬか白旗ばかり枯野くる	枯野	天文
896	明治29年	冬の部	家五六を北に見て行く枯野かな	枯野	天文
897	明治29年	冬の部	里あり家五六にして更に枯野かな	枯野	天文
898	明治29年	冬の部	握飯喰て疝氣起すべく野は枯れぬ	枯野	天文
899	明治29年	冬の部	野は枯れて小さき赤い鳥居見えつ	枯野	天文
900	明治29年	冬の部	物も云はで枯野を通る主従かな	枯野	天文
901	明治29年	冬の部	ところ／＼石ころ高き枯野かな	枯野	天文
902	明治29年	冬の部	枯野ゆけば真紅の紐の落ちてあり	枯野	天文
903	明治29年	冬の部	鶏の畔傳ひ行く小春かな	小春	時候
904	明治29年	冬の部	小春日や網干してある磯つづき	小春	時候
905	明治29年	冬の部	しぐるゝや鴉がとまる濡標	時雨	天文
906	明治29年	冬の部	汨羅あたり三閭の太夫しぐれける	時雨	天文
907	明治29年	冬の部	谷底の灯火一つしぐれける	時雨	天文
908	明治29年	冬の部	霜の陣此の夜周瑜死すと傳ふ	霜	天文
909	明治29年	冬の部	詔を階下に受くる霜夜かな	霜夜	時候
910	明治29年	冬の部	満天の雪に楚江を渡るかな	雪	天文
911	明治29年	冬の部	呉か越か雪の曙島も見えず	雪	天文
912	明治29年	冬の部	駅路や雪のあけぼの鈴の音	雪	天文
913	明治29年	冬の部	雪のあした紫の上光る君	雪	天文
914	明治29年	冬の部	天幕に李陵泣くなり冬の月	冬の月	天文
915	明治29年	冬の部	曉に匈奴出でたり雪の丘	雪	天文
916	明治29年	冬の部	営に火して單于逃げたり冬の月	冬の月	天文
917	明治29年	冬の部	寒月に将士皆泣く遺詔かな	寒月	天文
918	明治29年	冬の部	切支丹のがらすの窓や冬の月	冬の月	天文
919	明治29年	冬の部	寒月の大鋸や木挽小屋	寒月	天文
920	明治29年	冬の部	寒月の首桶并ぶ野陣かな	寒月	天文
921	明治29年	冬の部	牢内の錠音高き寒さかな	寒さ	時候
922	明治29年	冬の部	首枷に流罪の人の寒さかな	寒さ	時候
923	明治29年	冬の部	首桶の首のがたつく寒さかな	寒さ	時候
924	明治29年	冬の部	鐘樓古く一山の木葉落尽す	落葉	植物
925	明治29年	冬の部	落葉の白帝城上鴉啼く	落葉	植物
926	明治29年	冬の部	木枯や呉江に艤する三千艘	凧	天文
927	明治29年	冬の部	枯芦や石碣村の家五六	枯蘆	植物
928	明治29年	冬の部	一村は干菜つる軒日午なり	干菜	人事
929	明治29年	冬の部	苞に居てなまこ何をか夢むらん	海鼠	動物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
930	明治29年	冬の部	東の方海に入てなまこを見たりける	海鼠	動物
931	明治29年	冬の部	覇業未だ成らずなまこに恨あり	海鼠	動物
932	明治29年	冬の部	なまことは王者の道かそも覇者か	海鼠	動物
933	明治29年	冬の部	暁天に納豆打つなり媪が茶屋	納豆	人事
934	明治29年	冬の部	櫓の火や木曾の冠者の幼き	櫓	人事
935	明治29年	冬の部	櫓の火に六韜をよむ男かな	櫓	人事
936	明治29年	冬の部	櫓の火や南朝の遺臣姓は和田	櫓	人事
937	明治29年	冬の部	板額の何やら縫へる櫓火かな	櫓	人事
938	明治29年	冬の部	炭ついでしばしもくねんとしたりける	炭	人事
939	明治29年	冬の部	はり / \ と何やはねる炭火かな	炭	人事
940	明治29年	冬の部	薄衾かぶりつ / \ 苦吟かな	衾	人事
941	明治29年	冬の部	足が出て詮方もなきふとんかな	蒲團	人事
942	明治29年	冬の部	物思ひ居ればたんぼのさめやすき	湯たんぼ	人事
943	明治29年	冬の部	一人寝てたんぼさめたる夜半かな	湯たんぼ	人事
944	明治29年	冬の部	俳諧や炬燵もなく二人ゐる	炬燵	人事
945	明治29年	冬の部	あるは詩書あるは礼樂冬籠	冬籠	人事
946	明治29年	冬の部	更くる夜の裾野のあたり里かぐら	神樂	人事
947	明治29年	冬の部	鉢叩とは謠曲の名なるべく	鉢叩	人事
948	明治29年	冬の部	雪丸げ二つに割れし恨かな	雪遊び	人事
949	明治29年	冬の部	起きて見ればひとり月下の雪佛	雪達磨	人事
950	明治29年	冬の部	後向いて入定したり雪佛	雪達磨	人事
951	明治29年	冬の部	雪佛に簞笠させて笑ひける	雪達磨	人事
952	明治29年	冬の部	案山子にも似て哀れなり雪佛	雪達磨	人事
953	明治29年	冬の部	胡兒驕る塞上塞下の吹雪かな	吹雪	天文
954	明治29年	冬の部	士卒五千匈奴に降る吹雪哉	吹雪	天文
955	明治29年	冬の部	勅をきいて一軍振ふあられかな	霰	天文
956	明治29年	冬の部	早打の輿に打込む霰かな	霰	天文
957	明治29年	冬の部	徳利もてば霰はね返る野道かな	霰	天文
958	明治29年	冬の部	江を渡り中流にして霰かな	霰	天文
959	明治29年	冬の部	瀧壺に氷柱見上るあしたかな	垂氷	天文
960	明治29年	冬の部	尼若くつらゝを折て棄てにける	垂氷	天文
961	明治29年	冬の部	染物の紫も朱もつらゝかな	垂氷	天文
962	明治29年	冬の部	有明や田毎 / \ のうす氷	薄氷	地理
963	明治29年	冬の部	紅といた皿の中なる氷かな	氷	天文
964	明治29年	冬の部	薄氷に紅こぼしたる女かな	薄氷	地理
965	明治29年	冬の部	張りつめし氷の中の巖かな	氷	天文
966	明治29年	冬の部	鷹の子や越の海岸岩多き	鷹	動物
967	明治29年	冬の部	たか狩や日暮れて帰る左賢王	鷹狩	人事
968	明治29年	冬の部	乾坤は正に五更の氷かな	氷	天文
969	明治29年	冬の部	君に侑む世に乾鮭もまた風流	乾鮭	人事
970	明治29年	冬の部	よき人の笑ませ給ふや薬くひ	薬喰	人事
971	明治29年	冬の部	薬喰頻りに客にすゝめける	薬喰	人事
972	明治29年	冬の部	薬喰を見てゐる妻の美しくしき	薬喰	人事
973	明治29年	冬の部	薬喰すべく火を焚く古廟かな	薬喰	人事
974	明治29年	冬の部	薬には狸なんどもよかるべく	狸	動物
975	明治29年	冬の部	狸なんど下司の喰ふべきものなるぞ	狸	動物
976	明治29年	冬の部	薬喰ひて大の字に寐たる男哉	薬喰	人事
977	明治29年	冬の部	麾下の士が公の愛馬を薬喰ひ	薬喰	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
978	明治29年	冬の部	薬喰ふて鍋かぶりたる法師かな	薬喰	人事
979	明治29年	冬の部	あかざりに墨つけて見る寺子かな	靱	人事
980	明治29年	冬の部	水鼻やひとり遺文をよむ灯下	水鼻	人事
981	明治29年	冬の部	雪杳や幼きものは主なるべく	雪杳	人事
982	明治29年	冬の部	慕直に雪車乗下ろす谷間哉	雪舟	人事
983	明治29年	冬の部	師走八日雪ふれば寒き日なりける	師走	時候
984	明治29年	冬の部	寒垢離や入れずみしたる大男	寒垢離	人事
985	明治29年	冬の部	月西へ寒念佛の鉦遠くなり	寒念佛	人事
986	明治29年	冬の部	あれ聞けよ宿るべき村の寒念佛	寒念佛	人事
987	明治29年	冬の部	肉さげて魯智深なるべく寒ね佛	寒念佛	人事
988	明治29年	冬の部	豆打て何やら唱ふひとりもの	豆まき	人事
989	明治29年	冬の部	煤掃かんと大黒抱く男かな	煤拂	人事
990	明治29年	冬の部	掃けど / \ 不動御像煤びたる	煤拂	人事
991	明治29年	冬の部	せんなしや乳児這出づる煤掃ひ	煤拂	人事
992	明治29年	冬の部	煤掃に軍歌を唱ふ隣の子	煤拂	人事
993	明治29年	冬の部	煤掃に如來の腕の欠けが出る	煤拂	人事
994	明治29年	冬の部	京の六右エ門殿とやら節季候	節季	時候
995	明治29年	冬の部	此あたりに隠れもない節季候にて候	節季	時候
996	明治29年	冬の部	年の市に組板叩く男かな	年の市	人事
997	明治29年	冬の部	立て話す京の男や年の市	年の市	人事
998	明治29年	冬の部	うき人の古曆見て居たりける	古曆	人事
999	明治29年	冬の部	寄合ふて年忘する木賃かな	年忘	人事
1000	明治29年	冬の部	鶏啼いて師走とも見えぬ小村かな	師走	時候
1001	明治29年	冬の部	二三疋師走の村の犬吠えぬ	師走	時候
1002	明治29年	冬の部	年の暮劉備筵を織て居る	年の暮	時候
1003	明治29年	冬の部	行年に何の書をよむ子房ぞも	行年	時候
1004	明治29年	冬の部	狐落す咒文高らかに年の暮	年の暮	時候
1005	明治29年	冬の部	臘八や里に啼く日は里鴉	臘八	人事
1006	明治29年	冬の部	餅の村にわが宿るべき村もなし	餅	人事
10650	明治29年	冬の部	鉢植の菊枯れて縁にころがりぬ	菊枯れ	植物
1627	明治30年	冬の部	湯婆温めて母にまゐらす看護哉	湯たんぼ	人事
1628	明治30年	冬の部	蒲團重くしはぶき苦し夜中頃	蒲團	人事
1629	明治30年	冬の部	薬より更に湯婆を愛すかな	湯たんぼ	人事
1630	明治30年	冬の部	病む母に配られし衣見せ申す	衣配	人事
1631	明治30年	冬の部	市に住んで医者に閑あり年の暮	年の暮	時候
1632	明治30年	冬の部	一村に疫あり餅の音もなし	餅	人事
1633	明治30年	冬の部	雑魚寐して風を引いたる男かな	雑魚寝	人事
1634	明治30年	冬の部	煤掃にはき出されたる病者かな	煤拂	人事
1635	明治30年	冬の部	仇は獲ず従者は病みぬ年のくれ	年の暮	時候
1636	明治30年	冬の部	神の留守病を呪ふすべをなみ	神の旅	人事
1637	明治30年	冬の部	我に疝氣炉を開くこと早かりし	爐開	人事
1638	明治30年	冬の部	時雨小集あるじの病を慰めつ	時雨	天文
1639	明治30年	冬の部	遂に起たず夜半風遠く鳴る	凧	天文
1640	明治30年	冬の部	病癒えて未だ枯れざる菊を見る	菊	植物
1641	明治30年	冬の部	山茶花や年若き僧心をやむ	山茶花	植物
1642	明治30年	冬の部	寒に中り越路に逗留すと文す	寒さ	時候
1643	明治30年	冬の部	二人まで疫に死したり年のくれ	年の暮	時候
1644	明治30年	冬の部	湯治場に冬籠しつ京の人	冬籠	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1645	明治30年	冬の部	霜の陣夜もすがら金創の痛み哉	霜	天文
1646	明治30年	冬の部	風呂吹に病みたる僧の列なりし	風呂吹	人事
1647	明治30年	冬の部	只納豆汁の温きが薬なり	納豆汁	人事
1648	明治30年	冬の部	千鳥きく我に戀あり病あり	千鳥	動物
1649	明治30年	冬の部	戀に病める海鼠もあらむ苞の中	海鼠	動物
1650	明治30年	冬の部	疫の家に豆打つ声の聞ゆなり	豆まき	人事
1651	明治30年	冬の部	ひとりものゝ病むで四五人年ごもり	年籠	人事
1652	明治30年	冬の部	旅に病むで暦の末を恨むかな	古暦	人事
1653	明治30年	冬の部	懸乞の骨折きたる群集かな	掛乞	人事
1654	明治30年	冬の部	凧に金創の薬を賣つてゐる	凧	天文
1655	明治30年	冬の部	病床に冬の夕日のすこしさす	冬	時候
1656	明治30年	冬の部	病院の窓に物干す小春哉	小春	時候
1657	明治30年	冬の部	小盗人の病むで粥喰ふ櫓火かな	櫓	人事
1658	明治30年	冬の部	捕はれて盗の婦となりつ薬喰	薬喰	人事
1659	明治30年	冬の部	玄關に火鉢を遠み薬取	火鉢	人事
1660	明治30年	冬の部	急病や十夜の戻りさはがしき	十夜	人事
1661	明治30年	冬の部	外科室に器械并べる寒さ哉	寒さ	時候
1662	明治30年	冬の部	薬喰すべく約成る木賃かな	薬喰	人事
1663	明治30年	冬の部	傷寒を醫者の争ふ師走哉	師走	時候
1665	明治30年	冬の部	一家中足袋はくことを許されず	足袋	人事
1666	明治30年	冬の部	草庵や時雨吹込む翁の像	時雨	天文
1668	明治30年	冬の部	朝の程西にたまりし落葉哉	落葉	植物
1669	明治30年	冬の部	崖下に落葉吹込む薄暗し	落葉	植物
1670	明治30年	冬の部	曉に落葉の森を流人かな	落葉	植物
1671	明治30年	冬の部	暮れんとして落葉が岡の風急なり	落葉	植物
1672	明治30年	冬の部	庭前の落葉を掃くや翁ぶり	落葉	植物
1673	明治30年	冬の部	松原に何の落葉か吹たまる	落葉	植物
1674	明治30年	冬の部	落葉踏んで行けば頻りに猿が鳴く	落葉	植物
1675	明治30年	冬の部	草鞋軽々落葉が上を踏み心	落葉	植物
1676	明治30年	冬の部	林中の落葉をふんで夜帰る	落葉	植物
1677	明治30年	冬の部	主従の落葉焚きつくる知らぬ山	落葉	植物
1679	明治30年	冬の部	正面の坐ふとんばかり明いてゐる	蒲團	人事
1680	明治30年	冬の部	一枚のふとんかぶりし二人かな	蒲團	人事
1681	明治30年	冬の部	贈られし蒲團絹にして薄かりし	蒲團	人事
1682	明治30年	冬の部	温くもりの少し残りしふとん哉	蒲團	人事
1683	明治30年	冬の部	唐艸のふとん積上げし車かな	蒲團	人事
1684	明治30年	冬の部	かつぎ入るゝ蒲團にせまき戸口かな	蒲團	人事
1685	明治30年	冬の部	ふとん足らず其角坐に入る胡坐かな	蒲團	人事
1686	明治30年	冬の部	ふとん着てしばしが程はうずくまる	蒲團	人事
1687	明治30年	冬の部	一人寐てふとん廣きを愛すかな	蒲團	人事
1688	明治30年	冬の部	抜け出でしふとんの穴に再びす	蒲團	人事
1689	明治30年	冬の部	買はまくす蒲團の幅のやゝせまき	蒲團	人事
1690	明治30年	冬の部	他国人と年忘する湯治かな	年忘	人事
1692	明治30年	冬の部	石壇の下にたまりし落葉かな	落葉	植物
1693	明治30年	冬の部	人も來ず落葉たまりし低き縁	落葉	植物
1694	明治30年	冬の部	落葉かく弥宜が娘の年ふけし	落葉	植物
1695	明治30年	冬の部	岡の上に落葉焚き居る畑かな	落葉	植物
1696	明治30年	冬の部	うす黒く水田にたまる落葉かな	落葉	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1697	明治30年	冬の部	いつのまにか何の落葉ともわかぬかな	落葉	植物
1699	明治30年	冬の部	棒鱈の乾さけ妬む愚かな	雑	雑
1700	明治30年	冬の部	乾鮭にかんてらの烟吹きつける	乾鮭	人事
1701	明治30年	冬の部	仕官してからさけを得つ年のくれ	年の暮	時候
1702	明治30年	冬の部	この師走乾鮭十駄市に入る	師走	時候
1703	明治30年	冬の部	二三子のからさけ割いて夜半亭	乾鮭	人事
1704	明治30年	冬の部	からさけを厨下に割ける素振あり	乾鮭	人事
1705	明治30年	冬の部	俳諧や遂にからさけに酒をおく	乾鮭	人事
1706	明治30年	冬の部	店先の乾鮭に喝す貧道心	乾鮭	人事
1707	明治30年	冬の部	からさけのいとからびたるをめづるかな	乾鮭	人事
1708	明治30年	冬の部	夜遅く乾鮭に飯喰ふ一人かな	乾鮭	人事
1709	明治30年	冬の部	他国にして人からさけをなつかしむ	乾鮭	人事
1710	明治30年	冬の部	村夫子素よりからさけを愛すあり	乾鮭	人事
1712	明治30年	冬の部	乗合の頭巾まぶかき女かな	頭巾	人事
1713	明治30年	冬の部	暗がりをちらと怪しきづきん哉	頭巾	人事
1714	明治30年	冬の部	人に嫁してづきんの色に好みあり	頭巾	人事
1715	明治30年	冬の部	二人立つづきんながら物物語	頭巾	人事
1716	明治30年	冬の部	古びたる頭巾あはれむ白髪哉	頭巾	人事
1717	明治30年	冬の部	只古びたるづきんにして人は亡し	頭巾	人事
1718	明治30年	冬の部	今やうのづきんかぶりし知らぬ人	頭巾	人事
1719	明治30年	冬の部	連立て朝鮮人のづきんかな	頭巾	人事
1720	明治30年	冬の部	給はりしづきんの色のさめもせず	頭巾	人事
1721	明治30年	冬の部	取りはづしづきんあはれぬ故人かな	頭巾	人事
1722	明治30年	冬の部	人老いてづきんことやうなるを着る	頭巾	人事
1723	明治30年	冬の部	相別るゝこと十年づきんなつかしき	頭巾	人事
1724	明治30年	冬の部	さし出でゝづきん見にくき男かな	頭巾	人事
1726	明治30年	冬の部	曾れらしきづきんを着たる人もなし	頭巾	人事
1728	明治30年	冬の部	俤のづきん目につくゆがみかな	頭巾	人事
1730	明治30年	冬の部	あのやうにづきんの曲がむ人なりし	頭巾	人事
1732	明治30年	冬の部	押入に乾さけ藏す易者かな	乾鮭	人事
1733	明治30年	冬の部	髭なきが師走の市にトを賣る	師走	時候
1734	明治30年	冬の部	かみくらに易者据ゑたる十夜哉	十夜	人事
1735	明治30年	冬の部	行き逢ひし醫者と易者のづきん哉	頭巾	人事
1736	明治30年	冬の部	白鹿を見たりト者を訪ふ道に	鹿	動物
1737	明治30年	冬の部	醫者ト者日向に對す冬至かな	冬至	時候
1738	明治30年	冬の部	日南す易者が門の帰花	歸り花	植物
1739	明治30年	冬の部	トを賣る門にあやしき木實哉	木の實	植物
1740	明治30年	冬の部	医ト對坐して冬至の日があたる	冬至	時候
1741	明治30年	冬の部	落葉さつと賣ト先生吹かれ兒	落葉	植物
1742	明治30年	冬の部	今猶在り银杏落葉して賣ト郎	落葉	植物
1743	明治30年	冬の部	諸木落ちてト者社頭を去る夕	落葉	植物
1744	明治30年	冬の部	落葉して賣トの床几移したる	落葉	植物
1745	明治30年	冬の部	賣トの床几移しゝ小春かな	小春	時候
1746	明治30年	冬の部	トを賣り居れば银杏の落葉かな	落葉	植物
1747	明治30年	冬の部	大道や理髮師に隣る賣ト師	雑	雑
1748	明治30年	冬の部	賣ト師を中に银杏の落葉かな	落葉	植物
1749	明治30年	冬の部	トして吉鱸釣らんと出でゝ行く	鱸	動物
1750	明治30年	冬の部	行年を貧にしてト吉なりし	行年	時候

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1751	明治30年	冬の部	笠竹に霰落來る社頭かな	霰	天文
1752	明治30年	冬の部	冬枯のト者小家す土手の下	冬枯	植物
1753	明治30年	冬の部	冬枯や賣トの旗に日が當る	冬枯	植物
1755	明治30年	冬の部	藥喰到れば少し後れたる	藥喰	人事
1756	明治30年	冬の部	聴法の人さまノに凍えたる	凍る	天文
1757	明治30年	冬の部	狐落ちて銀杏の落葉握り居る	落葉	植物
1758	明治30年	冬の部	梁に狂女笑へり冬の月	冬の月	天文
1760	明治30年	冬の部	冬籠るべくとして南向きなるよ	冬籠	人事
1761	明治30年	冬の部	枯葛の恨みんよしもあらぬ戀	枯葛	植物
1762	明治30年	冬の部	麦蒔くべく日和嬉しき朝出かな	麦蒔	人事
1763	明治30年	冬の部	家に物の古曆なんど申すなき	古曆	人事
1764	明治30年	冬の部	きれノや冬田をはしる雲の影	冬田	天文
1765	明治30年	冬の部	炭小屋に炭なくて冬の月がさす	雑	雑
1767	明治30年	冬の部	煤掃かんとちよと移したり鉢の梅	煤拂	人事
1768	明治30年	冬の部	煤掃の寒梅庭の彼方かな	煤拂	人事
1769	明治30年	冬の部	煤掃に箆を叩く夫婦かな	煤拂	人事
1770	明治30年	冬の部	憤ふらく煤なんど掃いて何かせん	煤拂	人事
1771	明治30年	冬の部	すゝはきに土器碎き発心す	煤拂	人事
1772	明治30年	冬の部	大黒の煤びたるを掃き奉る	煤拂	人事
1773	明治30年	冬の部	一ト處掃き残したる煤悲し	煤拂	人事
1774	明治30年	冬の部	煤掃に什器こわしゝ婢を罪す	煤拂	人事
1775	明治30年	冬の部	煤掃に嵐吹き込む一トしきり	煤拂	人事
1776	明治30年	冬の部	煤掃やせんすべ知らぬひとりもの	煤拂	人事
1777	明治30年	冬の部	神の子の不具なるはこの海鼠哉	海鼠	動物
1778	明治30年	冬の部	浦の昔海鼠化けたる嘶かな	海鼠	動物
1779	明治30年	冬の部	魚河岸に出會ふ他国の海鼠哉	海鼠	動物
1781	明治30年	冬の部	道にして湯婆さめなんこと悲し	湯たんぼ	人事
1782	明治30年	冬の部	おくるべく君に湯婆を温めし	湯たんぼ	人事
1783	明治30年	冬の部	獵犬の面もふらず霰かな	霰	天文
1784	明治30年	冬の部	雪の夜や犬くゝとなく庫裡の方	雪	天文
1785	明治30年	冬の部	獵犬の門守るべく老いしかな	狩	人事
1787	明治30年	冬の部	冬ごもり後ろに近きえぞが鳶	冬籠	人事
1789	明治30年	冬の部	蕪引大根引とは異にして	雑	雑
1791	明治30年	冬の部	梅一枝早きに過ぎし年の暮	年の暮	時候
1792	明治30年	冬の部	風呂吹の味噌を分つや年忘れ	年忘	人事
1794	明治30年	冬の部	沖の方時に鳴動す年の暮	年の暮	時候
1796	明治30年	冬の部	富士少し見ゆる嬉しき冬籠	冬籠	人事
1798	明治30年	冬の部	戦さやんでありなれの水臙ろなり	臙	天文
1800	明治30年	冬の部	戀十五十八椰子の月涼し	涼し	時候
1802	明治30年	冬の部	耶蘇の墓に四月の花の赤きかな	四月	時候
1804	明治30年	冬の部	菩提樹下昼寐さめたる男かな	晝寝	人事
1806	明治30年	冬の部	雁をきく萬里長城以北かな	雁	動物
1808	明治30年	冬の部	凧の鐵笛鳴て日は暮れぬ	凧	天文
1810	明治30年	冬の部	鯛と申す魚なり冬籠	冬籠	人事
1846	明治31年	冬の部	寐ぬる頃少し残りし炭火かな	炭	人事
1847	明治31年	冬の部	籠もりて炭の粉少しこぼれける	炭	人事
1848	明治31年	冬の部	炭小屋に吹雪積りし隙間哉	炭	人事
1849	明治31年	冬の部	ぬかるみに炭俵埋む戸口哉	炭俵	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1850	明治31年	冬の部	戸を推せば嵐吹込む炭火哉	炭	人事
1851	明治31年	冬の部	青白く炭小屋焼けし焰かな	炭	人事
1852	明治31年	冬の部	客去て炭火徒らに熾なる	炭	人事
1853	明治31年	冬の部	日雇の地に炭火して朝寒き	朝寒	時候
1854	明治31年	冬の部	三伏に鉄を鍛ゆる炭火かな	三伏	時候
1855	明治31年	冬の部	炭とりの底はたきけり梅の花	梅	植物
1856	明治31年	冬の部	壇上に咒文荒く壇下に炭火さかん	炭	人事
1857	明治31年	冬の部	焼跡の炭火となりし夜明かな	炭	人事
1858	明治31年	冬の部	活火炉上更に一簣の炭を投ず	炭	人事
1859	明治31年	冬の部	客もなき診断の間の炭火かな	炭	人事
1860	明治31年	冬の部	小屋の前の粉炭に霰散乱す	霰	天文
1861	明治31年	冬の部	搔きまはし搔きまはせども炭火なし	炭	人事
1862	明治31年	冬の部	吹き止めバ次第に消ゆる炭火かな	炭	人事
1863	明治31年	冬の部	それ鷹の虚空をつかむ怒かな	鷹	動物
1864	明治31年	冬の部	王若く鷹を好みてしば／＼す	鷹	動物
1865	明治31年	冬の部	寒むがるを抱きすくめつゝ湯に入れし	寒さ	時候
1866	明治31年	冬の部	湯屋を出てちょこ／＼走りさむき風	寒さ	時候
1867	明治31年	冬の部	湖南より湖北に達す氷かな	氷	天文
1868	明治31年	冬の部	明方の氷屢々響あり	氷	天文
1869	明治31年	冬の部	大根の引くべかりしを盗まれし	大根	植物
1870	明治31年	冬の部	うき人の引きわづらへる大根哉	大根	植物
1872	明治31年	冬の部	宰相を罵て時雨の山に入る	時雨	天文
1873	明治31年	冬の部	頭巾着て逢恋すべく羞かしき	頭巾	人事
1875	明治31年	冬の部	吾が頭巾人の頭巾に似て非なり	頭巾	人事
1877	明治31年	冬の部	吾が頭巾浮世のさまに似ずもがな	頭巾	人事
1878	明治31年	冬の部	水樓や千鳥月夜を郎かへる	千鳥	動物
1879	明治31年	冬の部	客を留め鳴かぬ千鳥や茶の烟	千鳥	動物
1880	明治31年	冬の部	川隈の闇に鳴きゆく千鳥かな	千鳥	動物
1881	明治31年	冬の部	小夜千鳥博多小女郎浪枕	千鳥	動物
1882	明治31年	冬の部	水に沈む廻廊の灯や鳴千鳥	千鳥	動物
1883	明治31年	冬の部	千鳥きいて泣く人もあらむ今時分	千鳥	動物
1884	明治31年	冬の部	千鳥も見えず夜の霜ふる川原哉	千鳥	動物
1885	明治31年	冬の部	川尻や丑満近く千鳥鳴く	千鳥	動物
1886	明治31年	冬の部	わかき男女とはしる千鳥鳴く	千鳥	動物
1887	明治31年	冬の部	陣門に犬吠ゆ冬の月三更	冬の月	天文
1888	明治31年	冬の部	賞もあらず鷹を見てゐる犬愚也	鷹	動物
1889	明治31年	冬の部	群犬やいくさの跡の冬の月	冬の月	天文
1890	明治31年	冬の部	杳兵衛が麦ま支にゆけば犬も行く	麦蒔	人事
1891	明治31年	冬の部	闘犬や街道の雪に血を印す	雪	天文
1892	明治31年	冬の部	老いし犬の寒夜の門をまもり居る	寒夜	時候
1894	明治31年	冬の部	鶏の尾の雫となりしみぞれかな	雫	天文
1895	明治31年	冬の部	音もなくみぞれふるなり杉木立	雫	天文
1896	明治31年	冬の部	帆重くみぞれとなりし船出かな	雫	天文
1897	明治31年	冬の部	山腹はみぞれにして山麓は雨	雫	天文
1898	明治31年	冬の部	みぞれしばししたゝかの雨となりけるよ	雫	天文
1899	明治31年	冬の部	乗合の合羽の上のみぞれかな	雫	天文
1900	明治31年	冬の部	雨かあらず雪かあらず乃ち雫かな	雫	天文
1901	明治31年	冬の部	塀側をみぞれ吹いて寒菊わなゝきぬ	雫	天文

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1902	明治31年	冬の部	みぞれ一ト日ふみ切らしたる草鞋かな	曇	天文
1903	明治31年	冬の部	寒き日のみぞれにして暮れにけり	曇	天文
1904	明治31年	冬の部	鞍壺に曇を拂ふ合羽かな	曇	天文
1905	明治31年	冬の部	傘を傾けつみぞれを滑べらかす	曇	天文
1906	明治31年	冬の部	杉の葉のみぞれ解けずして氷りけり	曇	天文
1907	明治31年	冬の部	生垣にみぞるゝ音す夫帰る	曇	天文
1908	明治31年	冬の部	寄席を出て風斜なる曇かな	曇	天文
1910	明治31年	冬の部	七十年身に病なし冬ごもり	冬籠	人事
1911	明治31年	冬の部	貢献の白象寒に病むで死す	寒	時候
1912	明治31年	冬の部	巻帙乱れ散て水仙花咲きぬ	水仙	植物
1913	明治31年	冬の部	虫の氣の姫に冊つき夜の長き	夜長	時候
1914	明治31年	冬の部	かりそめの風の心地を秋の行く	行秋	時候
1915	明治31年	冬の部	玉欄に病む目眩ゆき牡丹哉	牡丹	植物
1916	明治31年	冬の部	病むちごの屢魔はれつ明やすき	短夜	時候
1917	明治31年	冬の部	蹇の蚊帳より縁に這出でし	蚊帳	人事
1918	明治31年	冬の部	蚤に蚊に物狂はしき病かな	雑	雑
1919	明治31年	冬の部	蚊柱や疫の小村の鉦の音	蚊	動物
1920	明治31年	冬の部	病眼に梅猶寒き社前哉	梅	植物
1921	明治31年	冬の部	梅咲くや痘ありぬべく赤き注連	梅	植物
1922	明治31年	冬の部	人病むで吟骨梅の如く瘦す	梅	植物
1923	明治31年	冬の部	戀すべく蹇の猫あはれな里	猫の戀	動物
2463	明治31年	冬の部	故里ははや初冬の庭さびし	初冬	時候
2465	明治31年	冬の部	野の店の葱畑や朝の月	葱	植物
2466	明治31年	冬の部	俎板や葱に月さす臺所	葱	植物
2467	明治31年	冬の部	黒土や葱掘る背戸の霜柱	雑	雑
2468	明治31年	冬の部	庖丁やさつと迸る葱の香	葱	植物
2469	明治31年	冬の部	市に買ひし一抱の葱の長短	葱	植物
2470	明治31年	冬の部	清流に葱長きを洗ひけり	葱	植物
2471	明治31年	冬の部	葱の香やあつものを吹く卓の上	葱	植物
2472	明治31年	冬の部	葱味噌の小皿や朝の飯あつし	葱	植物
2473	明治31年	冬の部	行灯やひとりト者の葱を煮る	葱	植物
2474	明治31年	冬の部	ひともじの葎さを厭ふ女か那	葱	植物
2475	明治31年	冬の部	朝川に葱の屑を流しけり	葱	植物
2476	明治31年	冬の部	葱さげて貧乏町や星明り	葱	植物
2477	明治31年	冬の部	撰りわけて葱水仙に似たるか那	葱	植物
2478	明治31年	冬の部	大根といつれか白き葱か那	雑	雑
2479	明治31年	冬の部	居酒屋の葱かんばしく酔多し	葱	植物
2480	明治31年	冬の部	大江に葱を洗ふ舟の月	葱	植物
2481	明治31年	冬の部	塊や青きが長き葱畑	葱	植物
2482	明治31年	冬の部	葱さがす厨の偶や干からびし	葱	植物
2483	明治31年	冬の部	旭のすくや木立に隣る葱畑	葱	植物
2484	明治31年	冬の部	洗はざる葱買ふて山に帰る哉	葱	植物
2486	明治31年	冬の部	煮凍や日脚さし込む舟の窓	煮凝	人事
2487	明治31年	冬の部	いさゝかの煮凍さがす灯か那	煮凝	人事
2488	明治31年	冬の部	煮凍の豆腐をさびと申すべく	煮凝	人事
2489	明治31年	冬の部	煮凍の豆腐かみたる単か那	煮凝	人事
2490	明治31年	冬の部	煮凍の小鍋温む炭貧し	煮凝	人事
2491	明治31年	冬の部	二三子や煮凍わかつ熱の朝	煮凝	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2492	明治31年	冬の部	煮凍の豆腐俳諧の小酒もり	煮凝	人事
2493	明治31年	冬の部	煮凍の鍋の火を吹く妻もなし	煮凝	人事
2494	明治31年	冬の部	片偶や煮凍の鍋物うくて	煮凝	人事
2495	明治31年	冬の部	兀として煮凍とかす土鍋か那	煮凝	人事
2496	明治31年	冬の部	汁うすく煮凍の葱白し	煮凝	人事
2497	明治31年	冬の部	粟飯に煮凍の狸をすゝめけり	煮凝	人事
2498	明治31年	冬の部	煮凍や物かぶせたる河豚鍋	煮凝	人事
2499	明治31年	冬の部	煮凍の狸なんどや火のいぶる	煮凝	人事
2500	明治31年	冬の部	煮凍の肉喰ひ去る盗人か那	煮凝	人事
2501	明治31年	冬の部	煮凍の熊のしゝむら火明か	煮凝	人事
2503	明治31年	冬の部	浦島が子も来合はして夷講	夷講	人事
2504	明治31年	冬の部	裏町は菑蕪賣りや夷講	夷講	人事
2505	明治31年	冬の部	難船や人数駆出す夷講	夷講	人事
2506	明治31年	冬の部	既にして相撲取も見えつ夷講	夷講	人事
2507	明治31年	冬の部	大風の吹く夜なるか那夷講	夷講	人事
2508	明治31年	冬の部	夷講あるは狐にばかされつ	夷講	人事
2509	明治31年	冬の部	見知らぬが袴むづかし夷講	夷講	人事
2510	明治31年	冬の部	袴着て夷講中物めかす	夷講	人事
2511	明治31年	冬の部	夷講の酒酌む銀の栢杓かな	夷講	人事
2512	明治31年	冬の部	酒樽に月さし込むや夷講	夷講	人事
2514	明治31年	冬の部	禅寺をかりて翁忌の二三人	芭蕉忌	人事
2515	明治31年	冬の部	庵中の二三子庭前の枯尾花	枯芒	植物
2516	明治31年	冬の部	幾しぐれ墨うすれゆく笠の文字	時雨	天文
2517	明治31年	冬の部	わびぬれば只うづくまる翁の日	芭蕉忌	人事
2518	明治31年	冬の部	客僧の棒喫ひけり翁の日	芭蕉忌	人事
2519	明治31年	冬の部	枯れ / \て翁忌の庭の菊立てり	芭蕉忌	人事
2520	明治31年	冬の部	二百年の笠の雫や時雨の日	芭蕉忌	人事
2521	明治31年	冬の部	庵となる竹の雫や翁の像	芭蕉忌	人事
2522	明治31年	冬の部	芭蕉忌や即今天下什麼生の俳	芭蕉忌	人事
2523	明治31年	冬の部	二三子去て翁の像と相對す	芭蕉忌	人事
2525	明治31年	冬の部	鹿笛に草の戦ぎや落つる月	鹿	動物
2526	明治31年	冬の部	仇草と刈棄てられし小菊か那	菊	植物
2527	明治31年	冬の部	露草の露月草の月の庭	露草	植物
2528	明治31年	冬の部	秋風や草にからまる殻角大豆	秋の風	天文
2529	明治31年	冬の部	秋草の中に障子や絵師か家	秋の草	植物
2530	明治31年	冬の部	光琳の秋草画く日和か那	秋の草	植物
2531	明治31年	冬の部	草枯や入江に映る暮の雲	草枯	植物
2532	明治31年	冬の部	草すこし螢入れたるがらす哉	螢	動物
2533	明治31年	冬の部	藥草の谷かんばしき春日哉	春日	時候
2534	明治31年	冬の部	日のあたる汀の草やうす氷	薄氷	地理
2535	明治31年	冬の部	草市の草の匂ひや水を打つ	草市	人事
2536	明治31年	冬の部	下草のあるは黄色の花をつく	草花	植物
2537	明治31年	冬の部	紅葉鮒草につらぬき帰るなり	紅葉鮒	動物
2538	明治31年	冬の部	草花や障子古びし絵師が家	草花	植物
2539	明治31年	冬の部	鬪て草の実こぼす雄鷄か那	草の實	植物
2540	明治31年	冬の部	銀杏の草に落ちしが多かりし	銀杏	植物
2541	明治31年	冬の部	草敷いて鮎并べたり舟の中	鮎	動物
2542	明治31年	冬の部	力草吹散らす鷹の羽風か那	鷹	動物

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2544	明治31年	冬の部	越調や客筑を撃つ冬の月	冬の月	天文
2545	明治31年	冬の部	ぬくもりや湯婆抱いたる夢心	湯たんぼ	人事
2547	明治31年	冬の部	鳳輦や十月寒花日は南	十月	時候
2548	明治31年	冬の部	小園や冬の日影のこぼれさす	冬日	天文
2549	明治31年	冬の部	谷間の冬の朝日や閑伽をくむ	冬の朝	時候
2550	明治31年	冬の部	閒庭や少し見得たる茶の茗	茶の花	植物
2551	明治31年	冬の部	凧や又洗ふ水の進しり	凧	天文
2552	明治31年	冬の部	明方を神いますべき雲の行方哉	神の旅	人事
2553	明治31年	冬の部	木菟や凝然として晝の月	木菟	動物
2554	明治31年	冬の部	主従に粥まゐらす櫓火哉	櫓	人事
2556	明治31年	冬の部	又字刻す寒月の碑や泉岳寺	寒月	天文
2558	明治31年	冬の部	小春日や動物園の禽の声	小春	時候
2560	明治31年	冬の部	珍草や霜に花咲く植物園	霜	天文
2562	明治31年	冬の部	寒月や舟に見上るお茶の水	寒月	天文
2564	明治31年	冬の部	菜屑多き神田の市や年のゆく	行年	時候
2566	明治31年	冬の部	女多き銀坐通りや枯柳	枯柳	植物
2568	明治31年	冬の部	深川や二三子さそふ翁の日	芭蕉忌	人事
2570	明治31年	冬の部	大根や四谷街道朝車	大根	植物
2572	明治31年	冬の部	寺多き牛込の奥の冬至哉	冬至	時候
2574	明治31年	冬の部	為めに壇を築く九州探題の生海鼠	海鼠	動物
2576	明治31年	冬の部	泥舟に木葉散るなりお茶の水	木葉	植物
2578	明治31年	冬の部	相を罷めし早稲田の邸の木葉哉	木葉	植物
2580	明治31年	冬の部	寒菊に冬静なる離宮哉	冬	時候
2582	明治31年	冬の部	加賀殿のお屋敷跡や冬木立	冬木	植物
2584	明治31年	冬の部	冬枯の日は斜きぬ花やしき	冬枯	植物
2586	明治31年	冬の部	鼠小僧の墓に物いふ寒夜哉	寒夜	時候
2588	明治31年	冬の部	狸穴に近く家しぬ納豆賣	納豆	人事
2590	明治31年	冬の部	凧や蛸殻町の人ばかり	凧	天文
2592	明治31年	冬の部	小春日の銀座通や絵草紙屋	小春	時候
2594	明治31年	冬の部	水鳥に松の雫の吹散りぬ	水鳥	動物
2595	明治31年	冬の部	水鳥の見えずなりけり沼の月	水鳥	動物
2596	明治31年	冬の部	水鳥の啼立つ芦の枯葉かな	水鳥	動物
2597	明治31年	冬の部	水鳥の浮いて来るなり波朝日	水鳥	動物
2598	明治31年	冬の部	水鳥の啼く方寒し土手の月	水鳥	動物
2599	明治31年	冬の部	美しき水鳥浮ぶ御講か那	水鳥	動物
2600	明治31年	冬の部	水鳥や風に柳の枯れ尽す	水鳥	動物
2601	明治31年	冬の部	水鳥や篷に顔出す舟の月	水鳥	動物
2602	明治31年	冬の部	水鳥や酒買戻る舟の人	水鳥	動物
2603	明治31年	冬の部	水鳥や枯尽したる宮の森	水鳥	動物
2604	明治31年	冬の部	水鳥の啼くや古江に落つる月	水鳥	動物
2606	明治31年	冬の部	引残す大根たのもし雪の朝	大根	植物
2607	明治31年	冬の部	大根干す三戸の村や冬木立	大根	植物
2608	明治31年	冬の部	馬舟の朝川渡る大根か那	大根	植物
2609	明治31年	冬の部	大根舟に炊ぐ烟や朝月夜	大根	植物
2610	明治31年	冬の部	店先の蜜柑は黄なる大根か那	大根	植物
2611	明治31年	冬の部	沼に沿ふ大根畑や朝の月	大根	植物
2612	明治31年	冬の部	井戸端の大根の屑や薄氷	大根	植物
2613	明治31年	冬の部	清流に大根の土を洗ひけり	大根	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2614	明治31年	冬の部	大根切て水進む刀か那	大根	植物
2615	明治31年	冬の部	拔出でし大根の葉や霜どけぬ	大根	植物
2616	明治31年	冬の部	霜柱大根は引いてしまひけり	大根	植物
2617	明治31年	冬の部	中流を大根舟の流れけ里	大根	植物
2619	明治31年	冬の部	霜やけや痒きにさはる絹のきれ	霜焼	人事
2620	明治31年	冬の部	かんてらに河豚の眼の鈍きか那	河豚	動物
2621	明治31年	冬の部	入定を猶風の吹止まず	凧	天文
2622	明治31年	冬の部	暖かき初の亥の子や里帰り	亥の子	人事
2623	明治31年	冬の部	北風や村の出口の葱畑	葱	植物
2624	明治31年	冬の部	薬喰に皮羽織着たり主じ顔	薬喰	人事
2625	明治31年	冬の部	薬喰唐机など片寄せぬ	薬喰	人事
2626	明治31年	冬の部	草枯や暮の雲出る裏の山	草枯	植物
2627	明治31年	冬の部	護摩壇にしぐれのしぶく灯哉	時雨	天文
2628	明治31年	冬の部	冬の夜の厨に葱をさがし得つ	葱	植物
2629	明治31年	冬の部	柴漬の舟に小魚や午の雨	柴漬	人事
2630	明治31年	冬の部	炉開いて伯夷叔齊を思ふか那	爐開	人事
2631	明治31年	冬の部	炉開の二階に落つる日脚か那	爐開	人事
2632	明治31年	冬の部	炉開の庭に赤松偃蹇す	爐開	人事
2633	明治31年	冬の部	炉開けば秀次殿の使か那	爐開	人事
2634	明治31年	冬の部	唐様の文机を得つ炉を開く	爐開	人事
2635	明治31年	冬の部	炉開や麓の里の鶏の声	爐開	人事
2637	明治31年	冬の部	納豆買ふ町のはづれやうらなひ者	納豆	人事
2638	明治31年	冬の部	精進に納豆の苞のくさきか那	納豆	人事
2639	明治31年	冬の部	納豆賣の老いしが遅く来りけり	納豆	人事
2640	明治31年	冬の部	山寺や松風起る納豆汁	納豆汁	人事
2641	明治31年	冬の部	禅寺や納豆を叩く曉の雲	納豆	人事
2642	明治31年	冬の部	五十にして悟らぬ僧や納豆うつ	納豆	人事
2643	明治31年	冬の部	門前や納豆賣る婆子齒がぬけし	納豆	人事
2644	明治31年	冬の部	納豆賣戻るや寺の裏畑	納豆	人事
2645	明治31年	冬の部	朝曇舟に納豆を叩くか那	納豆	人事
2646	明治31年	冬の部	葱の香や熟のあしたの納豆汁	納豆汁	人事
2647	明治31年	冬の部	寺かりて連歌の会や納豆汁	納豆汁	人事
2648	明治31年	冬の部	俳諧は且つ三斛の納豆汁	納豆汁	人事
2650	明治31年	冬の部	鉢叩来る夜となりぬ寐ざめがち	鉢叩	人事
2651	明治31年	冬の部	明方や橋を越えたる鉢叩	鉢叩	人事
2652	明治31年	冬の部	乾坤を叩き尽して鉢叩	鉢叩	人事
2653	明治31年	冬の部	鉢叩風に聞えずなりにけり	鉢叩	人事
2654	明治31年	冬の部	鉢叩の妻てふものを見まほしき	鉢叩	人事
2655	明治31年	冬の部	米量る妻もありけり鉢叩	鉢叩	人事
2656	明治31年	冬の部	鉢叩昼は飯喰ふ男か那	鉢叩	人事
2657	明治31年	冬の部	子もありて悲しきものよ鉢叩	鉢叩	人事
2658	明治31年	冬の部	鉢叩二人粥喰ふ昼の宿	鉢叩	人事
2659	明治31年	冬の部	鉢叩戻れば軒の朝の月	鉢叩	人事
2660	明治31年	冬の部	鉢叩昼はひさごに潜むべし	鉢叩	人事
2661	明治31年	冬の部	鉢叩も来ぬ夜となりて冬わびし	鉢叩	人事
2662	明治31年	冬の部	鉢叩聞えずなりて夜明か那	鉢叩	人事
2663	明治31年	冬の部	交りや鉢叩に隣る納豆賣	雑	雑
2664	明治31年	冬の部	鉢叩わが妻起す戸口か那	鉢叩	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2666	明治31年	冬の部	崖の上に月落ちかゝる氷柱か那	垂氷	天文
2667	明治31年	冬の部	草庵や氷柱もさがる雪の朝	雪	天文
2668	明治31年	冬の部	洩るゝ日や氷柱の落つる杉木立	垂氷	天文
2669	明治31年	冬の部	岩山や氷柱輝く暁の星	垂氷	天文
2670	明治31年	冬の部	巖窟に氷柱見上る雫か那	垂氷	天文
2671	明治31年	冬の部	日にうとき石灯籠の氷柱か那	垂氷	天文
2672	明治31年	冬の部	水洒れて滝美しき氷柱か那	垂氷	天文
2673	明治31年	冬の部	滝壺に氷柱の下る五更か那	垂氷	天文
2674	明治31年	冬の部	金碧や氷柱の垂るゝ観音堂	垂氷	天文
2675	明治31年	冬の部	明方の岩に氷柱や滝しぶき	垂氷	天文
3663	明治32年	冬の部	さゝ鳴や山に折るべき花もなし	笹鳴	動物
3664	明治32年	冬の部	枯菊と小さき卒塔婆流れよる	枯菊	植物
3665	明治32年	冬の部	帰花咲くべくも見えぬ老木哉	歸り花	植物
3666	明治32年	冬の部	炉開に何の家例もなかりけり	爐開	人事
3667	明治32年	冬の部	よき水や大根も洗ひ葉も洗ひ	大根	植物
3668	明治32年	冬の部	茶の苔僅かに白し朝煙	茶の花	植物
3669	明治32年	冬の部	見出てる落葉の中の柘榴かな	落葉	植物
3670	明治32年	冬の部	霰うつや石の不動の鼻柱	霰	天文
3671	明治32年	冬の部	時雨るゝや舩に物煮る古き鍋	時雨	天文
3672	明治32年	冬の部	旅なれぬ若き女神もおはすらむ	神の旅	人事
3673	明治32年	冬の部	枯菊や庭に風ふく冬構	雑	雑
3674	明治32年	冬の部	埋火や既にして又かき廻す	埋火	人事
3675	明治32年	冬の部	傳來の大杯や夷子講	夷講	人事
3676	明治32年	冬の部	初氷汀は芹の葉を青み	初氷	天文
3677	明治32年	冬の部	痛棒を喫して冬の月に座す	冬の月	天文
3678	明治32年	冬の部	北風となりて小春の夕さむし	小春	時候
3679	明治32年	冬の部	炭ついで炭の粉をふく青壘	炭	人事
3680	明治32年	冬の部	傾くる笠に雲の雫かな	雲	天文
3681	明治32年	冬の部	若うして炬燵はなれぬ病かな	炬燵	人事
3682	明治32年	冬の部	亡妻の俤を見る櫓火かな	櫓	人事
3683	明治32年	冬の部	座ふとんを叩て物に激すけり	雑	雑
3684	明治32年	冬の部	鴨の毛の風に逆立つ氷かな	雑	雑
3685	明治32年	冬の部	鷹狩の同じ扮装や十二人	鷹狩	人事
3686	明治32年	冬の部	口切や庵の行事の覚書	口切	人事
3687	明治32年	冬の部	二十年昔となりし頭巾哉	頭巾	人事
3688	明治32年	冬の部	煮凍をとかせば鹿の脂哉	煮凝	人事
3689	明治32年	冬の部	二合半の酒温むる世帯かな	温め酒	人事
3690	明治32年	冬の部	顔見せや言葉通ぜぬ和蘭人	顔見世	人事
3691	明治32年	冬の部	お十夜の後世願はぬ人もなし	十夜	人事
3692	明治32年	冬の部	お妾は美人なりけり玉子酒	玉子酒	人事
3693	明治32年	冬の部	はにかむて巨燵に遠き目見え哉	炬燵	人事
3694	明治32年	冬の部	湯婆さめて悲しき事もありぬべし	湯たんぼ	人事
3695	明治32年	冬の部	律の寺山茶花の垣高うして	山茶花	植物
3696	明治32年	冬の部	をしどりの離れては又寄そひぬ	鴛鴦	動物
3697	明治32年	冬の部	神棚に巻納めけり古こよみ	古曆	人事
3698	明治32年	冬の部	善兵衛はいんでしまぬ薬喰	薬喰	人事
3699	明治32年	冬の部	年の市人に物やる切支丹	年の市	人事
3700	明治32年	冬の部	頸剃て寒かる師走八日哉	師走	時候

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3701	明治32年	冬の部	紅筆で氷柱をそむる遊哉	垂氷	天文
3702	明治32年	冬の部	薬うりの口上手なり胼くすり	靴	人事
3703	明治32年	冬の部	頑の妻を持ちけり薬喰	薬喰	人事
3704	明治32年	冬の部	老樂やよき娘持つ網代守	網代	人事
3705	明治32年	冬の部	寒菊に炭のほこりや炭俵	寒菊	植物
3706	明治32年	冬の部	納豆汁其曉の松の風	納豆汁	人事
3707	明治32年	冬の部	寂しさや炉のなき宿の古行燈	圍爐裏	人事
3708	明治32年	冬の部	降積る雪や湯婆の湯をすつる	雪	天文
3709	明治32年	冬の部	籠にあまる葱の葉青き霰哉	霰	天文
3710	明治32年	冬の部	小夜千鳥四條渡れば祇園町	千鳥	動物
3711	明治32年	冬の部	市中に熊の肉賣るあられ哉	霰	天文
3712	明治32年	冬の部	草枯れや物に詣づる女づれ	草枯	植物
3713	明治32年	冬の部	釣干菜日の丸の旗ひるがへり	干菜	人事
3714	明治32年	冬の部	耄碌のはやらぬ頭巾きたりけり	頭巾	人事
3715	明治32年	冬の部	水鳥や城の後の古き沼	水鳥	動物
3716	明治32年	冬の部	老居士の髭の汚れや納豆汁	納豆汁	人事
3717	明治32年	冬の部	枯葦や偶々緋鯉泳き去る	枯蘆	植物
3718	明治32年	冬の部	外套の赤きをつけて猿芝居	外套	人事
3719	明治32年	冬の部	いさかひの頭巾を取るや大童	頭巾	人事
3720	明治32年	冬の部	神を思ふ心切なり神のるす	神の旅	人事
3721	明治32年	冬の部	宵々の灯火くらし冬こもり	冬籠	人事
3722	明治32年	冬の部	大徳を泊めて風呂吹参らせぬ	風呂吹	人事
3723	明治32年	冬の部	炭取を投出しけり雪の上	雪	天文
3724	明治32年	冬の部	火を起す土の火鉢や佗住居	火鉢	人事
3725	明治32年	冬の部	引っかゝる祭の旗や冬木立	冬木	植物
3726	明治32年	冬の部	熊賣の來て待つ雪の渡哉	雪	天文
3727	明治32年	冬の部	達磨忌や土の達磨の冷かに	達磨忌	人事
3728	明治32年	冬の部	風呂吹の冷えかゝりけり膳の上	風呂吹	人事
3729	明治32年	冬の部	風呂吹に口を焼いたる僧都哉	風呂吹	人事
3730	明治32年	冬の部	風呂吹を盛上にけり佛の椀	風呂吹	人事
3731	明治32年	冬の部	風呂吹の鍋をすゑたる廣間哉	風呂吹	人事
3732	明治32年	冬の部	炭焼の或夜風呂吹したりけり	雑	雑
3733	明治32年	冬の部	風呂吹の味噌残りたる小皿哉	風呂吹	人事
3734	明治32年	冬の部	風呂吹の腹の具合や酒ほしき	風呂吹	人事
3735	明治32年	冬の部	殿原の腹立兒やお鷹狩	鷹狩	人事
3736	明治32年	冬の部	鷹狩の岩山暮れて風強し	鷹狩	人事
3737	明治32年	冬の部	鷹狩や吹飛されん握めし	鷹狩	人事
3738	明治32年	冬の部	鷹狩の殿をお諫め申しけり	鷹狩	人事
3739	明治32年	冬の部	鷹狩や黄金賜る小百姓	鷹狩	人事
3740	明治32年	冬の部	鷹狩やせうとの君は文の道	鷹狩	人事
3741	明治32年	冬の部	鷹狩の白馬の人や我が敵	鷹狩	人事
3742	明治32年	冬の部	鷹狩の殿若うして短氣哉	鷹狩	人事
3743	明治32年	冬の部	鷹狩の途に出会ひし念者哉	鷹狩	人事
3744	明治32年	冬の部	鷹狩や武道を励む二少年	鷹狩	人事
3745	明治32年	冬の部	眼を睜けり生海鼠四方の志	海鼠	動物
3746	明治32年	冬の部	雪車に乗る若き女房や人の門	雪舟	人事
3747	明治32年	冬の部	小火鉢や人の女房の遠慮勝	火鉢	人事
3748	明治32年	冬の部	煤掃いて松の翠を眺めけり	煤拂	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3749	明治32年	冬の部	温石に湯婆に母の悲しかり	雑	雑
3750	明治32年	冬の部	寒声や駆落したる隣の子	寒声	人事
3751	明治32年	冬の部	花活の花のしほみや古暦	古暦	人事
3752	明治32年	冬の部	いさゝかのにくみ心や水祝	水祝	人事
3753	明治32年	冬の部	河豚喰ふて死んだ便りもなかりけり	河豚	動物
3754	明治32年	冬の部	年の内に春は立ちけり古今集	年内立春	時候
3755	明治32年	冬の部	蠟燭の既に五寸や年ごもり	年籠	人事
3756	明治32年	冬の部	茶の花や旦に荒き石の霜	茶の花	植物
3757	明治32年	冬の部	乾鮭に文字を刻まん古法帖	乾鮭	人事
3758	明治32年	冬の部	寸鉄を帯ふるものなし桃青忌	芭蕉忌	人事
3759	明治32年	冬の部	忙しの人を誘ひて年忘	年忘	人事
3760	明治32年	冬の部	乾鮭のからび果てたり春星忌	蕪村忌	人事
3761	明治32年	冬の部	北国の雪の話や薬賣	雪	天文
3762	明治32年	冬の部	笹鳴や落葉を照らす日の光	笹鳴	動物
3763	明治32年	冬の部	うつくまり寒夜の吟や影法師	寒夜	時候
3764	明治32年	冬の部	君がため岡見の憂心かな	岡見	人事
3765	明治32年	冬の部	ふし漬に大根の葉などかゝりけり	大根	植物
3766	明治32年	冬の部	餅搗の宵に返りぬ馬鹿息子	餅搗	人事
3767	明治32年	冬の部	追儼すんで蠟燭輝けり	追儼	人事
3768	明治32年	冬の部	寒月や石に當て影法師	寒月	天文
3769	明治32年	冬の部	反古に包むみかんの皮や冬坐敷	冬座敷	人事
3770	明治32年	冬の部	其まゝに死んでしまひし生海鼠哉	海鼠	動物
3771	明治32年	冬の部	神前の水氷りけり寒椿	冬椿	植物
3772	明治32年	冬の部	煮凍や梁にさす夜半の月	煮凝	人事
3773	明治32年	冬の部	大風に吹かれて去りぬ鯨うり	鯨	動物
3774	明治32年	冬の部	書出しをおいてにたるけはひ哉	掛乞	人事
3775	明治32年	冬の部	寒念佛都是女うつくしき	寒念佛	人事
3776	明治32年	冬の部	雪達摩あかつきの星と相對す	雪達磨	人事
3777	明治32年	冬の部	はねかへる鮭の市の霰かな	霰	天文
3778	明治32年	冬の部	はした女の眞赤な顔や雪つぶて	雪遊び	人事
3779	明治32年	冬の部	見せものゝけもの咆ゆるや年の市	年の市	人事
3780	明治32年	冬の部	水仙の鉢の氷や花の精	水仙	植物
3906	明治33年	冬の部	嚴霜や筋骨痛き座禪石	霜	天文
3907	明治33年	冬の部	霜ふるや夜半の潮平かに	霜	天文
3908	明治33年	冬の部	しも晴の筑波や麦は二寸程	霜	天文
3909	明治33年	冬の部	霜よけを除けば花の薫じけり	霜よけ	人事
3910	明治33年	冬の部	恐ろしき地震の後や荒き霜	霜	天文
3911	明治33年	冬の部	霜とんで声あり達摩渡江の凶	霜	天文
3912	明治33年	冬の部	花さげて霜解に行脳み玉ふ	霜	天文
3913	明治33年	冬の部	花屋去て花屑散りぬ霜の庭	霜	天文
3914	明治33年	冬の部	山の氣の黒金臭し霜柱	霜柱	天文
3915	明治33年	冬の部	瀟湘や水に霜ふる朝月夜	霜	天文
3916	明治33年	冬の部	木枯や山のけものゝ糞乾き	凧	天文
3917	明治33年	冬の部	禮樂や魯の正月の朝朗	正月	時候
3918	明治33年	冬の部	夫子老いて二三子と谷の梅を見る	梅	植物
3919	明治33年	冬の部	乾坤の中に生れし海鼠かな	海鼠	動物
3920	明治33年	冬の部	紅きもの着たるもまじり寒念佛	寒念佛	人事
3921	明治33年	冬の部	正面に雪ふりかゝり寒念佛	寒念佛	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3922	明治33年	冬の部	暁天の氣を吹く老や寒念佛	寒念佛	人事
3923	明治33年	冬の部	難有きものに思ひぬ寒念佛	寒念佛	人事
3924	明治33年	冬の部	大雪の朝な / \ や寒念佛	寒念佛	人事
3925	明治33年	冬の部	講中の世話やきぢゝや寒念佛	寒念佛	人事
3926	明治33年	冬の部	西方の空も尊し寒念佛	寒念佛	人事
3927	明治33年	冬の部	大寒に入りし旦や寒念佛	寒念佛	人事
3928	明治33年	冬の部	恥かしの娘を誘ひ寒念佛	寒念佛	人事
10531	明治33年	冬の部	冷たかや水を飲まんと水に顔	冷たし	時候
10548	明治33年	冬の部	吹上ぐる谷の狭霧や蔦の橋	狭霧	天文
10569	明治33年	冬の部	烏瓜青きを獲たり茶の木原	烏瓜	植物
10577	明治33年	冬の部	鳩吹いて生き残りけり昔人	鳩	動物
4169	明治34年	冬の部	洋服に足駄は寒し小役人	寒さ	時候
4170	明治34年	冬の部	河豚ふゞき海鼠みぞるゝ形かな	雑	雑
4171	明治34年	冬の部	口切や布衣の交り面白き	口切	人事
4172	明治34年	冬の部	山もしぐれ海もしぐれつ天が下	時雨	天文
4173	明治34年	冬の部	俳諧は五升の酒や御命講	御命講	人事
4174	明治34年	冬の部	絨緞の花に据えたる火鉢かな	火鉢	人事
4175	明治34年	冬の部	染物の絹をも裂かん霰かな	霰	天文
4176	明治34年	冬の部	榮耀に飼はるゝ鷹の羽色哉	鷹	動物
4177	明治34年	冬の部	風呂吹の淡きに如かず河豚汁	河豚汁	人事
4178	明治34年	冬の部	河豚喰て発句に俗を罵りぬ	河豚	動物
4179	明治34年	冬の部	凧や貧乏神の火の車	凧	天文
4180	明治34年	冬の部	霜柱踏出てにけり朱の杵	霜柱	天文
4181	明治34年	冬の部	茶の花も小鳥も寒き日なりけり	寒さ	時候
4182	明治34年	冬の部	吾夫を尋ねあてたり薬喰	薬喰	人事
4183	明治34年	冬の部	納豆汁其曉の嶺の雲	納豆汁	人事
4184	明治34年	冬の部	落人の詮議かしこみ楳火哉	楳	人事
4186	明治34年	冬の部	別れとも知らぬ海鼠のあはれ哉	海鼠	動物
4188	明治34年	冬の部	乾鮭に御して渡海の心ざし	乾鮭	人事
4190	明治34年	冬の部	乾鮭や小鼻大鼻曲り鼻	乾鮭	人事
4192	明治34年	冬の部	乾鮭に寒梅の香もなかりけり	乾鮭	人事
4194	明治34年	冬の部	乾鮭や焚く枯菊の薄烟	乾鮭	人事
4195	明治34年	冬の部	天門の氷を開く力かな	氷	天文
4196	明治34年	冬の部	芭蕉忌のふとんかふりて物をよむ	芭蕉忌	人事
4197	明治34年	冬の部	夜興引の咎められたる迷ひ哉	夜興引	人事
4198	明治34年	冬の部	君が代は綿入足袋の老樂し	足袋	人事
4199	明治34年	冬の部	炉開に妻は男の子を生めり	爐開	人事
4200	明治34年	冬の部	詭の大蠟燭やえびす講	夷講	人事
4201	明治34年	冬の部	水仙にかゝる檜の匏屑	水仙	植物
4202	明治34年	冬の部	野は枯れて殺生石の氣騰りぬ	枯野	天文
4203	明治34年	冬の部	埋火の貧しからさる調度かな	埋火	人事
4204	明治34年	冬の部	隠現の鬼形や庭燎ふけにけり	焚火	人事
4205	明治34年	冬の部	袴着や母は氏なきへりくだり	袴着	人事
4206	明治34年	冬の部	蛇を見る神の社の春近し	春近し	時候
4207	明治34年	冬の部	冴る月人を苦しむ姿かな	冴る	時候
4208	明治34年	冬の部	吹雪やんで川明らかに流れけり	吹雪	天文
4209	明治34年	冬の部	山見れば眠れり君はあらずして	山眠る	天文
4210	明治34年	冬の部	珍草や寒の雨ふる植物園	寒の雨	天文

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4211	明治34年	冬の部	薬喰ふ小角力二人三人かな	薬喰	人事
4212	明治34年	冬の部	寒垢離や滝の不動の灯明か	寒垢離	人事
4213	明治34年	冬の部	年のくれ人參のんで首くゝり	年の暮	時候
4214	明治34年	冬の部	煤掃の煤に汚れず美なる珠	煤拂	人事
4215	明治34年	冬の部	掛乞の昔語となりけり	掛乞	人事
4216	明治34年	冬の部	夜明くるや追儼の宵を忘れ兒	追儼	人事
4217	明治34年	冬の部	よき酒に卵子割ったる炭火哉	炭	人事
4218	明治34年	冬の部	鯨突鯨の如き漢子哉	鯨	動物
4219	明治34年	冬の部	寐て起きて / \ 春を待つばかり	春待	時候
4220	明治34年	冬の部	炭うりの水仙さげて戻りけり	炭売	人事
4221	明治34年	冬の部	寒念佛例の坊主の頓死哉	寒念佛	人事
4222	明治34年	冬の部	雪沓の痕恐ろしき廟かな	雪沓	人事
4223	明治34年	冬の部	お火焚の跡の寒さや朝詣	御火焚	人事
4225	明治34年	冬の部	歌をよむ妻もこもれり雪車の中	雪舟	人事
4226	明治34年	冬の部	玉の如き男の子菖蒲の産湯哉	菖蒲	植物
4227	明治34年	冬の部	花に酔ひてぬるき湯に入る疲かな	花	植物
4228	明治34年	冬の部	さめやすき湯婆も悲し思ひやり	湯たんぼ	人事
4608	明治35年	冬の部	鷹狩や御手に一枝寒の花	鷹狩	人事
4609	明治35年	冬の部	鷹狩や皆曰く紂討つべしと	鷹狩	人事
4610	明治35年	冬の部	凧の確氷は悲し海の色	凧	天文
4611	明治35年	冬の部	金槐集海にしぐるゝ姿かな	時雨	天文
4613	明治35年	冬の部	夢に見る滄海の珠や冬ごもり	冬籠	人事
4614	明治35年	冬の部	山門を誦じ出でけり冬至の詩	冬至	時候
4615	明治35年	冬の部	行逢ひて衣の香にくし雪車の中	雪舟	人事
4616	明治35年	冬の部	水仙や冬鶯の死にし曉	水仙	植物
4617	明治35年	冬の部	鴛鴦や枯木吹ちる水の上	鴛鴦	動物
4618	明治35年	冬の部	年忘腹中の詩を盗まれし	年忘	人事
4619	明治35年	冬の部	発句帖萬句もあれと祝ひ言	雑	雑
4620	明治35年	冬の部	寒の入る刻とやなりぬ水の音	寒の入	時候
4621	明治35年	冬の部	粥柱赤きもの着て老菜子	粥柱	人事
4622	明治35年	冬の部	鐵鉢に米も少し寒の梅	寒梅	植物
4623	明治35年	冬の部	初夢の故人や既に執金吾	初夢	人事
4624	明治35年	冬の部	闇汁に風流貌の干菜かな	干菜	人事
4625	明治35年	冬の部	人の妻干菜の蔭にかくれけり	干菜	人事
4626	明治35年	冬の部	こゝにあると人に應へて干菜つる	干菜	人事
4627	明治35年	冬の部	油繪や干菜も下がり森の色	干菜	人事
4628	明治35年	冬の部	君が手のつめたき戀や干菜編み	干菜	人事
4629	明治35年	冬の部	赤蕪の赤きは一時流行ぞ	蕪	植物
4630	明治35年	冬の部	袴着や肌に守の觀世音	袴着	人事
4631	明治35年	冬の部	寒の入五更の豆腐声もなし	寒の入	時候
4632	明治35年	冬の部	袴着や朝日豊さか上りけり	袴着	人事
4633	明治35年	冬の部	難有や納豆に花が咲く法話	納豆	人事
4634	明治35年	冬の部	里神樂祢宜の娘を見たりけり	神樂	人事
4635	明治35年	冬の部	御神樂や五十鈴川波さゞら波	神樂	人事
4636	明治35年	冬の部	雪をふんで杉の下道神樂人	雪	天文
4637	明治35年	冬の部	歌かるた若き従兄の文學士	歌留多	人事
4638	明治35年	冬の部	都府楼の瓦の色や春を待つ	春待	時候
4639	明治35年	冬の部	珍草に春待つ人や鴻鷗館	春待	時候

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4640	明治35年	冬の部	春待つや或はかきからを丘に焚く	春待	時候
4641	明治35年	冬の部	春待つや美人を見ざること久し	春待	時候
4642	明治35年	冬の部	春待つや時々登る古城の上	春待	時候
4643	明治35年	冬の部	清浄や神樂に雪を焚く夕	雪	天文
4644	明治35年	冬の部	そば湯吹く兒も賢愚や台所	蕎麥湯	人事
4645	明治35年	冬の部	ぬくめ鳥松の梢に旭出でたり	暖め鳥	動物
4646	明治35年	冬の部	荒浪のつらゝかみ去る窟かな	垂氷	天文
4647	明治35年	冬の部	兒見世や寐たる姿の東山	顔見世	人事
4648	明治35年	冬の部	柴漬の獲物買ひけり岸の人	柴漬	人事
4649	明治35年	冬の部	老人の何に驚く岡見哉	岡見	人事
4650	明治35年	冬の部	年木こり雪に黄金を拾ひけり	雪	天文
4651	明治35年	冬の部	乾鮭に眉を描かんとぞ思ふ	乾鮭	人事
4652	明治35年	冬の部	風呂吹を召され候ぞと申す	風呂吹	人事
4653	明治35年	冬の部	顔見せや江戸は名高き男伊達	顔見世	人事
4654	明治35年	冬の部	しはぶきや雑魚寐に洩れし人はたれ	雑魚寝	人事
4655	明治35年	冬の部	垣越に山の眠りや寒の雨	寒の雨	天文
4656	明治35年	冬の部	納豆の寂寞として苞の中	納豆	人事
4657	明治35年	冬の部	河豚汁豆腐軽くして浮きぬ	河豚汁	人事
4658	明治35年	冬の部	納豆汁豆腐や白く潔し	納豆汁	人事
4659	明治35年	冬の部	方正を守る豆腐や狸汁	狸汁	人事
4660	明治35年	冬の部	薬喰豆腐は白き君が兒	薬喰	人事
4661	明治35年	冬の部	煮凍の豆腐や墨子悲めり	煮凝	人事
4662	明治35年	冬の部	けふもやく夕げの豆腐冬ごもり	冬籠	人事
4663	明治35年	冬の部	豆腐汁坐に松影の冬至哉	冬至	時候
4664	明治35年	冬の部	法話未だ已まず豆腐既に氷りぬ	凍る	天文
4665	明治35年	冬の部	詩債あり除夜も豆腐の煮ゆるまで	除夜	時候
4666	明治35年	冬の部	味ひや豆腐の焦げも冬ごもり	冬籠	人事
4667	明治35年	冬の部	袴着やこゝに年ふる陰陽師	袴着	人事
4668	明治35年	冬の部	袴着や軒を并べて三長者	袴着	人事
4669	明治35年	冬の部	袴着の古式はめでた尽し哉	袴着	人事
4670	明治35年	冬の部	納豆臭き寺の男や物不知	納豆	人事
4671	明治35年	冬の部	納豆の容りも厨かな	納豆	人事
4672	明治35年	冬の部	空山に納豆打つ音響きけり	納豆	人事
4673	明治35年	冬の部	納豆汁杓子にさはる物もなし	納豆汁	人事
4674	明治35年	冬の部	雪一白岩戸神樂に夜明けたり	神樂	人事
4675	明治35年	冬の部	冬菜汁葱の臭きを厭ひけり	冬菜	植物
4676	明治35年	冬の部	書きすてつ丸めつ火鉢の火に投ず	火鉢	人事
4677	明治35年	冬の部	逆鱗にふれてまかでぬ枯柳	枯柳	植物
4678	明治35年	冬の部	人の子のあかぎれの手や涙ふく	鞞	人事
4679	明治35年	冬の部	黒土や葱の折葉も凍つきて	葱	植物
4680	明治35年	冬の部	子に頭巾かぶり / \ と一茶坊	頭巾	人事
4681	明治35年	冬の部	寒月やけもの突くべき竹の槍	寒月	天文
4682	明治35年	冬の部	北風の雪吹つける枯木哉	吹雪	天文
4683	明治35年	冬の部	玉子酒夜間物かく小説家	玉子酒	人事
4684	明治35年	冬の部	馬に鍼す冬一日をトしけり	冬	時候
4685	明治35年	冬の部	鐘冴えて聞えん灯見ゆる野の小家	冴る	時候
4686	明治35年	冬の部	昔人の此夜の詩句や年ごもり	年籠	人事